

(一)爾の時云云
自下能座の菩薩を
明す。

(二)齊、經の音釋
に云く、勝と同じ
に造る。本經には齊輪

して量百萬の三千大千世界に等し、衆の妙寶を以て間錯し莊嚴せり、一切世間の境界に超過せり、出世善根の生起する所なり、恒に光明を放て普ねく法界を照す、諸の天處に能く有る所に非ず、毗瑠璃と摩尼寶とを莖と爲し、栴檀王を臺と爲し、馬瑙を鬚と爲し、閻浮檀金を葉と爲し、衆寶を藏と爲し、寶網彌覆せり、十三大千世界の微塵數の蓮華を以て眷屬と爲す。(三)爾の時に菩薩、此の華座に坐して身相の大小正しく相ひ稱可へり、無量の菩薩を以て眷屬と爲し、各の餘華に坐して周迴し圍遶せり、一に各の百萬三昧を得て、大菩薩に向て一心に瞻仰す。佛子此の大菩薩と、並びに其の眷屬との華座に坐する時に、所有の光明と及び言音と普ねく十方法界に充滿す、一切世界咸悉く震動して惡趣休息し國土嚴淨なり、同行の菩薩來集せざること靡し。佛子、此の菩薩華座に坐する時に、兩足の下より光を放ちて普ねく十方の諸の大地獄を照す、兩膝輪より光を放て普ねく十方の諸の畜生趣を照す、(四)齊の中より光を放て普ねく十方の閻羅王界を照す、左右の脇より光を放て普ねく十方の人趣を照す、皆な衆苦を滅す、兩手の中より光を放て普ねく十方一切の諸天と阿修羅とを照す、兩肩の上より光を放て普ねく十方一切の聲聞を照す、其の項背より光を放て普ねく十方の辟支

(一)爾の時云云
諸佛の授與を明す

(二)爾の時云云
受職の位を結成す
(三)唯識論云云
自下は正しく究竟
位を陳ぶ。此云云
(四)此と云云
此より下は論釋を抄
録するに廣文中に
於て要文を採擷し
異義を擧ぐる處は
直ちに正義を抽く
が故に、而も文簡
にして、學者の考を
俟つ。

佛身を照す、其の面門より光を放て普ねく十方の初始發心より乃至九地の諸の菩薩を照す、兩の眉間より光を放て普ねく十方の受職の菩薩を照す、其の頂上より百萬阿僧祇の三千大千世界の微塵數の光明を放て、普ねく十方一切世界の諸佛如來の道場衆會を照して、諸の摩尼を雨らして以て供養をなす、復た十方を繞ること十迴を經已て、諸の如來の足下より入る。(五)爾の時に諸佛、某の世界の中の某の菩薩摩訶薩受職の位に到ると知て、眉間より清淨の光明を出したまふを増益一切智神通と名く、普ねく盡虚空遍法界を照し已て、而もこの菩薩の會上に來至す、周迴し右繞し莊嚴を示現せること已て、大菩薩の頂上より入りぬ。(六)爾の時に菩薩百萬の三昧を得るを名けて、已に受職位を得るの境界と爲す、十力を具足して佛數に墮在す、若しは身と座と俱に世界に遍せり。(七)唯識論の究竟位の頌に云く。

此は即ち無漏界なり 不思議なり善なり常なり
安樂なり解脱身なり 大牟尼なるを法と名く

(八)此といは、謂く此の前の菩提涅槃の二轉依の果なり、即ち是れ究竟の無漏界に攝す、諸漏永く盡きて漏の隨増するに非ず、性淨にして圓かに明かなり、故に無漏と名く。界

(一) 清淨法界云云
此の一段は小乗の
難を通釋す。
(二) 四智心品成
事・妙觀・平等・大
圓の諸智心品。

(三) 此の轉依果云
云。自下は第二句
を釋す。

(四) 巧便 善巧方
便の意。

(五) 此れは又云云
自下は第三句を釋
す。(六) 大覺云云 第
四句を釋す。(七) 法
身の非ず、佛中
の法身に非ず、佛
は煩惱を離れ給ふ
故に解脫身と名け
る所知障を離れて
邊の徳を具するを
以て法身といふ。

といは是れ藏の義なり、此れが中に無邊の希有の大功德を包含するが故に。(一) 清淨法界と(二) 四智心品とは滅と道との諦に攝む、故に唯だ無漏なり、謂く佛の功德と及び身と土との等きは、皆是れ無漏種姓に生せられたり、故に佛身の中には十八界の等きは皆な悉く具足して而も純無漏なり。(三) 此の轉依の果は又た不思議なり、尋思と言議との道を超過するが故に。此は又た是れ善なり、白法の性なるが故に、清淨法界は生滅を遠離して極めて安隱なるが故に、四智心品は妙用無方なり極めて(四) 巧便なるが故に、二種は皆な順益の相あるが故に、不善に違するが故に俱に説て善となす。此は又た是れ常なり、盡くる期なきが故に、清淨法界は生も無く滅も無く性變易なし、故に説て常と爲す、四智心品は所依常なるが故に、斷盡することも無きが故に亦た説て常と爲す、自性常には非ず、因より生ずるが故に。(五) 此れは又た安樂なり逼惱なきが故に、清淨法界は衆相を寂靜せり故に安樂と名く、四智心品は永へに惱害を離れたり故に安樂と名く。二乗の所得の二轉依の果は、唯だ永へに煩惱障の縛のみを遠離せり、殊勝の法無きが故に但だ解脫身とのみ名く。(六) 大覺世尊は無上の寂默の法を成就したまへり、故に大牟尼と名く。此の牟尼尊の所得の二果は、永へに二障を離れたれば亦たは(七) 法

(一) 此の法身通
三身のそれを指す
(二) 五法 眞如と
四智。

(三) 是の如く云云
自下は諸門分別の
論文を摘取す。論
に七門あり即ち
三身別相門、三
攝各異門、三身
利別門、三身所
分土所化同異門、
身土能所變唯見
身土能所變唯見
同異門、今は識
間入て知れ。今
他受用の中は身
他受用の中は身
等智による。通
現法を説くは觀
察智による。三
四善根を指す。三
本論に五法攝三
あり、今は後師の
義のみを擧ぐ。

身と名く。無量無邊の力と無畏との等きの大功德の法に莊嚴せられたるが故に、體と依と聚との義をもて總じて説て身と名く。故に(一) 此の法身は(二) 五法を以て性と爲す、淨法界のみを獨り法身と名くるには非ず、二轉依の果をば皆な此れに攝するが故に。(三) 是の如くの法身に三の相別なることあり。一には自性身、謂く諸の如來の眞淨の法界なり、受用と變化との平等の所依なり、大功德の法の所依止なるが故に。二には受用身、此れに二種あり、一には自受用、謂く諸の如來の三無數劫に、無量の福と慧との資糧を修集して、起し給へる所の無邊の眞實の功德と、及び極めて圓に淨き常遍の色身となり、相續して湛然なり、未來際を盡して恒に自ら廣大の法樂を受用す。二には(四) 他受用、謂く諸の如來の平等智に由て示現し給へる微妙の淨功德の身なり、純淨土に居して十地に住せる諸の菩薩衆の爲めに大神通を現じ、正法輪を轉じて衆の疑網を決して、彼をして大乘の法樂を受用せしむ、此の二種を合して受用身と名く。三に變化身、謂く諸の如來の成事智に由て變現したまへる無量の隨類の化身なり、淨と穢との土に居て、(五) 未登地の諸の菩薩衆と二乗と異生との爲めに、彼の根の宜しきに稱て通を現じ法を説て、各の諸の利樂の事を獲得せしめたまふ。(六) 然るに佛の三身は即

(一) 受用と變化とは大悲力の故に、利他の無漏の因縁成就したまへるあり、(二) 三身
 と三土とに或は異或は同なることあり、大小勝劣にして前後改轉することあり、(三) 淨
 穢と報化との漏と無漏との攝なるあり、性と相とは身土の差別にして無邊なることあ
 り、諸の教中に廣く顯示するが如くなる故に。
 (四) 此の北宗には唯識と二諦との二の義を以て深極の秘要と爲す、故に略して大綱を出
 さん。慈恩法師の唯識義に云く、第一に出體とは此に二種有り、一には所觀の體、二
 には能觀の體なり、所觀の唯識といは、一切の法を以て自體と爲す、通じて有無を觀
 じて唯識とするが故に、略して五重あり。一には遺虛存實識。(五) 遍計所執は唯だ虛妄
 より起して都べて體用無しと觀じて、正しく空と遣るべし。(六) 情有理無なるが故に、(七)
 依他と圓成とは諸法の體實二智の境界なりと觀じて、正しく有と存すべし、理有情無
 なるが故に。無著の頌に云く。
 (八) 名と事と互に(九) 客となる 其の性尋思すべし
 (一〇) 二に於て亦た當さに 唯量と及び唯假とありと推すべし

(一) 實智は(二) 義は無し 唯だ(三) 分別の三のみ有りと觀す
 彼れ無きが故に此れも無し 是れ即ち三性に入るなりと
 成唯識に云く、識の言は總じて一切の有情に各の八識と六位の心所と所變の相見と分
 位の差別と及び彼の空理に顯はされたる真如と有りといふことを顯はす。(四) 識が自相
 なるが故に、識と相應するが故に、二が所變なるが故に、三が分位なるが故に、四が
 實性なるが故に。是の如きの諸法は皆な識に離れざるを以て總じて識の名を立つ。
 唯の言は但だ愚夫の所執の、定んで諸識に離れて實に色等有りといふことを遮すとい
 へり、是の如く等の文の誠證一に非ず。(五) 無始より來我法を執じて有と爲し、事理を
 撥して空とするに由るなり、故に此の觀の中に遣といふは空觀なり、有執を對破す、
 存とは有觀なり空執を對遣す、今、空と有とを觀じて而も有と空とを遣る、有と空と
 若し無くば亦た空と有とも無かるべし。彼の空と有とに以て相待して(六) 觀成す、(七) 純
 に有、純に空ならば誰か空有あらん、故に離言の法性に證入せんと欲はば、皆な此の方
 便に依て入るべく、(八) 有と空と皆な即ち決定せりと謂ふとは非ず、眞觀を證する位に
 は(九) 有にも非ず空にも非ず、法に分別無し、性離言なるが故に。(一〇) 要らず空を觀じて

（一）二 自の見。
（二）無垢稱に云云
維摩經第二弟子品
優婆塞章の文なり
尊者戒人の爲めに
説法の時維摩來
て尊者を呵する言

（三）義 實蛇の體
をいふ。
（四）彼の分云云
繩若し離分すれば
衆麻たるを知證す
る意。
（五）遣る 除遣す
る意。

（五）所遣の二覺
依他の覺に由て遣
る所執の覺と、圓
成の覺に由て遣る
依地の覺をいふ。
此の二覺は實體を
論せば能所二取を
實とする我法二能
運計の心。

能く變じて自の見と相とに似て現す、心は勝れたるを以ての故に心は二に似れりと説く、心所は劣なるが故に隠して説かざるなり、能似にあらざるには非ず。二無垢稱に言く、心垢なるが故に有情垢なり、心淨なるが故に有情淨なりの等は皆な此の門の攝なり。五には遣相證性識。識の言の表する所は具さに理と事と有り、事をば相用となして遣つて取らず、理をば性體と爲して作證することを求むべし。勝鬘經には自性清淨心といふなり、攝論の頌に言く。

繩に於て蛇の覺を起し 繩と見れば義は無と了す

（三）彼の分を證見する時は 知んぬ蛇智の如く亂なりといふことを

此の中の所説は、繩の覺を起す時に蛇の覺を遣るをば、依他を觀じて所執の覺を遣るに喩ふ、繩の衆分を見て繩の覺を遣るをば、圓成を見て依他の覺を遣るに喩ふ。此意の即ち顯はさく、（五）所遣の二覺は皆な依他起なり、此の染を斷するが故に、所執の實蛇と實繩との我法復た情に當らざりぬ。依他に於て遣ると稱するを以ての故に皆な互に除遣するには非ず。蛇は妄に由て起れり、體用俱に無し、繩は麻に藉て生ず假用無きには非ず、麻をば眞理に譬へ、繩をば依他に喩ふ。繩と麻との體と用とを知れば、蛇

（一）能觀云云
（二）能觀の體を明す
（三）能觀の慧を明す
（四）能觀の境を明す
（五）能觀の慧を明す
（六）能觀の境を明す
（七）能觀の慧を明す
（八）能觀の境を明す
（九）能觀の慧を明す
（十）能觀の境を明す
（十一）能觀の慧を明す
（十二）能觀の境を明す
（十三）能觀の慧を明す
（十四）能觀の境を明す
（十五）能觀の慧を明す
（十六）能觀の境を明す
（十七）能觀の慧を明す
（十八）能觀の境を明す
（十九）能觀の慧を明す
（二十）能觀の境を明す
（二十一）能觀の慧を明す
（二十二）能觀の境を明す
（二十三）能觀の慧を明す
（二十四）能觀の境を明す
（二十五）能觀の慧を明す
（二十六）能觀の境を明す
（二十七）能觀の慧を明す
（二十八）能觀の境を明す
（二十九）能觀の慧を明す
（三十）能觀の境を明す
（三十一）能觀の慧を明す
（三十二）能觀の境を明す
（三十三）能觀の慧を明す
（三十四）能觀の境を明す
（三十五）能觀の慧を明す
（三十六）能觀の境を明す
（三十七）能觀の慧を明す
（三十八）能觀の境を明す
（三十九）能觀の慧を明す
（四十）能觀の境を明す
（四十一）能觀の慧を明す
（四十二）能觀の境を明す
（四十三）能觀の慧を明す
（四十四）能觀の境を明す
（四十五）能觀の慧を明す
（四十六）能觀の境を明す
（四十七）能觀の慧を明す
（四十八）能觀の境を明す
（四十九）能觀の慧を明す
（五十）能觀の境を明す

（五）處と境 内の
六處即ち六根と外
の六境。

の情を自ら滅しぬ、蛇の情滅するが故に、蛇情に當らざるを所執を遣ると名く、依他を聖道を須て斷するが如きには非ず、故に漸く眞に入るには蛇は空なりと達して繩の分を悟る、證眞觀の位には眞理を照して俗事彰る、理と事と既に彰れぬれば我法使ち息みぬ、此れ即ち一重の所觀の體なり。二能觀の唯識は三別境の慧を以て自體となす云。然るに總じて遍ねく諸教所説の一切の唯識を詳するに五種には過ぎず。一には境唯識。阿毗達磨經に云く、鬼と傍生と人と天と各の其所應に隨て、等しき事に於て心異なるが故に、義は眞實に非すと許す。是の如く等の文に但だ唯識の所觀の境を説く者は皆な境唯識なり。二には教唯識。自心の執着に由る等の頌なり、華嚴、深密等に唯識と説くの教は皆な教唯識なり。三に理唯識。三十頌に言く。

是の諸の識轉變して 分別と所分別とあり

此れに由て彼は皆な無し 故に一切唯識なりと

是の如く唯識の道理を成立するは皆な理唯識なり。四には行唯識。菩薩於定位等の頌と四種の尋思と如實智との等は皆な行唯識なり。五には果唯識。佛地經に云く、大圓鏡智には諸の處と境と識と、皆な中に於て現す。又た如來功德莊嚴經に云く、

(一) 無垢識 第九
 (二) 界は性の
 義なり。唯識に云云
 論第十、五位の第
 五究竟位を明す頌
 なり。
 (三) 類差別 圓成
 實と及び依他識に
 於て増數に約して
 識類の差別の一に
 非るをいふ。
 (四) 圓成眞性識
 眞如を指す圓成
 實性には諸法の自體
 が故なり。唯識なる
 が故なり。
 (五) 共相 加行
 後得の二智を以て
 圓成の理を觀する
 を共相觀といふ。
 (六) 總緣法 諸
 法各別の性を緣ぜ
 る故にをく。
 (七) 根本智の觀云
 云 根本智を以て
 圓成の理を觀する
 諸法各別を實性を
 緣するをいふ。
 (八) 因果云云
 有漏の諸位と無漏
 の位との因果を言
 識と説く。
 (九) 俱に二 本識
 と七轉識云云 能變
 の體を出す、今は
 第八識をいふ。
 (一〇) 義云云 義
 境、有情と五塵の
 身、有根、我、他
 第七識所變の境を
 出す(我、他等)。
 (一一) 了 了
 了は所了の境の義
 前六識所變の境に
 て色聲等の六。
 (一二) 異熟と云云
 異熟とは第八識、
 思量は第七識、了
 別は第六識、了
 (一三) 此れ第八の異名中
 殊に異熟の名を出
 すやの問に答ふ。
 (一四) 四智 四智
 と相應する無漏の
 八識を識類とす具
 には四智相應の心
 品といふべし。
 (一五) 界中の眼等の六識
 界と意界の六識
 義林章 第二卷に
 四章ある中の第四
 章なり。

如來の(一)無垢識は 是れ淨なり無漏(二)界なり
 一切障を解脱す 圓鏡智と相應す
 (三)唯識に亦た言く。

此れは即ち無漏界なり 不思議なり善なり常なり
 安樂なり解脱身なり 大牟尼なるを法と名くと

是の如くの諸説の唯識の得果は皆な果唯識なり、此の中の所説の五種の唯識に總じて一切の唯識を攝して皆な盡くせり云云。又た(一)類差別を顯さば、其の(二)圓成の眞性識は若し加行と後得との觀するは是れ(三)共相にして別相には非ず、(四)總じて遍法を緣するを以ての故なり、(五)根本智の觀するは是れ別相にして共相には非ず、(六)諸法を別に知るが故なり乃至。或は(七)因と果とに體は俱に一識なれども、作用は多と成ると説くは、一類の菩薩の義なり、或は因と果とに(八)俱に二なりと説く、決擇分の中の有心地に説かく、謂く本識と及び轉識となり。或は唯だ因に三を説く、辨中邊に云く。

(九)識が生ずる時には變じて (一〇)義と有情と我と及び了とに似たり
 三十唯識に云く。

謂く(一) 異熟と思量と 及び了別境との識なりと云へり

(二) 多くは異熟性なり故に偏に之を説く、阿陀那の名は理、果に通じて有り、或は因と果とに俱に三と説く、謂く心と意と識となり、或は唯果に四と説く、佛地經等に(三)四智品と説けり、或は因と果とに俱に六と説く、勝鬘經の中に六識と説けり、或は因と果とに俱に七と説く、諸教に(四)七心界と説けり、或は因と果とに俱に八と説く、謂く八識なり、或は因と果とを合して九と説けり、楞伽の第九の頌に云く。

八と九との種種の識は 水中の諸波の如くなりと

無相論と同性經との中に依て、若し眞如を取て第九と爲せば、眞俗を合説するが故なり、今は淨位の第八の本識を取て以て第九と爲す、染淨の本識を各別に説くが故なり。

如來功德莊嚴經に云く、如來の無垢識は、是れ淨なり無漏界なり、一切の障を解脱せり、圓鏡智と相應すといふ。(五)又二諦義に云く、瑜伽と唯識との二諦に各の四重あり、世俗諦の四名とは、一には世間世俗諦 亦は有名無實諦と名く二には道理世俗諦 亦は隨事差別諦と名く三には證得世俗諦 亦は方便安立諦と名く四には勝義世俗諦 亦は假名非安立諦と名く。勝義諦の四名とは、一には世間勝義諦 亦は體用顯現諦と名く二には道理勝義諦 亦は因果差別諦と名く三には證得勝義諦 亦は依門顯實諦と名く四には勝義勝諦と名く。

國譯秘密曼荼羅十住心論卷第六 四〇三

二又云云云云
出體を明す、法苑
義林第一總料簡章
五門中第四性不
同に明すものはな
り。
二教は云云一
切の教法は真如を
體とせざることを
意。
三説法は云云
聽者有無の二相を
取る可からず、説
有無の二相の説を
さす、聖人の自内
證は有無絶し言
相俱亡なるないふ
相の淨識。第八無
漏の淨識。云云耳
意の二識。云云
十唯識中の頌なり
と唯識假實の假
とは聲の上の名句
文、實とは説法の
音聲をいふ。
法論第一卷三法對
一、説く十一種法
爲す、物を利し法
成所引といふ。
爲す、物を利し法
成所引といふ。

義諦亦は廢詮談旨 前の三種をば安立勝義と名け、第四の一種をば非安立勝義諦といふ。
又云く、勝義勝義とは體妙離言にして、迥に衆法に超えられたれば名けて勝義と爲す、聖
智の内證にして前の四俗に過ぐれば復た勝義諦と名く。又云く、第四の勝義勝義諦と
は、謂く非安立の廢詮談旨一眞法界なり。二又た四種の體を以て諸の教體を釋せり、
故に略して之を出さん。
初に攝相歸性體とは、三教は即ち眞如なり、般若論に云く。
應化は眞佛に非ず 亦た説法者に非ず
二説法は二取にあらす 説くこと無く言相を離れたりと
第二に攝境從識體とは、若し根本を取らば能説者の識心を體と爲す、若し枝末を取
らば能聞法者の識心を體と爲す、故に天親の云く。
展轉して増上力をもて 二識決定を成す
第三に攝假從實體とは、一切の内教の體は唯だ是れ聲なり、名句文は體は是れ假有
なるに由て實に隨て説く、故に對法論に成所引聲と説て、名等を成所引と名くると
は説かず。

二法相理 法相
法理。又云云云
下六合釋を説く。自

三有財釋 他の
名字の一分又は全
分を取て己が名を
立つ即ち智慧を有
するものを智人と
いふ如きは是れなり

第四に相用別論體とは、唯だ根本の能説法者の識が上に、現する所の聲名句文を取て
以て教體と爲す、假と實と義用殊なるが故に。此の中の四の體は、義用に約して分つ、
眞俗の法相理に乖かざるが故に、具さには法苑の總聊簡に説くが如し。
二又た六合釋有て一切の法の得名の所以を釋す、故に次に略して之を出す。此の六合釋
は義を以て之を釋せば、亦た名けて六離合釋と爲すべし、初には各別に釋するを之を名
けて離と爲し後には總合して解するを之を名けて合と爲す。此の六とは何ぞ、一には
持業釋、二には依主釋、三には有財釋、四には相違釋、五には鄰近釋、六には帶數釋
なり。初の持業釋といは亦たは同依と名く、持といは謂く任持なり、業といは業用作
用の義なり、體能く用を持すれば持業釋と名く。同依と名くることは、依は謂く所依
なり、二義同じく一の所依の體に依れば同依釋と名く、大乘と名くるが如くなり。依
主釋とは亦たは依主と名く、依とは能依なり、主とは法體なり、他の主の法に依て自
名を立つるを以て依主釋と名く。或は主は是れ君主なり、一切の法體を名けて主とす
ることは、喩に従へて名とせり、臣は王に依る、王が臣なるが故に名けて王臣といふ
が如くなり。士は謂く士夫なり。三有財釋とは亦たは多財と名く、有財に及ばざるな

(一) 總じて云云
生佛或は佛法僧等
云ふ如し。
(二) 俱時の法云云
一法生ずる時相應
俱起の法あらんに
必ず増勝用強の法
あらば此を以て名
を立つ。
(三) 諸の相應云云
初禪等の中の定の
心所と相應し俱起
する諸の相應の心
と云ふが如しの意

(四) 所習云云 學
習する深密經等に
五位の漸階あるな
いふ。

り。財は謂く財物なり、自を他の財に従へて己が名を立つるを有財と爲す、世の有財の如くなれば亦た是れ喩に従へて名とせり。相違釋とは名既に二義あり、目くる所の自體各別にして、兩體互に乖^{そむ}げども、而も(一)總して稱を立つる、是れ相違釋なり。鄰近釋とは(二)俱時の法の義用増勝なるに、自體を彼に従へて其の名を立つるを鄰近釋と名く、有尋及び有伺等と説くが如くなり、(三)諸の相應の法は皆な是れ此の體なり。帶數釋とは、數は謂く一十百千等の數なり、帶は謂く挾帶なり、法體に數法を挾帶して名とするを帶數釋と名く、二十唯識論と説くが如きなり。此の六釋の中に各の多説あり、煩はしく述ぶること能はず。此の中の六釋は、且く共傳に依て略して體義を示す、其れ廣く相を辨ずることは餘處に説くが如し。謂く此の六が中の初の持業釋は、八轉聲に於て何れの聲の中にか釋する、乃至帶數釋も亦た爾^{しか}なり、皆な別處の如し。更らに釋名あり宗輪の疏の如し、繁多を恐れ厭^{きら}ふて且く綱要を指す。龍猛菩薩の菩提心論に云く、又た衆生有て大乘の心を發して菩薩の行を行じ、諸の法門に於て遍修せざること無し、復た三阿僧祇劫を経て六度萬行を修し、皆な悉く具足して然して佛果を證す。久遠にして成ずることは斯れ(四)所習の法教の致^{ひび}に次第あるに由る、所以に亦た樂ふ可か

(二) 次に秘密云云
以上卷初より淺略
の義を明し已り、
正しく秘密の義を
顯す一段なり。

らず。(二)次に秘密の義とは如上の無緣乘の法は即ち是れ彌勒菩薩の三摩地門なり、是の三昧は則ち所謂の大慈三昧なり、亦た是れ大日如來の四行の一なり、一切如來の大慈無量なるを悉く彌勒と名く。此の菩薩亦た普遍大慈發生三昧に住して自心の眞言を説きたまへり。

阿誓單闍耶、薩縛薩埵^{サハバサト}也奴揭多^{トゴヤダ}(原本梵字)

釋しく云く、阿誓單闍耶^{アシタンシャヤ}といは、無能勝の義なり、薩縛薩埵^{サハバサト}といは一切衆生なり、奢也^{シヤヤ}といは心性なり、謂く彼れ先世に習行する所の諸根性類なり、奴揭多^{トゴヤダ}といは知なり、謂く能く衆生諸根性行を了知するなり、句義は是の如し。深秘の義に云く、初めの阿^ア(原本梵字)字を體と爲す即ち是れ本不生なり、生とは生老病死の一切の流轉の法なり、彼の即體常に自ら不生なる、是れ阿字の義なり、諸法の自性不生なりと知るを以てなり、是の故に一切衆生に於て上勝あること無しとなす、上といは無等なり。又た能く法體の不生なることを知るが故に、群機の一切の心性を達鑒して、現覺せざる所なし、彼の所應度の者に隨て之を成就する、即ち是れ慈中の上なり、遍ねく衆生に施して窮盡あること無し。是の故に若し衆生有て、能く通達して此の法を受持し讀誦すれば、行

者久しからずして即ち彌勒の行に同じて、早く大慈三昧を證するなり。此の一の眞言に悉く法相の法門を攝す、若し此の一の眞言を誦すれば則ち彌勒の所證に入る所説の一切の法を持するに爲りなんぬ、即ち三大劫を経ずして一生に成佛することを得てん。常途の説に云く、彌勒菩薩は位十地に居して、當來に成佛すと、此の如きの説は所謂未了の言なり。

國譯秘密曼荼羅十住心論卷第六 終

國譯秘密曼荼羅十住心論

卷第七

覺心不生住心第七

夫れ大虛寥廓として萬象を越一氣に含み、巨壑泓澄として千品を爰一水に孕じ、誠に知んぬ一は百千が母たり、空は即ち假有の根、假有は有に非れども有有として森羅たり、絶空は空に非れども空空として不住なり、色は空に異ならざれば諸法を建て、宛然として空なり、空は色に異ならざれば諸相を混して宛然として有なり、是の故に色即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり、諸法も亦た爾り、何物か然らざらんや、水波の不離に似たり、金莊の不異に同じ。不二の號立ち二諦四中の稱顯はる。空性を無得に觀じ、戲論を八不に越ゆ。時に四魔戰はざるに面縛し、三毒殺さざるに自ら降す、生死即ち涅槃なれば更に階級なし、煩惱即ち菩提なれば斷證を勞することなし。然りと雖も無階の階級なれば五十二位を壊せず、階級の無階なれば一念の成覺を礙えず、一念の念に三大を経て自行を勤め、一道の乘に三駕を馳せて化他を勞

(一) 覺心中の終の住心
(二) 前第六を相宗とし
(三) 論宗に配す
(四) 爾雅に爰學は于也
(五) 混元の一氣に喻へ
(六) 字形は天地貫通の
(七) 氣に象る
(八) 巨壑、泓、澄、の
(九) 異名、泓は深く澄
(一〇) は湛也、眞諦の一相
(一一) 一味に比す
(一二) 不二の號立ち
(一三) 二諦四中の稱顯はる
(一四) 諸中道四中の意
(一五) 所得の正觀を明す
(一六) 空性は法性の空
(一七) 一佛乘分別説三の
(一八) 意を述ぶ

唯蘊云云勝
心約して前
小乘法の二心
抑下す
第六の他縁大乘心
に於て境智隔歴を
談ざるを指す
性眞識の本來淨を
明す
江の南宗今は成實
三論兩宗をいふ
金に當住の大日云
已に當住の大日云
引き廣く釋す
縁の有爲法不變隨
縁の無爲法不變隨
理の轉開明他
縁心と覺心を相
しして十住心
は十住心云云此
の二節は覺自心
心不生を釋す
識と七轉の妄心
いふ

す。(一)唯蘊の無性に迷へるを悲しみ、他縁の(二)境智を阻みたるを歎く、(三)心王自在にし
て本性の水を得、心數の客塵は動濁の波を息む。權實の二智は圓覺を一如に證し、
眞俗の兩諦は教理を絶中に得、心性の不生を悟り、境智の不異を知る、斯れ乃ち(四)
南宗の綱領なり。(五)故に大日尊秘密主に告げて言く、秘密主、彼れ是の如く無我を
捨つれば心主自在にして自心の本不生を覺る、何を以ての故に、秘密主、心は前後際不
可得なるが故に。釋して云く、心主といは即ち心王なり。(六)有無に滯らざるを以ての
故に、心に罣礙なくして所爲の妙業、意に隨て能く成ず、故に心主自在といふ。心王
自在といは、即ち是れ淨菩提心の、更に(七)一轉の開明を作して前切に倍勝することを
明すなり。(八)心王は猶し池水の性の本より清淨なるが如し、心數の淨除は猶し客塵の
清淨なるが如し、是の故に此の性淨を證する時、即ち能く自ら心の本不生を覺る。何
を以ての故に、心は前後際俱に不可得なるが故に。譬へば大海の波浪は縁より起する
を以ての故に、即ち是れ先にもなく後にもなし、而も水性は爾らず、波浪の縁より起
る時、水性は是れ先にも無きにも非ず、波浪の因縁盡くる時、水性は是れ後に無きに
も非るが如く、心王も亦た復た是の如し前後際なし。前後際斷するを以ての故に、復

漸く云云阿
字の究極に至
は獨り第十住
あり、今は諸
不生を覺り一
字門不生に契
に然かといふ
經の文義を明
り結合す途の
に結合す途の
段生對し變易
ふに對し變易
外對なれば實
有爲なりは實
の如く無明住
生死の縁無漏
生死の起因出
(生死の相)破
五(死滅の體)なり
首端に見ては
説き七不を説
て後七不を説
の學僧三論宗
大德なり三論
乘玄論第一二
取要の中初め
綱要文を摘録

た境界の風に遇ひ縁に隨て起滅すと雖も、而も心性は常に生滅なし。此の心の本不生を
覺るは即ち是れ(一)漸く阿字門に入るなり。(二)是の如くの(三)無爲生死(四)縁因生壞等の義
は勝鬘經・寶性・佛性論等の中に廣く明すが如し。本不生と謂ふは(五)兼ねて不生・不滅・
不斷・不常・不一・不異・不去・不來等を明す、三論家には此の八不を擧げて以て究極の
中道となす、故に(六)吉藏法師の二諦方言と佛性と等の章に盛んに此の義を談ず、今略
して綱要を出さん。(七)二諦と謂ふは蓋し是れ言教の通詮と相待の假稱と、虛寂の妙實
と、窮中の極號となり。中論に云く、諸佛は常に二諦に依て法を説き給ふ、一には世
諦、二には第一義諦なり。故に二諦は唯し是れ教門にして境理に關らざるなり、而も
學者に其の巧拙ありて遂に得失の異あり。若し巧慧ありて此の二諦を學すれば無所得
を成ず、巧慧無き者の教を學すれば即ち有所得の失を成ず、故に常途の(八)諸師或は言
智解を含み、或は辭に聖教を兼ねれども、同じく境理を以て諦と爲す、今は此れに同
じからず。(九)問ふ、中論に云く、諸佛は二諦に依て法を説くと。涅槃經に云く、衆生
に隨順するが故に二諦を説くと、是れ何れの諦ぞや。答ふ、能依は是れ(一〇)教諦なり所
依は是れ(一一)於諦なり。問ふ、於諦を失となし教諦を得とするや不や。答ふ、(一二)凡夫の

(八) 諸師 開善寺の智藏、莊嚴寺の慧覺、光宅寺の法雲、問ふ云云。自下問答釋成す。薩色は有無に非ず、了は有無に非ず、益の爲めに有無を説くは二諦の教なり。此れは頓て有無を悟らしめんと爲なり。有無を教といふは、有に非ず、色等も凡夫は有とす(俗諦)聖者に約せば空なり(眞諦)於には住りと同意也。實有の於夫の於所得空の於。偏空の於。諸師法明大師(三)通迷凡有(四)聖の迷執は二乘(五)通する凡夫に(六)學して迷を成する(七)凡夫の聲聞と弟凡夫の中の方廣道人と

於をば失と爲し、(二)如來の於をば得となす、(三)聖人の於は亦たは得、亦たは失なり。而るに(四)師の云く、於諦を失となし教諦を得となすとは乃ち是れ學教成迷なりと。本の於は是れ(五)通迷、學教の於は(六)別迷なり、通迷は是れ本、別迷は是れ末なり、本は是れ前の迷、末は是れ後の迷なり。問ふ、何れの意をもてか凡聖の二の於諦を開くや。答ふ、凡聖の得失を示して凡を轉じて聖と成らしめんとなり。問ふ、於諦を失となせば何を以てか諦といふや。答ふ、論の文に自ら解すらく、諸法は性空なれども世間には顛倒して有と謂ふ、世人に於て實とする、之を名けて諦となす、諸の賢聖は顛倒は性空なりと眞知す、聖人に於て是れ實なれば、之を名けて諦となす、此れは即ち二の於諦なり。諸佛は此れに依て説き給へば、名けて教諦とするのみ。問ふ、教を若爲が諦と名くるや。答ふ、數の意あり、一には實に依て説くが故に所説も亦た實なり、是の故に諦と名く。二には如來は誠諦の言なり、是の故に諦と名く。三には有無の教を説くに實に能く道を表す、是の故に諦と名く。四には法を説て實に能く縁を利す、是の故に諦と名く。五には説て顛倒せず是の故に諦と名く。(七)他家の二諦と十種の異あり、一には理教の異。(七)彼が明さく、二諦は是れ理なり三假は是れ俗四絶は是れ眞なればな

(八) 巧慧無きものを採て他を除く故に名く。(九) 他家の二諦の説。三大法師の指す。彼が他家を(一)有は云云俗を有といひ眞を無といふ。有所得なり。(二)有得 有所得なり。(三)云云 十異に於て初三のみを引けばなり。(四)他は但し云云 已下の四重は小の二家と大の二諦を明す。對して二諦を(五)若しは云云 他は成論師のいふ無は三論家の世論なりとの意。(六)不三 不三中道。(七)前の三 第四重の二諦の廢立なり。(八)理の教、能證の二諦の縁の意。(九)事理 有空の二諦、

り、今は明さく二は是れ教なり不二は是れ理なり。二には相無相の異。他家は有無に住するが故に是れ有相なり、今は明さく、(二)有は不有を表す、無は不無を表す、有無に住せざるが故に無相と名く。三には得無得の異。他家は有無に住するが故に(三)有得と名く、今は明さく、有無に住せざるが故に無得と名く(三)云云。(四)他は但し有を以て世諦となし、空を眞諦となす、今は明さく、(五)若しは有、若しは空、皆な是れ世諦なり、非空非有を始めて眞諦と名く。三には空有を二となし非空有を不二となし、二と不二とは皆な是れ世諦なり、非二非不二を名けて眞諦となす。四には此の三種の二諦は皆な是れ教門なり、此の三門を説くことは(六)不三を悟らしめんが爲めなればなり、無所依得を始めて名けて理となす。問ふ、(七)前の三をば皆な是れ世諦とし不三をば眞諦とするや。答ふ、此の如し。問ふ、若し爾らば(八)理と教と何の異ぞ。答ふ、自ら二諦を教となし不二を理とするあり、皆な是れ轉側、(九)縁に適て妨ぐる所なし。問ふ、何が故ぞ此の四重の二諦を作すや、答ふ、毗曇の(一〇)事理の二諦に對して第一重の空有の二諦を明し、(一一)成論師の空有の二諦に對して、汝が空有の二諦は是れ我が俗諦なり、非空非有方に是れ眞諦なり、故に第二重の二諦あり、大乘師の依他と分別との二を俗諦とな

無名なれども今假りに名を立つ、此の名は無名が所立の名なることを以てす、提羅波夷は真に油を食せざれども、強て食油と爲るが如し。二諦も亦た爾なり、其の真は不真を表し、俗は不俗を表するに以て假りに真俗と言ふ、其の假言なるを以て名に得物の功も無く、物に應名の實も無し。淨名經に云く、無住の本に従て一切の法を立つ、無住には即ち本無しと。大品に云く般若は猶し大地の如し萬物を出生すと。般若と正法と無住と此の三は眼目の異名なり云云、第二に絶名を辨す、常途の相傳は世諦は絶名ならずと、成論の文を引て、劫初の時に物に未だ名あらず、聖人名字を立つ、緋衣等の物の如し、故に世諦は絶名ならず。真諦と佛果とは三師不同なり、光宅の云く此の二つ皆な絶名ならず、真諦には真如實際の名あり、佛果には常樂我淨の名あり、但し麤名を絶す、妙名を絶せず。莊嚴の云く、此の二は皆な絶名なり、佛果は二諦の外に出づ、是の故に絶名なり、真諦は本より來た自ら空なり、四句を亡し百非を絶する故に絶名なり、開善の云く云云、今は明さく、一往論を爲さば何んすれを得ざらん、然も理實の説には非ず。今問ふ、若し劫初に物に名諸を作るとならば、真諦も無名なるを以て名諸を假る者なり、真と何んが異ぞ。又問ふ、火の名は當さに火に即すとやせん火を

(二) 第二云云 自下は強て立つる所の名は皆な絶名に在るに非ざることを辨す。
(三) 劫初成劫二十劫中の劫劫。

(三) 妙名 真如等の名をいふ。今云云。自下破斥段なり。

(一) 地床虎杖の草なり、是れ尋常の草なり、猛毒地草なり、相違せざる客名。今明さく云云。今家の正義を明す。能證の如理に從へて證の如いふ名を立て、如來の明する境界の義相にして境なり。二二諦を指す。二二諦を指す。來は立を三門あり、取の中、初二の科を略す、今は第五の二諦の體を釋する中、取意の文なり。第三の諦、道第一義諦、他家、答ふ云云、此引て中道論三經を論の中道論を以て二を明す。上の真假名。

離れたりや、若使此の火の名は火に即せば火を呼ぶに即ち口を焼くべし、若使火の名は火を離れば何が故ぞ水を待ざるや、故に知んぬ體に即離して名あるに非ず、若し口の中に在て火の上に在らずんば、是れ即ち火には絶名なり。且復從來の(一) 地床虎杖は世諦の絶名なり。復た問ふ、人は是れ何物ぞ、人の頭手等をば何の意を以て人と呼ぶや、強いて爲めに名を立つ、豈に皆な絶するに非ずや。次に三家を難せん云云。(二) 今明さく、四句を以て之を辨せん、一には俱絶、二には俱不絶、三には真絶俗不絶、四には俗絶真不絶なり。二諦俱絶と言ふは二諦皆な如なり、奈んが皆な不絶なることを得ん。(三) 二諦俱不絶とは、是の(四) 如の相を得るをもて名けて如來となす、是の(五) 二の如の相を得るをもて、所以に皆な不絶なり云云。(六) 二諦の體を釋すること常の解は同じからず云云。今の意は(七) 第三の諦あり、彼には第三の諦なし、彼れは理を以て諦とす、今は教を以て諦とす、彼れは二諦を以て天然の理とす。今は明さく、唯し一實諦なれども方便して二と説く。唯し一乘なれども方便して三と説くが如し。問ふ、何れの處の經文にか中道を二諦の體とする。(八) 答ふ、中論に云く、因縁所生の法は我れ即ち是れ空なりと説く、亦た爲是(九) 假名なり亦た是れ中道の義なりといへり、因縁所生の法と

論玄義中の第二別
釋乘品に十三門あ
る中第六第十三
の取要文なり。三
は凡夫外道又は
二乘等をいふ。は
二論用三論所説
の二諦二智の教門
をいふ。宗一部の旨
歸正所明の法門を
いふ。二智佛陀の
具へ給ふ權實二智

(四) 自利利他共利
三利にて是れ即ち
三覺なり。共利と
は自他利の意、
餘は知るべし。
(五) 問ふ云云。自
下は問答釋成する
段なり。
(六) 二論佛所説
の大小乘經中の二
諦也。

無し。故に無量義經に云く、水の穢を洗ふ義は同じけれども、井と池とに約して異とするが如し。今(一)用の不同に約するが故に所宗の差別を辨す。中論は二諦を以て(二)宗とす。二諦を用ひて宗とする所以は、二諦は是れ佛法の根本なり、如來の自行化他は皆な二諦に由ればなり。自行二諦に由るとは瓔珞經の佛母品に、二諦は能く佛を生ずるが故に二諦は是れ佛母なりと明すが如し。蓋し(三)二智を取て佛と爲す、二諦は能く二智を生ずるが故に二諦を以て母と爲す、即ち是れ如來の自德圓滿し給ふことは二諦に由るなり。化他の德は二諦に由るは、如來に所説の法ありて衆生を教化し給ふことは常に二諦に依る。故に中論に云く、諸佛は二諦に依て衆生のために説法し給ふと、是れ化他の德は二諦に由るなり。自行化他二諦に由ると知る所以は十二門論に云く、二諦を識るを以ての故に、則ち(四)自利・利他及び共利を得といふ、即ち其の事なり。二諦は是れ自行化他の本なるを以ての故に、二諦を申明して以て論の宗とす、則ち一切衆生をして具さに自他の二利を得せしむ。(五)問ふ、何の人の二諦に迷すれば、論主迷を破して二諦を申べたまふや。答ふ、二種の人有りて(六)二諦に迷ふ。一に小乘五百部なり、各の諸法の決定の性ありと執して、畢竟空を聞いては刀を以て心を傷くるが如し。此

(一) 空が有 大乘
所言の空が有を離
れざるもの。
(二) 一切の法云云
是れ方廣道人が佛
を説く大乗畢竟空
を聞いて誤て然か思
へり。又云云。二
諦に迷ふに自樹さ
る。今自樹の失(凡
及)び起愛の流(凡
り)に當る。凡夫云
々所あり一切法に我
々の所あり計し假
空の論に迷ひ二
乘は一切法我々の所
なしと謂ひ假有の
世諦に迷ふ。

の人は第一義諦を失す、然も既に第一義諦を失すれば亦世諦を失す。然る所以は、空が宛然として有なるが故に、有をば(一)空が有と名く、方に是れ世諦なり、彼れ既に空を失すれば亦た是れ有にも迷す、故に世諦を失す、五百部の執は如來の二諦の外に出でたり。二には方廣道人(二)一切の法は龜毛兔角の如し、罪福報應無しと謂へり。此の人は世諦を失す、然るに有は宛然として空なるが故に空をば有が空と名く、既に空が有を失すれば亦た有が空をも失す、斯の如きの人は亦た二諦を失す。(三)又た諸の外道も亦た二諦を失す。有見の外道の如きは真諦に迷ひ、空見の外道は世諦に迷ふ。(四)又た凡夫は有に著するが故に真諦に迷ひ、二乘は空に滞れば世諦に迷ふ、今、此の迷を破せんとして二諦を申明す、故に二諦を用ひて宗となす。問ふ、何を以てか此の論には二諦を以て宗とすと知ることを得る。答ふ、瓔珞經に云く、二諦は不生不滅乃至不來不去なりといへり。今の論には正しく八不を明す、故に知んぬ二諦を以て宗となす。又た青目、論の意を序するに、外人二諦を失すれば、龍樹、是等の爲めの故に此の中論を造することを明す、即ち知んぬ外道の迷失を破せんとして二諦を申明す、故に二諦を以て宗となす。問ふ、既に中論と名く、何を以て中道を用て宗とせずして、乃ち

(一) 兩つ 三論通
宗の不二中道と廣
論用別の二諦の宗
ないふ。八不二諦

二諦を以て宗とするや。答ふ、即ち二諦は是れ中道なり、既に二諦を以て宗とするは、即ち是れ中道を宗とするなり。然る所以は還た二諦に就て以て中道を明す、故に世諦の中と眞諦の中と非眞非俗の中道とあり。但し今は名と宗とに(一)兩ながら擧げんと欲ふが故に、中と諦と互に説く故に宗には其の(二)諦を擧げ、名には其の中を題す。若し中道を以て名となし、復た中道を以て宗と爲せば、但し不二の義のみを得て其の二の義を失するが故なり。問ふ、佛は何んが故ぞ二諦を明し給ふや。答ふ、佛法は是れ中道なりと示さんと欲するが故なり、世諦を以ての故に不斷なり、眞諦を以ての故に不常なり、所以に二諦を立つ。又た二慧は是れ三世の佛の法身父母なり、第一義有るを以ての故に般若を生じ、世諦あるを以ての故に方便を生ず、實慧と方便とを具するが故に三世十方の佛有ます。又た第一義を知るは是れ自利なり、世俗諦を知るが故に能く他を利す、共じて二諦を知るときは則ち共利を得。又た二諦あるが故に佛語みな實なり、世諦を以ての故に有と説く是れ實なり、眞諦の故に空と説く是れ實なり、所以に二諦を明す。次に百論には邪を破し二諦を申ふ、具さには破空品の末に説くが如し、亦た二諦を以て宗となすべし。但し今は中論と互相に開避せんと欲して、中論は二諦

(一) 提婆 具さに
は伽那提婆といひ
小一曰天と翻す
佛滅後九百年南天
竺に生れ龍樹に法
を承け後百論を造
す。
(二) 擊揚 破邪顯
正の意。
(三) 中論 (Madhy
anika Sāstra) 龍
樹の造、羅什の譯
なり龍樹の中觀說
さとして教學の中心
となれるものはれ
なり。
(四) 百論 (Satya-
sāstra) 迦那提婆の
造、鳩摩羅什譯す
龍樹の主張を九十
六師外道に對して
宣明せるもの。
(五) 十二門論
(Dvādasanikāya
Sāstra) 龍樹の造
羅什譯す、十二門
の言教を以て實相
の中觀を明かにす。
(六) 大分 大乘に
は具さに空を含有
す、今は空の一分
を釋すればなり。

を以て宗となし、百論は二智を以て宗と爲す、諦と智と互に相成することを明さんと欲ふなり。問ふ、百論は何が故ぞ二智を用ひて宗とするや。答ふ、(一)提婆と外道と對面し(二)擊揚して一時の權巧の智慧を闡はしむ、但し提婆の權智は巧みに能く邪を破し、巧みに能く正を顯せども、而も實には所破もなし、亦た所顯もなし、故に實智と名く、一論の始終に此の二智を明す、故に二智を以て宗と爲す。(三)中論は内と諍ふ一時の權巧にあらず、但し共に同じく二諦を學するの人と二諦の得失を諍ふ、故に二諦を以て宗となす。則ち中論は所申を用ひて宗となし、(四)百論は能申を用ひて宗となす、佛と菩薩との能所共に相成することを明さんと欲ふなり。次に(五)十二門論は亦た内迷を破して二諦を申明すれば、亦た二諦を以て宗となすべし、但し今は三論の不同を示さんと欲して、宜しく境と智とを以て宗とすべし。言ふ所の境智とは論に云く(六)大分の深義は所謂る空なり、此の義を通達すれば則ち大乘に通達するなり、六波羅蜜を具足して障礙するところ無しといふなり。大分深義とは謂く實相の境なり、實相の境に由て般若を發生す、般若に依るが故に萬行成することを得、則ち是の義なり、故に境と智とを用ひて宗と爲す。問ふ、論を中論と名く、中に幾の種あるや。答ふ、既に稱して中と爲す、則ち

(一) 偏病 斷見若しは常見を執するをいふ。

(二) 經に云く涅槃經第七師子吼菩薩品。

(三) 本と云云此は絕對中を明す。(四) 出處 生死を出て涅槃に處す。(五) 此の論 中論第二の本際品。(六) 中 中道のこと。

(七) 有無 有無の二諦。爲て 由の字の意。

多に非ず一に非ず、義に隨ひ縁に對して多と一とを説くことを得、言ふ所の一中とは一道清淨なり、更らに二道無し、一道とは即ち一の中道なり。言ふ所の二中とは、即ち二諦に約して中と辨ず、謂く世諦の中と眞諦の中となり。三中と言ふは二諦の中と及び非眞非俗の中となり。四中と言ふは謂く對偏中と盡偏中と絶待中と成假中となり。對偏中とは大小の學人の斷常の(一)偏病に對す、是の故に對偏中と説くなり。盡偏中とは大小の學人斷常の偏病あれば則ち中を成すとせず、偏病若し盡きぬれば即ち名けて中と爲す。是の故に(二)經に云く、衆生の見を起すに凡そ二種あり、一には斷、二には常、是の如きの二見をば中道と名けず、無常無斷を乃ち中道と名くといへり、故に盡偏中と名く。(三)本と偏病に對す、是の故に中あり、偏病既に除れば中も亦た立せず、中に非ず偏に非れども、衆生を(四)出處せしめんが爲めに強いて名けて中と爲るを絕對の中と謂ふなり、故に(五)此の論に云く、若し始終あること無きときは(六)中當さに云何んが有なるべけんやと、經に云く、二邊を遠離して中道にも著せずといへり、即ち其の事なり。成假中とは(七)有無を假となし非有非無を中と爲す、非有非無に由るが故に有無を説く、此の如きの中は假を成するに(八)爲て成假中と謂ふなり。然る所以は良に由

(一) 此の覺心云云第七住心を明すに淺略と深秘とある中、已上は淺略の科を明し、自下は深秘を明すなり。

(二) 往一本には住の字とす。

れば正道は未だ會て有無にあらざれども、衆生を化せんがために假りに有無と説く、故に非有無を以て中と爲け有無を假と爲くるなり。此の(一)覺心不生心に亦た二種の義あり、一には淺略、二にに深秘なり、淺略は前の説の如し、深秘の義とは下の所説の眞言秘密の義是れなり、所謂る覺心不生住心の法門は、是れ文殊師利菩薩の三摩地門なり。大H經に云く、時に文殊、佛加持神力三昧に入て自證の眞言を説て曰く、醯醢俱摩羅迦、毗目乞底鉢他悉體多、薩摩囉薩摩囉、鉢囉底然(原本梵字) 釋して曰く醯醢といは是れ呼召なり、俱摩羅迦といは是れ童子なり、即ち是れ呼召して本願を憶せしむ。又た俱は是れ摧破の義なり、魔羅は是れ四魔と及び眷屬となり。此の眞言は魔字を以て體と爲す、即ち是れ大空の義なり、此の大空を證して一切の魔を摧壞するなり。毗目乞底鉢他悉體多といは解脱道住なり、此の童子の解脱道に住する者を請呼するなり、即ち是れ諸佛の解脱なり、所謂る大空なり涅槃なり。薩摩囉(原本梵字)といは憶念憶念なり、鉢囉底然(原本梵字)といは先の所立の願なり、此は眞言の淺略なり。意の云く、童子の解脱の道に(二)往せる者を醯醢して本所立の願を憶念せしむるなり、一切諸佛の法身は成佛して、身口意の秘密の躰に入れり、一切の有心の

能く及ぶ者なし。然も本願を憶するが故に自在の力を以て生死に還て衆生を救度す、大意は此の如し。此の童子は久しく已に法身成佛せり、故に其の本願を憶するを以て衆生を度せよと請するなり、菩薩の本願を請するに由て、若し見聞觸知して我れを憶念する者有れば、皆な諸乘に於て畢定を得、乃至一切の願を満す。此の菩薩は久しく已に成佛せり、所謂る普見如來なり、或は普現如來と云ふ、大悲加持力を以て童子の身を示す、顯の義は是の如し。(一)深秘の義といは其の一字を體とす是れ大空の義なり、大空は即ち大自在なり、大自在は則大我なり、大我は能く大空を證す、大我は一切の法に於て無著無得なり、是れ則ち如來の智慧なり。(二)若し平等の慧を得れば、一切の法に於て都て戲論を絶つ、是の故に亦た無戲論如來と名く。故に金剛頂經に云く、時に薄伽梵一切(三)無戲論如來、復た轉字輪般若理趣を説き給へりと。釋經に云く、是れ則ち文殊師利菩薩の異名なり、轉字輪とは是れ(四)五字輪の三摩地なり。所謂る諸法は空なり無自性と相應する故にとは、金剛界の曼荼羅の中の金剛利菩薩の三摩地なり。諸法は無相なり無相性と相應するが故にとは是れ降三世曼荼羅の中の忿怒金剛利の三摩地なり。諸法は無願なり無願性と相應するが故にといは、是れ遍調伏曼荼羅の中の蓮華利

(一)深秘云云。深秘の字義を明す。深若し云云。自下は展轉述釋するなり。
(二)無戲論。八識の四種の妄識を戲論と云ふ。虛假不實の義なり。文殊師利菩薩の利劍を以て一切法を斷ずる故に戲論を斷ずるなり。
(三)五字輪。阿羅婆字の五字なり。

(一)謂はゆる云云。證に由て法曼を明す。

(二)故に云云。因みに流傳をのぶるなり。

(三)是れば云云。自下は秘に歸して總結す。

の三摩地なり、諸法は光明なり般若波羅蜜多清淨なるが故にとは、一切義成就の曼荼羅の中の寶利菩薩の三摩地なり云云。(一)所謂ゆる空・無相・無願といは是れ三解脱門なり。大般若等の諸の空無相等を顯す經は、皆な是れ文殊師利菩薩の三摩地法曼荼羅なり。(二)故に六波羅蜜經に云く、文殊師利菩薩をして所説の般若藏を受持せしむといへり。龍樹菩薩此の般若藏に依て中觀・十二門論を作りて三解脱中道正觀を示す。龍樹菩薩の弟子提波菩薩、百論を作て二乘外道等の執を破す、無著菩薩は順中論を造し、世親菩薩は百論の釋を作り、清辨菩薩は中論の釋を造る、此れを般若燈論と名く、護法菩薩は廣百論の釋を造る。唐の三藏玄奘法師譯して大唐に傳ふ、秦の姚興の時、鳩摩羅什三藏、青目所作の中觀の釋を譯して四卷とす。吉藏法師、中・百・十二の三論に依て廣く章疏を造りて盛んに三解脱門を傳ふ。入唐の學生智藏・道慈法師等受學して此の間に傳ふ、是を三論宗と名く。(三)是れば此れ人に名くれば則ち文殊師利菩薩、法に約すれば大般若波羅蜜多經と曰ふ。此の如くの經論等の所詮の無量の教義等は、悉く文殊の一の文字の眞言に攝し盡す、若し此の一字を觀誦すれば則ち大空三昧を證して文殊菩薩に等同なり。此の大空の慧を證する時は、能く一切の諸法の本來不生・不滅・不斷・不

常・不・不異・不去・不來等を知る、中論の初めに八不を説く良とに以あり、是の大慧は亦た是れ大日尊の萬徳の一なり。故に善無畏三藏の云く、文殊師利は是れ大日如來の智慧なり、大日如來を離れて別に慧あらずと云云。

國譯秘密曼荼羅十住心論卷第七終

二 一道無爲。本
文に委説せり。本
百會。佛を稱
す。華胥。印度の
別名。一乘。法華一
佛乘。三神は藏教
の菩薩。二乘。人天
也。黎元。百姓を
いふ。住して云云
我家に居て講堂に
經かすの意。癡闇云云
迦所化の衆生の靈
驚山を去て歸らざ
るをいふ。黔首と
は民のこと。黔首
は萬千の羅漢
法華の同衆なり
謂はゆる門外の大
白牛車。菩提樹
十餘年機杖の調熟
を待つなり。四諦と
は四阿含。四諦と
は蓮華三昧云云
法華序品所明の六
瑞中第二の入定第
六の放光を引く。第
二性徳。本來清

國譯秘密曼荼羅十住心論

卷 第 八

二 一道無爲住心第八 亦是如實知自心名。亦は空性無境心と名く。

若し夫れ孔宣震旦に出で、五常を九州に述べ、百會華胥に誕れて一乘を三艸に開く。於是に狂醉の黎元は住して進まず、癡闇の黔首は往て歸らず、七十の達者は頗る其の堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず、度内の五常は方圓合はず、界外の一車は大小入らず。是の故に三七に樹を觀じ、四十に機を待つ、初には蓮華三昧に入て性徳の不染を觀じ、白毫の一光を放て、修成の遍照を表すが如きに至ては、會三師一して佛智の深多を讚し、指本遮末して成覺の久遠を談ず。寶塔騰踊して二佛同座し、娑界震裂して四唱一處なり、鬘珠を賜ひ瓔珞を獻ず、利智の鷲子は吾が佛の魔に變せるかと疑ひ、等覺の彌勒は子の年の父に過ぐることを恠む、一實の理、本懷を此の時に吐き、無二の道、満足を今日に得。爾れ

淨の性徳三千是れ
 是れ變の三千
 亦たは事造の三千
 といふ、修に順逆
 あるも今は順修に
 約す。
 (六)會三歸一
 聲・緣・善の三乘を開
 會し一佛乘に歸す
 (七)佛智云云
 佛の權實二智の甚深
 無量
 (八)指本迹末
 拂
 迹顯本の義
 (九)二佛
 釋迦・
 多寶佛
 (一〇)四唱
 四の唱
 導師・上行・無邊
 行・淨行・安立行善
 義
 (一一)鶯子
 鶯に養
 利(鶯)弗咀羅(子)
 といふ舍弗とは
 訛なり
 (一二)子の年云云
 三子の年云云
 涌出の老年の菩薩
 を佛我が弟子とい
 ふを疑へるなり
 今は喩
 (一三)羊鹿云云
 譬
 喩品に明す喩、長
 者諸子の方便して
 火宅を出し、大白
 牛車を與ふに疾き

四三〇
 ば乃ち(一)羊鹿斃れて露牛疾し、龍女出で、(二)象王迎ふ、(三)二種の行處は身心の室宅に
 宿り、(四)十箇の如是は止觀の宮殿に安す。寂光の如來は境智を融して(五)心性を知見し
 (六)應化の諸尊は行願を顧みて分身、相に隨ふ。(七)寂にして能く照し、照にして常に寂
 なり、澄水の能く鑒るに似、(八)瑩金の影像の如し、濕金即ち照影、照影即ち金水なり、
 即ち知んぬ境即ち般若、般若即ち境なり、故に無境界と云ふ、即ち此れ實の如く自心
 を知るを名けて菩提と爲す、(九)故に大日尊、秘密主に告げて云く、(一〇)秘密主云何んが
 菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり。秘密主是の阿耨多羅三藐三菩提は、乃
 至(一一)彼の法として少分も得べきこと有ることなし。何を以ての故に、虚空の相は是れ
 菩提なり、知解の者も無く亦た開曉のものも無し。何を以ての故に、菩提は無相なる
 が故に。秘密主諸法も無相なり、謂く虚空の相なり。爾の時に金剛手復た佛に白して
 言く、世尊誰れか一切智を尋求する、誰れか菩提のために正覺を成する者、誰れか彼
 の一切智智を發起する。佛の言く、秘密主、自心に菩提と及び一切智とを尋求せよ、何
 を以ての故に、本性清淨の故に。(一二)心は内に在らず外に在らず、及び兩中間にも心不
 可得なり。秘密主、(一三)如來應正等覺は青に非ず、黃に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅

こと風の如しとい
 ふ是れなり。
 (一)象王 文珠の
 入り龍女を教化せ
 るより、象王迎ふ
 といふ。
 (二)二種の行處云
 云、四安樂行中の
 初の身安樂行を説
 く。
 (三)十箇の如是
 如是相。如是性。如
 是體。如是力。如
 是作。如是因。如
 是果。如是報。
 (四)如是本末究竟。
 (五)心性 行者の
 心性。
 (六)應化の諸尊
 釋迦の分身。
 (七)寂にして云云
 密經の説に隨ひ、
 境智を融するを述
 ぶ。
 (八)瑩金 鏡也。
 (九)故に大日云云
 自下は住心品と本
 宗の祖釋を引て釋
 す。
 (一〇)秘密主云云
 此は經文にて所求
 の菩提の所在を示
 す。
 (一一)彼の法云云
 無相菩提心を離れ

に非ず、紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず、明に
 非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず、秘密主、心は欲界と同性に非
 ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず。天龍夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那
 羅・摩睺羅伽・人・非人趣と同性に非ず。(一)秘密主、心は眼界に住せず、耳鼻舌身意界に
 住せず、見に非ず顯現に非ず、何を以ての故に(二)虚空相の心は諸の分別と無分別とを
 離れたり。(三)所以は何となれば、性、虚空に同なれば即ち心に同なり、性、心に同なれば
 即ち菩提に同なり、是の如く秘密主、心と虚空界と菩提との三種は無二なり、此れ等
 は悲を根本と爲し方便波羅蜜満足す、是の故に秘密主我れ諸法を説くこと是の如し、
 彼の諸の菩薩衆をして、菩提心清淨にして其の心を知識せしむ。秘密主、若し族姓
 の男、族姓の女、菩提を識知せんと欲は、當に是の如く自心を識知すべし。秘密
 主、云何んが自心を知るとならば、謂く若は分段、或は顯色、或は形色、或は境界、
 若しは色、若しは受想行識、若しは我、若しは我所、若しは能執、若しは所執、若し
 は清淨、若しは界、若しは處、乃至一切の分段の中に求むるに不可得なり。秘密主、
 此れ菩薩の淨菩提心門なり、初法明道と名くと。(四)釋して曰く、謂く無相虚空相及び

て更に一法なき意
 色等の六境、内
 には内外合觀する也
 心の外來應正等覺
 十八界を明して今
 の内六根界のみを
 擧げて餘は例す
 心に比して云ふ
 此は因の三名
 の異體を能求所求
 自下註解するなり
 覺所の總理の妙
 疏に無相菩提に就
 佛して更に餘道に
 無相菩提を以て一
 道無爲な法華一乘
 とすこと此の
 疏釋に本けり
 佛大日尊な
 り。又た下の文

此は此の住心の述
 情無相の理觀を明
 す。此の心、初發
 淨善提心。迹門の善
 處。此の門、法華
 一乘法。心を觀る云云
 此は正しく十乘觀
 法を明す觀不思議
 境。眞正發善提心。
 善巧安心止觀。破
 法。識通。道品
 調。對治助開。知
 次位。能安忍。無法
 愛。
 (一) 十法界 地獄
 (二) 十法界 地獄
 (三) 十法界 地獄
 (四) 十法界 地獄
 (五) 十法界 地獄
 (六) 十法界 地獄
 (七) 十法界 地獄
 (八) 十法界 地獄
 (九) 十法界 地獄
 (十) 十法界 地獄
 又云く云云
 此は此の住心の述
 情無相の理觀を明
 す。此の心、初發
 淨善提心。迹門の善
 處。此の門、法華
 一乘法。心を觀る云云
 此は正しく十乘觀
 法を明す觀不思議
 境。眞正發善提心。
 善巧安心止觀。破
 法。識通。道品
 調。對治助開。知
 次位。能安忍。無法
 愛。
 (一) 十法界 地獄
 (二) 十法界 地獄
 (三) 十法界 地獄
 (四) 十法界 地獄
 (五) 十法界 地獄
 (六) 十法界 地獄
 (七) 十法界 地獄
 (八) 十法界 地獄
 (九) 十法界 地獄
 (十) 十法界 地獄

非青非黃等の言は、並びに是れ法身眞如一道無爲の眞理を明す、佛、此を説て初
 法明道と名く。智度には入佛道の初門と名く。佛道と言ふは金剛界宮大日曼荼羅の佛
 を指す、諸の顯教に於ては是れ究竟の理智法身なれども、眞言門に望むれば是れ則ち
 初門なり、大日世尊及び龍猛菩薩並びに皆な明かに説き給へり、疑惑すべからず。
 又た下の文に云く、所謂る空性は根境を離て相もなく境界もなし、諸の戲論を越えて
 虚空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離るとは、亦
 た是れ理法身を明す。無畏三藏の説かく、行者此の心に住する時、即ち釋迦牟尼の
 淨土毀せずと知る、佛の壽量長遠の本地の身と、上行等の從地涌出の諸の菩薩と、一
 處に同會すと見、對治道を修する者は、迹は補處に鄰ると雖も、然も一人をも識ら
 ず、是の故に此の事を秘密と名く、此の理を證する佛を、亦た常寂光土の毗盧遮那と
 名く。大隋の天台山の國清寺の智者禪師、此の門に依て止觀を修し法華三昧を得、
 即ち法華中論・智度を所依として一家の義を構ふ、止觀を修し兼ねて門徒のために説
 て云く、正しく止觀を修すとは、乃至心を觀するに十法門を具す、一には觀不可思
 議境、二には起慈悲心、三には巧安止觀、四には破法遍、五には識通塞、六には修道

品、七には對治助開、八には知次位、九には能安忍、十には無法愛なり。一に心は是
 れ不可思議の境と觀すと、夫れ一心に十法界を具す、一法界に又た十法界を具す
 れば百法界あり、一界に三十種の世間を具す、百法界には即ち三千種の世間を具す、
 此の三千、一念の心に在り、若し心無きときんばやみなむ、介爾にも心あれば即ち
 三千を具す。亦た心は前に在り、一切の法は後に在りと言はざれば、亦た一切の法は
 前に在り一心は後に在りと言はざれば。若し一心より一切の法を生ずといはば、此れ則
 ち是れ縦なり、若し心一時に一切の法を合すといはば、此れ即ち是れ横なり、縦も亦
 た不可なり、横も亦た不可なり、只だ心は是れ一切の法なり、一切の法は是れ心な
 り。故に縦に非ず横に非ず、一に非ず異に非ず、玄妙深絶せり、識の識る所に非ず、
 言の言ふ所に非ず、所以に稱て不可思議境と爲すこと意此に在り。又云く、四句
 俱に皆な説くべし、因も亦た是なり、縁も亦た是なり、共も亦た是なり、離も亦た是
 なりと説く、若し盲人のために乳を貝の若し絲の若し雪の若し鶴の若しと説く、若
 し盲、諸説を聞いて即ち乳を解することを得、世諦に即して是れ第一義諦なり。當
 に知るべし終日に説き終日に説かず、終日に雙べて遮し、終日に雙べて照す、破に即

(七) 迷し 説き不
 (八) 天親云云 別
 (九) 二論の本意を
 申ぶる段 各々偏
 (一〇) 矢石 各々偏
 計して圓理に入ら
 ざることを射
 (一一) 俱に云云 第
 一義諦に就かば四
 句説く可らず世諦
 に依らば四句説く
 べしとの意 此
 (一二) 若し云云 此
 は化他の説法の大
 體を明す 睡眠の
 (一三) 眠法 睡眠の
 心所 第六識心
 (一四) 心 第六識心
 (一五) 王 一心は云云
 前の三科三種世間
 界如等に歷て専ら
 妙境三諦の相を示
 す一心は總無明
 (一六) 一切心 貪瞋
 等の心 一衆生云云
 (一七) 已上は三科なり
 今は衆生世間を明
 (一八) 一國土云云
 國土世間を明す
 (一九) 一相 自下は

して即ち立し、立に即して即ち破す、經論皆な爾なり。(二) 天親・龍樹は内鑒冷然として外
 に時の宜しきに適ふて各の權りに據る所なり、而れども人師偏に解し、學者苟くも執す
 遂に(三) 矢石を興して各の一邊を保ちて大いに聖道に乖けり、若し此の意を得ば(四) 俱に
 説く可からず俱に説くべし。(五) 若し便宜に隨はば、無明、法性に法して一切の法を生ず
 といふべし、(六) 眠法の(七) 心に法として則ち一切の夢事あるが如し。心と縁と合すれば則
 ち三種世間三千の相性皆な心より起す。一性少なりと雖も無にあらず、無明多しと雖も
 有にあらず、何者なれば一を指して多とすれば多も多に非ず、多を指して一とすれば一
 も少に非ず、故に此の心を名けて不可思議の境とするなり。(八) 一心は(九) 一切心なり、一
 切心は一心なり非一非一切なり、一陰は一切陰なり、一切陰は一陰なり非一非一切な
 り、一入は一切入なり一切入は一入なり非一非一切なり、一界は一切界なり一切界は一
 界なり非一非一切なり。(一〇) 一衆生は一切衆生なり一切衆生は一衆生なり非一非一切な
 り(一一) 一國土は一切國土なり、一切國土は一國土なり、非一非一切なり。(一二) 一相は一切
 相なり、一切相は一相なり非一非一切なり、乃至一究竟は一切究竟なり、一切究竟は一
 究竟なり非一非一切なりと解するが若きは、遍ねく一切の法に歷て皆な是れ不可思議

(一) 十如に約す。
 (二) 法性と云云
 此の下は教體の意
 に以て前の所歷を
 結び三諦等を成す
 (三) 一法云云 此
 は中論第四卷四諦
 品に四句頌を結び
 三觀を明す文に合
 す。

(四) 因縁云云 三
 智・一切種智を成
 ず。

(五) 隨情云云 三
 語を成す。

の境なり。(一) 法性と無明と合して一切の法陰界入等ありといふが若きは即ち是れ俗諦
 なり、一切の界入は是れ一法界といふは、即ち是れ眞諦なり、非一非一切といふは即ち
 是れ中道第一義諦なり、是の如く遍ねく一切法に歷て不思議の三諦に非ずといふこと
 無し。(二) 一法一切法といふが若きは、即ち是れ因縁所生の法は是れを假名と爲すもの
 にして假觀なり。一切法即一法といふが若きは我即ち是れ空と説くものにして空觀な
 り。非一非一切といふが若きは即ち是れ中道觀なり。一空一切空なれば假中として空
 ならずといふこと無し、總じて空觀なり。一假一切假なれば空中として假ならずといふ
 ことなし、總じて假觀なり。一中一切中なれば空假として中ならずといふことなし、總
 じて中觀なり。即ち中論に説く所の不可思議の一心三觀なり、一切の法に歷て亦た是の
 如し。(三) 因縁所生の法といふが若きは、即ち方便隨情にして道種の權智なり。一切法
 一法を我れ説て即ち是れ空といふが若きは即ち隨智にして一切智なり。非一非一切を
 亦た中道の義と名くるが若きは、即ち非權非實にして一切種智なり。上に例せば一權
 一切權なり、一實一切實なり一切非權非實なり、遍ねく一切に歷て是れ不可思議の三
 智なり。(四) 隨情の若きは即ち隨他意語なり、隨智の若きは隨自意語なり、非權非實の若

(一) 頓を云云 三
 (二) 此を云云 此
 (三) 思議にて殊ならざ
 (四) なるは云何と別
 (五) 難あり故に通釋す
 (六) 又た云云 四
 (七) 少に止觀第二の四
 (八) 種三昧の文を引く
 (九) 常坐 一行三
 (十) 味 常行 般舟三
 (十一) 味 九十日を一期
 (十二) 等三昧 七日を一期
 (十三) 三昧 又法華
 (十四) 三昧 三七日を一期
 (十五) 非行 非坐 請
 (十六) 觀音三昧 四十九
 (十七) 日 大悲三昧 三七
 (十八) 日 一期とす
 (十九) 師は意起れば修す
 (二十) る故にかく名く
 (二十一) は、覺意 大品に
 (二十二) な覺 識明了なれば
 (二十三) かくいへり
 (二十四) 通じて云云
 (二十五) 通名を釋す
 (二十六) 善心 一切の

きは即ち非自非他意語なり、遍ねく一切の法に歷て漸頓と不定との不思議の教門に非ることなし。(一) 頓を解するが若きは即ち心を解す、心尙し不可得なり、云何んぞ當さに趣非趣あるべけんや。漸を解するが若き即ち一切の法の心に趣くことを解す、不定を解するが若きは即ち是の趣に過ぎざることを解す。(二) 此れ等は名異にして義同なり、行人に軌則するを呼んで三法と爲し、所照を三諦となし、所發を三觀となし、觀成するを三智となし、他を教ふるを呼んで三語となし、宗に歸するを呼んで三趣となす。若し斯の意を得つれば一切に類して皆な法門を成す、種種の味、煩を嫌ふこと勿れ。(三) 又た四種の三昧を修して菩薩の位に入ること明して云く、行法衆多なれども略して其の四を言ふ。一には(四) 常坐、二には(五) 常行、三には(六) 半行半坐、四には(七) 非行非坐なり、亦たは(八) 隨自意なり亦たは(九) 覺意と名く、(十) 通じて三昧と稱することは調直定なり。大論に云く、(十一) 善心は一處に住して動せず、是を三昧と名く、法界は是れ一處なり、止觀は能く住して動せざるなり、四行を縁として心を觀す、縁に籍て調直なり故に通じて三昧と稱ふ。又た云く、(十二) 根塵相對して一念の心起するに即空・即假・即中なり、是を最要とす。(十三) 又た云く、横豎一心にして(十四) 止觀を明さば、上の所説の

禪定の心ないふ。
 (一) 根塵 六根六
 (二) 止觀 又た云く云云
 (三) 止觀 第五已下破法
 (四) 編を釋するに三門
 (五) 門取要の文なり。
 (六) 止觀 (Kama-
 (七) sha & Vipassana)
 (八) 止は消極的に攝心
 (九) 歸住の修養にて邪
 (十) 神の魔を防止す
 (十一) 念妄思の生起を遮
 (十二) す、觀は積極的に
 (十三) 正智を開發し諸法
 (十四) を觀照す、兩者相
 (十五) 俟て究竟の果を得
 (十六) 中(七) 無生門 四門
 (十七) 明(八) 一切種智云云
 (十八) 三智 一切種智云云
 (十九) 示(九) 此の觀云云
 (二十) 自下は六即の變四
 (二十一) 即位に約して觀成
 (二十二) 知(十) 後轉た深く佛
 (二十三) 即(十一) 初隨喜品を明す
 (二十四) 一(十二) 品あるうちの一
 (二十五) 根淨ければ諸根清

如きは横豎深廣にして一切の邪執を破し、一切の經論を申べ、一切の觀行を修し、一切の根縁に返て廻轉無窮なり、言煩して見難し、今當さに結束して其の正意を出すべし。(一) 無生門の若き千萬重疊なれども、只だ是れ無明一念の因縁所生の法なり、即空即假即中の不思議の三諦なり、一心三觀、(二) 一切種智、佛眼等の法なるのみ。無生門既に爾なり、諸餘の横門も亦た復た是の如し、種種に説くと雖も、只だ一心三觀なり、故に横もなく豎も無し、但だ一心に止觀を修す。又た云く、衆生と云ふは貪恚癡の心は皆な我ありと計す。我は即ち衆生なり、我は心の起するに遂ふ、心に三毒を起すを即ち衆生と名く。此の心起する時、即空即假即中なり、心に隨て念を起するに止觀具足す、觀をば佛知と名け、止を佛見と名く、念念の中に於て止觀現前す、即ち是れ衆生佛知見を開くなり。(三) 此の觀成就するを(四) 初隨喜品と名く、讀誦扶助して此の觀轉明して第二品を成す、行の如くにして説て心を資すること轉明にして第三品を成す、兼ねて六度を行じて功德轉た深ければ第四品を成す、具さに六度を行じ事理滅すること無くして第五品を成す。六根淨に轉入するを相似の位と名く。故に法華に云く、未だ無漏を得すと雖も而も其の(五) 意根清淨なり。此の若く相似の位より進んで銅輪に入て無明

淨なる故に、此を擧げ餘を略す。此を斷ずる位を通じていふ。果報四土中の第三實報土。四土中の第四寂光土。四土中智と翻す。若一切

〔五〕此の一道云云。自下深秘釋なり。

を破し、無生忍を得るに四十二地の諸位あり。故に法華に云く、是の如く無漏清淨の果報を得といへり、亦た是れ三賢十聖果報に住す、唯佛一人のみ淨土に居すといへり、聖賢を以て佛に例するに、妙覺を指すに是れ報なり。又云く、若し法愛を破すれば、三解脱に入て眞の中道を發す、所有の慧身他に由て悟らずして、自然に薩婆若海に流入す、無生忍に住するを亦た寂滅忍と名く、首楞嚴を以て遊戲神通し、大智慧を具すること大海水の如し、所有の功德唯し佛のみ能く知り給ふ。今、止觀進趣の方便は此れに齊るのみ。入住の功德をば今論する所なし、後に當さに重釋すべし。是の十種の法を大乘觀と名く、是の乘を學する者を摩訶衍と名く是を天台宗の修行の相と爲す。

〔五〕此の一道無爲の住心に二種の義あり、謂く淺略といは前の如し、深秘の義とは下の所說の眞言門の義是れなり。言は一道無爲住心の所說の法門は、是れ觀自在菩薩の三摩地門なり、所以に觀自在菩薩の手に蓮華を執て、一切衆生の身心の中に本來清淨の理有ることを表す。無明三毒の泥中に沈淪し、六趣四生の垢穢に往來すと雖も、染せず垢ならざること猶し蓮華の如し、是の本來清淨の理を一道無爲と名く。是の一道を亦たは一乘と名く、所謂る佛乘なり、乘は能運載に約して名を得、道は能開通に據て

稱を立つ、名は二つ別なりと雖も理は則ち一なり。是の觀自在菩薩、普等三昧に住して自心の眞言を説て曰く。

薩嚩怛他藥多、嚩盧百多、羯囉囉訶惹(原本梵字)

初の一句は即ち是れ一切如來なり、謂く十方三世の諸佛なり、次の句は觀の義なり、彼の佛の所觀を用ふるが故に諸如來觀と名く、即ち是れ平等觀なり、即ち是れ普眼觀なり、次の句は體なり、所謂る大悲を體とす猶し金人の彼の自體純に是れ金なるを以ての故に金人と爲るが如し、此の菩薩も亦た爾なり、純に大悲を以て體とす。囉囉囉といは、囉は是れ塵垢の義なり、阿字門に入れば即ち是れ無塵垢なり、三つ重ぬる所以は三毒三界三乘三業等を除けばなり。此の三重の塵垢を除くに由て、速かに本來清淨一道無爲の理を證す。〔二〕此の眞言は初の薩原本字を以て體とす。〔三〕薩字は一切諸法諦の義なり、觀自在菩薩、普眼力を以て一切諸法を觀じ、不倒不謬なるが故に諦と名く。諦は審なり、所觀の理事徹底し審諦ならざること無きが故なり、法華經の題目の梵名に云く。

薩達磨奔荼利迦蘇多覽(原本梵字)

〔二〕此の眞言云云。自下は別して種子を陳ぶるに初に標の字相を明す。

(二)此の菩薩云云
金界の果者に依て
説く。

初の薩(原本梵字)字は亦た是れ薩字なり、此の經も亦た初の一字を體とす、經内の一切の句義は皆な此の一字の義を説けり、譬へば易の一爻に、能く六十四卦及び十翼等の萬象を含むが如し、故に觀自在菩薩は此の一字を以て眞言となす。(三)此の菩薩をば亦たは得自性清淨如來と名く、故に金剛頂經に云く、時に彌伽梵得自性清淨法性如來、復た一切法平等觀自在智印を説き給ふと。釋經に云く、得自性清淨法性如來とは、是れ觀自在菩薩の異名なり。所謂る世間一切垢清淨の故に則ち瞋清淨なりとは、此れ則ち金剛法菩薩の三摩地なり。所謂る世間一切垢清淨の故に則ち一切罪清淨なりといは、此れ則ち金剛利菩薩の三摩地なり云云。

(三)法華經云云
通じて彼の宗教を
開す。
(四)天台云云 宗
祖の撰述を明す。

(三)法華經と及び餘の觀音部の經等とは、皆な是れ觀自在菩薩の法曼荼羅なり、薩(原本梵字)の一字の眞言を以て悉く攝し盡せり、(四)天台の智者禪師、法華經・中論・智度論等に依て止觀の法を修し、四教義・禪門・觀心論を撰し、兼ねて弟子等のために説く。上足の弟子灌頂、法華の玄文・文句・止觀各の十卷を記す、後の弟子湛然、文句・玄義・止觀等の私記を作る、是を天台法華宗と名く。此の如く法門は並びに是れ法王の一職、法界の一門なり、百字輪の一の薩(原本梵字)字より流出するを以つて、攝末歸本すれば悉く一字に含めり。

(二)經論疏 法華
經・中觀論・三大部
(玄義・文句・止觀)
等をいふ。

(三)故に云云 經
を引て證成す。

(四)若し云云 自
下は密機を勸むる
に初に四緣具足な
明す。

(四)若し云云 修
行の次第を明す。

若し衆生ありて此の門より法界に入る應き者には、觀音の身を現じて此の法教を授け給ふ、若し能く受持し讀誦すれば、速かに解脱を得て觀音菩薩に等同なり。若し此の眞言の密義を得れば、一切の法教皆な悉く平等平等なり。若し多名顯句の(二)經論疏等に依て修行する者は、徒らに年劫を積み空しく身心を費せども法界に證入することを得ざるなり。(三)故に法華の儀軌經に云く、一切衆生の身中に皆な佛性あり如來藏を具せり、一切衆生は無上菩提の法器に非ること無し。(四)若し此の如きの法を成就せんと欲はば、應當に先づ是の如きの四緣を具すべし、一には善知識に親近す、即ち是れ灌頂阿闍梨なり、二には正法を聽聞す、正法とは是れ妙法蓮華經王なり、三には理の如く作意す、如理作意とは即ち是れ瑜伽の觀智なり。瑜伽觀智とは即ち是れ本尊及び眞言印等を觀念するなり、四には法隨法行す、法隨法行とは謂く奢摩他と毗鉢舍那とを修するなり、即ち無上菩提を證するに堪任せり。(五)若し妙法蓮華經を修持せん若しは男、若しは女、則ち修眞言行に依て、密に菩薩の道を行すべく、當に先づ大悲胎藏大曼荼羅に入り、並びに護摩の道場を見て身中の業障を滅除し、阿闍梨の其の灌頂を與ふことを得て即ち師に從て念誦儀軌三昧耶を受け、護身結界し迎請供養し、乃至

己身普賢大菩薩の身に等同なりと観すべし。若し是の如きの増上縁を具せざる者は、所有の此の如きの經王を讀誦し修習すれども、速疾に三昧を證成することを得難し、一一の印契儀軌眞言當さに灌頂阿闍梨の處に於て。躬ら決擇を稟授すべし、専ら檀に作す者をば、是を則ち名けて越三昧耶と爲す、傳と及び受者と俱に重罪を獲るなりと。

國譯秘密曼荼羅十住心論卷第八終

行門に約せば華嚴法
の驚人に遇ふ密佛
悉本文にあり。委
三。麼囉 大海な
り。蘇迷 前に在
り。芥石 芥石大
劫。我が心 總該
萬有の一心なり。
六。巧藝 巧藝
の二人の名。巧藝
阿那律の二人の名
二句は三乘は下の
法門に思惟を絶つ
とを明す。惟を絶つ
佛衆生の三法は迷
悟の不同に於て
華嚴の佛乘を歎す
て淨縁所に成て此
の佛を屬して此人
云ふ。自心に迷ふ
下は生佛の心體は
同なれども迷悟の
用異なること悟の
す。

國譯秘密曼荼羅十住心論

卷第九

極無自性住心第九

極無自性住心といは、今此の心を釋するに二種の趣あり、一には顯略趣、二には秘密趣なり。顯略趣とは、夫れ深甚なるは(一)麼囉、峻高なるは(二)蘇迷、廣大なるは虚空、久遠なるは(三)芥石なり、然りと雖も芥石も竭き磷らぎ、虚空も量りつべし、蘇迷は十六萬、麼囉は八億那なり、近ふして見難きは我が心なり、細にして空に遍するは我が佛なり、我が佛は思議し難し、(四)我が心は廣にして亦た大なり。(五)巧藝心迷ふて竿を擲げ、(六)離眼盲して見ることを休む、禹が名舌斷へ、夸が歩み足別る、(七)聲縁の識も識らず、薩埵の智も知らず。奇哉の奇、絶中の絶なるは其れ只だ(八)自心の佛か(九)自心に迷ふが故に六道の波鼓動し、心原を悟るが故に一大の水澄靜なり、澄靜の水には影萬像を落し、一心の佛は諸法を鑒知す、衆生此の理に迷つて輪轉絶ゆること能はず、蒼生太た狂醉して自心を覺ること能はず。大覺の慈父其の歸路を指し給ふ、歸路は五

（一）等空の心は八九生
下の四句は心續生
心の相を明す
（二）是の因云
（三）約て顯は果に
明す密の因たるを
（四）初發心
（五）經第九梵行品
（六）成道して二月八
（七）座に坐して此より
（八）四日に至る迄座を
（九）起す思惟して自
（十）日法樂を受けて五
（十一）日より廿一日に
（十二）るを海印定中に
（十三）華嚴經を説く
（十四）出で先に諸大山
（十五）照し漸く低地に
（十六）ぶ如來説法亦復然
（十七）り此を喻ふ
（十八）心佛の不異
（十九）心佛を示す
（二十）差別を示す
（二十一）中論は十支
（二十二）の三門を陳ぶ

百由旬なり、此の心は則ち都亭なり、都亭は常の舎に非ず、縁に随つて忽ちに遷移す、遷移定れる處なし、是の故に自性無し、諸法自性無きが故に卑を去け尊を取る、故に眞如受熏の極唱、勝義無性の秘告あり。一道を彈指に驚かし、無爲を未極に覺とす、（一）等空の心、是に於て始て起り、寂滅の果、果還つて因と爲る。（二）是の因是の心、前の顯教に望むれば極果なり、後の秘心に於ては初心なり、（三）初發心の時に便ち正覺を成すと、宜しく其れ然る可し。初心の佛其の徳不思議なり、萬徳始めて顯れ一心稍現す。此の心を證する時三種世間は即ち我が身なりと知り、十箇の量等は亦た我が心なりと覺る。盧舍那佛始め（四）成道の時、第二七日に普賢等の諸大菩薩等と廣く此の義を談じ給へり、是れ即ち所謂の華嚴經なり。爾れば乃ち華藏を苞んで以て家と爲し法界を籠めて國と爲す。七處に座を莊り八會に經を聞く。此の海印定に入つて法性の圓融を觀じ、彼の（五）山王の機を照して（六）心佛の不異を示す、（七）九世を刹那に攝して一念を多劫に舒ぶ、一多相入し理事相通す、帝網を其の重重に譬へ錠光を其の隱隱に喻ふ。遂使て覺母に就て以て發心し、普賢に歸して證果す、三生に練行し百城に友を訪ふ。一行に一切を行じ一斷に一切を斷す。初心に覺を成じ十信に道圓なりと云ふと雖も、因果異ならず

（一）無善畏云
（二）此の一切法を以て
（三）品に一切法を以て
（四）る中の極無自性心
（五）所攝の如法界明
（六）乘の眞如法界三
（七）界の眞如法界三
（八）法相大乗の如く
（九）如計かるなり
（十）法相大乗の如く
（十一）法相大乗の如く
（十二）法相大乗の如く
（十三）法相大乗の如く
（十四）法相大乗の如く
（十五）法相大乗の如く
（十六）法相大乗の如く
（十七）法相大乗の如く
（十八）法相大乗の如く
（十九）法相大乗の如く
（二十）法相大乗の如く
（二十一）法相大乗の如く
（二十二）法相大乗の如く
（二十三）法相大乗の如く
（二十四）法相大乗の如く
（二十五）法相大乗の如く
（二十六）法相大乗の如く
（二十七）法相大乗の如く
（二十八）法相大乗の如く
（二十九）法相大乗の如く
（三十）法相大乗の如く
（三十一）法相大乗の如く
（三十二）法相大乗の如く
（三十三）法相大乗の如く
（三十四）法相大乗の如く
（三十五）法相大乗の如く
（三十六）法相大乗の如く
（三十七）法相大乗の如く
（三十八）法相大乗の如く
（三十九）法相大乗の如く
（四十）法相大乗の如く
（四十一）法相大乗の如く
（四十二）法相大乗の如く
（四十三）法相大乗の如く
（四十四）法相大乗の如く
（四十五）法相大乗の如く
（四十六）法相大乗の如く
（四十七）法相大乗の如く
（四十八）法相大乗の如く
（四十九）法相大乗の如く
（五十）法相大乗の如く
（五十一）法相大乗の如く
（五十二）法相大乗の如く
（五十三）法相大乗の如く
（五十四）法相大乗の如く
（五十五）法相大乗の如く
（五十六）法相大乗の如く
（五十七）法相大乗の如く
（五十八）法相大乗の如く
（五十九）法相大乗の如く
（六十）法相大乗の如く
（六十一）法相大乗の如く
（六十二）法相大乗の如く
（六十三）法相大乗の如く
（六十四）法相大乗の如く
（六十五）法相大乗の如く
（六十六）法相大乗の如く
（六十七）法相大乗の如く
（六十八）法相大乗の如く
（六十九）法相大乗の如く
（七十）法相大乗の如く
（七十一）法相大乗の如く
（七十二）法相大乗の如く
（七十三）法相大乗の如く
（七十四）法相大乗の如く
（七十五）法相大乗の如く
（七十六）法相大乗の如く
（七十七）法相大乗の如く
（七十八）法相大乗の如く
（七十九）法相大乗の如く
（八十）法相大乗の如く
（八十一）法相大乗の如く
（八十二）法相大乗の如く
（八十三）法相大乗の如く
（八十四）法相大乗の如く
（八十五）法相大乗の如く
（八十六）法相大乗の如く
（八十七）法相大乗の如く
（八十八）法相大乗の如く
（八十九）法相大乗の如く
（九十）法相大乗の如く
（九十一）法相大乗の如く
（九十二）法相大乗の如く
（九十三）法相大乗の如く
（九十四）法相大乗の如く
（九十五）法相大乗の如く
（九十六）法相大乗の如く
（九十七）法相大乗の如く
（九十八）法相大乗の如く
（九十九）法相大乗の如く
（一百）法相大乗の如く

して五位を経て車を馳せ、相性殊ならずして十身を渾けて同歸す、斯れ則ち華嚴三昧の大意なり。故に大日如來秘密主に告げて言く、所謂の空性は根境を離れて相も無し境界も無し、諸の戲論を越えて虚空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生すと。（一）善無畏三藏の説かく、此の極無自性心の一句に悉く華嚴教を攝し盡すと。所以は何んとなれば、華嚴の大意は始を原ね終を要むるに（二）眞如法界不守自性隨縁の義を明す。故に法藏師の五教に云く。若し眞如（三）一向に有りと計せば二の過失有り、一には常の過、謂く隨縁せざるが故に染に在つて隱に非ず、故に了因を待たず、故に即ち常の過に墮す。問ふ、諸の聖教の中に並に眞如を説いて凝然常と爲す、既に縁に隨はず豈に（四）是れ過ならむや。答ふ、聖の眞如を説いて凝然と爲ることは、此れは是れ縁に隨つて染淨と成る時、恒に染淨と作れども而も自體を失せず、是れ即ち無常に異らざるの常なり不思議常と名づく、諸法と作らざる情所謂の如きの凝然と謂ふには非らざるなり。（五）若し諸法と作らずして凝然なりと謂はば、是れ情の所得なるが故に即ち眞常を失せむ、彼の眞常は無常に異らざるの常なるを以て

(二) 經の中 勝鬘
經取意の文。

(一) 經に云く 四
卷楞伽經の第四の
文。經に云く 起
信論の文、起信論
を經とするは寫謬
ならん。
(二) 問ふ 問中初
には上の眞如の常
と無常との二義を
決定す。
(三) 諸の緣起 依
他の法は無性に由
りて成ず、無性は
即ち常なり、故に
緣起に異らすして
緣合するは即ち
自性あるとなきが
故に是れ性無なり
此の二義を具する
が故に依他の法と
名く。
(四) 經に云く 維
摩經弟子品の文。

なり。無常に異らざるの常は、情の外に出でたるが故に眞常と曰ふ。是の故に(一) 經の中
に不染にして染とは常にして無常と作ることを明すなり、染にして不染とは無常と作
る時に常を失せざることを明すなり。問ふ、教の中に既に無常に異らざるの常に就く
が故に、眞如を説いて凝然常と爲ば、何が故に常に異らざるの無常に就くが故に眞如を
説いて無常と爲さざるや。答ふ、教の中に亦た此の義を説けり、故に(二) 經に云く、如來藏
とは苦樂を受けて因と俱に若しは生じ若しは滅すと。(三) 經に云く、自性清淨心は無明
の風に因て動じて染心と成る等なり。此の教理に以るが故に眞如は常に異らざるの無
常なり、故に緣に隨つて體を隠して是れ非有なり。(四) 問ふ、眞如は是れ不生滅の法なれ
ども、既に無常に異らざるの常なるが故に説いて常と爲し、常に異らざるの無常な
るが故に無常と説くことを得と云はば亦た云ふべし、依他是れ生滅の法なれども、
亦た常に異らざるの無常と無常に異らざるの常との義有ることを得べきや。答ふ、亦
た並に有ることを得るなり。何を以ての故に、(五) 諸の緣起無常の法は即ち無自性にして
方に緣起を成ず、是の故に常性に異らすして而も無常なることを得。故に(六) 經に云く、
不生不滅は是れ無常の義なりと、此れ即ち常に異らすして無常と成るなり。又た諸の

(一) 經に云く 維
摩經入不二品の文
(二) 又云く 同經
菩薩品。
(三) 是の故に 自
下凝然常たるを
何するなり。
(四) また若し 自
下其の不隨緣を責
む。
(五) 二に斷の過
情有るを以て眞を斷
するなり、此の二
文に對す第一は、前
に對し、此は、過
さあり、此に對し
て(六)に二に斷の
過とせり。
(六) 三藏 無畏三
藏の大經具緣品
の疏なり。
(七) 行者 第八住
心行者。
(八) 鄰虛 極微の
別名。
(九) 本不生 法性
眞如の理體に歸す
即ち是れ寂滅平等
究理法身なり、眞
亦是れ一心本源眞
如本覺如來藏自性
清淨心なり。

緣起は、即ち是れ無性なるを以て、緣起を滅して方に無性と説くに非ず、是れ即ち無
常に異らざるの常なり。故に(一) 經に云く、色即是空なり色滅の空に非らざるが故にと。
(二) 又云く衆生即ち涅槃なり、更に滅せざるが故にと云ふ等なり。此の中の二義と眞如の
二義と相配して知る可し。此れ即ち眞俗雙融して二にして無二なり、故に論に云く、
智障極めて盲暗なるもの、眞俗を謂つて別執すと此の謂なり。(三) 是の故に若し眞如
情所謂に同じて凝然常なりと執せば、即ち緣に隨つて其の自體を隠さず、了因を假ら
ざれば即ち常の過に墮するなり。(四) また若し緣に隨つて染淨を成せずんば、染淨等の
法には即ち所依無からむ、依無くして法あらば又常に墮するなり、染淨の法は皆な自
體無くして眞に頼つて立するを以ての故に。(五) 二に斷の過とは如情の有は即ち眞の有
に非ず、眞の有に非ざるが故に即ち眞を斷す。また若し有と云はば即ち染淨に隨はざれ
ば、染淨の諸法には既に自體無からむ、眞また隨はざれば法有ることを得ざるも亦た
是れ斷なり。(六) 三藏又云く(七) 行者是くの如くの微細の慧を得る時に、一切の染淨の諸
法を觀するに、乃至少分由し、(八) 鄰虛の如きも緣より生せざる者なし、若し緣より生
ずるは即ち自性なし、若し自性なきは即ち是れ本不生なり、(九) 本不生は即ち是れ心の

(二) 不可得 第八
住心が究竟至極の
佛果を得ずし復た
不可得なり。復た
得ざるは遺道に約し
て無自性を解する
なり。

(三) 時に云云 自
下密佛の驚覺に由
り未だ五相成身を
證せざるを明す

(四) 無色身三昧
色は識なり、秘密
金剛定をいふ。

(五) 一切如來云云
第九住心の顯密中
して所謂の顯密中
間進趣の心品なり
此の中五相成身を
説く。

實際なり、心の實際もまた復た不可得なり、故に極無自性心生と曰ふ。此の心を前二劫に望むれば、由し蓮華の盛に敷けたるが如し、若し後の二心に望むれば即ち是れ果復て種と成る故に、經に是の如き初心を佛成佛の因と説くと曰ふ。前の二劫とは他縁、一道の二種の住心を指す、後の二心とは眞言門の根究竟の二心を示す。また極無自性心に眞如法身驚覺の緣力を蒙つて、更に金剛際に進むことを明すことは、大日經及び金剛頂經等に據ると云ふ。時に婆伽梵大菩提普賢大菩薩、一切如來の心に住したまふ、寂滅無相平等究竟眞實なり。(三) 時に金剛界の一切如來、受用身を現じて彈指し驚覺して告げて曰く、善男子、汝が所證は是れ一道清淨なれども、未だ秘密金剛三摩地を證せず、此れを以て足ると爲すこと勿れ。時に一切義成就菩薩、一切如來の驚覺に由て、即ち(四) 無色身三昧より起つて一切如來を禮して白して言く、世尊如來、我れに所行の道を教示し給へ、云何んが修行し云何んが是れ眞實なる。(五) 一切如來異口同音に彼の菩薩に告げて言く、善男子、當さに自心を觀察する三摩地に住すべし、此れより已後に五相成身の眞言を説く。此の五相の眞言の加持に由つて大日尊の身と成ることを得。是くの如くの明證一に非ず、繁を恐れて述べず、一道清淨と言ふは即ち是れ一乘一如等の理是れなり。

(一) 又華嚴云云
自下華嚴宗につき
宗祖の章疏を引き
て證す。
(二) 藏公の法藏賢
首大師華嚴の祖
佛家は色心諸法に
小乘は於て六因四
縁を立て、法相は
縁を起して、法相
阿頼耶縁起を明し
實大乘は法性縁起
を説く。華嚴は法
界縁起なり。幻有を
空し真空を顯す。

(一) 又華嚴宗には五教と十玄と六相と華嚴三昧とを以て至要と爲す、故に略して之を出さん。(二) 藏公の金師子章に曰く、此の金師子を釋する一章に略して十門を作つて分別す。一には縁起を明し、二には色空を辨じ。三には三性に約し、四には無相を顯はし、五には無生を説き、六には五教を論じ、七には十玄を勸し、八には六相を括り、九には菩提を成じ、十には涅槃に入る。一に(三) 縁起を明さば、金に自性無きを以て、工巧匠の縁に隨つて遂に師子起すること有り、起は但だ是れ縁なるが故に縁起と名く。二に(四) 色空を辨せば、師子の相は虚にして唯だ是れ眞金なるを以て師子は有ならず、金體は無ならず故に色空なり。又空に自體無し、色に約して以て明さば、幻有を礙へず故に色空と云ふ。三に(五) 三性に約せば、師子の情有を名けて遍計と爲し、金性の不變を號して圓成と云ふ、金師子の似有を稱して依他と曰ふ。四に(六) 無相を顯すとば、金を以て師子を收むるに、金の外に更に師子の相として得べきこと無し故に無相と云ふ。五に(七) 無性を説くとば、正しく師子の生を見る時に、祇だ是れ金のみ生ず、金の外に更に一物無し、師子には生滅ありと雖も、金の體は本より増減無し、金に増減無きを以ての故に無生と曰ふ。六に(八) 五教を論せば、(九) 此の金師子は唯だ是れ因縁の法なり、

(二) 第二 五教中の始教
(三) 第三 五教中の終教

(三) 第四 五教中の頓教

(四) 第五 五教中の圓教

(五) 十支 具には十支縁起無碍法門義といふ十の義門を以て無盡を顯す。
(六) 一に云く 金と師子と同時成立なり。
(七) 第二 金と師子と別體なく相容の義なり。
(八) 第三 金と師子は相離れざるをいふ。

念念に生滅して實に師子として得べき無きを愚法の聲聞教と名く。(二) 第二に即ち此の縁生の法は各の自性無し、徹底唯空なるを大乘始教と名く。(三) 第三に、言く復た徹底唯空なりと雖も幻法宛然なることを礙へず。縁生と假有との二相雙て存するを大乘終教と名く。(四) 第四には即ち此の二相互に奪し兩ながら亡して情謂存せず、俱に力あること無し、互に立し雙べて混じて名言路絶し、心を栖すに寄んごころ無きを大乘頓教と名く。(五) 第五に即ち此れ情盡き體露るゝの法なり、混じて一塊と成つて大用を繁興し、起ること必ず全く真なり、萬像紛然として參て雜せず、一切即ち一にして皆同無性なり、一即ち一切にして因果歴然なり、力用相收卷舒自在なるを一乘圓教と名く。七に(五) 十支を勸すとは、(六) 一には云く此の金と師子と同時に成立し、圓滿具足するを同時具足相應門と名く。(七) 第二には金と師子と相容成立して一多礙ゆること無し、中に於て理事の諸相各各不同なり、或は一或は多、各の自位に住するを一多相容不同門と名く。(八) 第三には若し師子を見れば即ち唯だ師子にして金無し、即ち金は隠れ師子は顯る、若し金を見れば即ち唯だ金にして師子無し、即ち金は顯れ師子は隠る。若し兩處に看れば即ち俱に顯れ俱に隠る。隠るをば秘密と名け顯るを即ち顯著と名く。故に秘密隱

(二) 第四 帝網の喩に約し師子の衆毛の事無盡相入無碍を明す。

(三) 第五 此は行に約して説く。

(三) 第六 之は用に約して説く。

(四) 第七 師子の一體につき種種の義門あるを説く。

(五) 第八 此の門には時に約して説く。

顯俱成門と名く。(二) 第四には即ち此の師子の眼耳支節の一一毛處各各に全く師子を收む。一一の毛處の師子同時に頓に一莖毛の中に入る、一一の莖毛の中に各各に皆な無邊の師子あり。又た復た一一の毛に此の無邊の師子を載せて、還て一の莖毛の中に入る。是の如く重重無盡無盡にして帝網天珠の如くなるを因陀羅網境界門と名く。(三) 第五には此の師子の眼に師子を收め盡せば、即ち一切純に是れ眼なり、若し耳に師子を收め盡せば、即ち一切純に是れ耳なり。若し諸相同時に相ひ收めて悉く皆な具足すれば、即ち一一皆な純、皆な雜なり。また一一に皆な是れ圓滿藏なり、故に諸藏純雜具德門と言ふ。(四) 第六には師子の諸根一一の毛頭に皆な各の全く師子を收め盡して、一一に皆な徹遍せり、師子の耳は即ち眼、眼は即ち鼻にして自在に成立すること、障礙無きが故に故に諸法相即自在門と名く。(五) 第七には此の師子の、或は隠れ或は顯はれ、若しは一若しは多と、定純定雜と、有力無力と、此れに即し彼れに即するとの、主伴輝りを交へて理事齊しく現じ、皆な盡く相容し、礙へずして安立し微細に成辨す。故に微細相容安立門と名く。(六) 第八には此の師子は是れ有爲の法にして、念念に生滅して刹那も間無し、分つて三際と爲す、爲く過去現在未來なり。此の三際に各の過去現在未來あり、

(二)第九師子の
上に前述の隠顯一
多等の自性あるも
なる唯之れ心分別
なる旨を明す。
(三)第十金師子
に託して正理を顯
して正解を生ぜし
むるなり。
(四)六相此は舊
華嚴二十四地品
の初地十大地願に
託して正理を顯
して正解を生ぜし
むるなり。
(五)六相此は舊
華嚴二十四地品
の初地十大地願に
託して正理を顯
して正解を生ぜし
むるなり。

(四)涅槃前の善
提は智を明し此は
提を明す此の二
を二轉依の妙果と
いふ。

三三の位を總べて以て九世を立つ、即ち更に束ねて一數の法門と爲す。復た九世十世
各各に融隔の不同ありと雖も相ひ由て成立し、通融無礙にして相同して一念と爲す、
故に十世隔法異成門と名く。(二)第九には即ち此の師子と金と或は隠れ或は顯れ、或は
一或多、自性有ること無く心に由て廻轉す、事と説き理と説く、成あり立あるが故
に唯心廻轉善成門と名く。(三)第十には此の師子を説くは用て無明を表し、此の金體に託
しては具さに眞性を彰す、二事合説して阿頼耶識に況して正解を生せしむるを名けて、
託事顯法生解門と爲す。第八に(三)六相を括るとは、言はく一の師子は是れ總相なり五
根の差別は是れ別相なり、共して一緣起を成ずるは是れ同相なり、眼耳各の相ひ是な
らざるは是れ異相なり、諸根合會して師子あることを得るは是れ成相なり、諸根各の
自位に住するは是れ壞相なり。第九に菩提を成せば、此には道なり覺なりと云ふな
り。眼に師子を見るの時、一切の有爲の法は、更に壞することを待つべからず、本來
寂滅にして諸の取捨を離れたりと見る、即ち此の路に於て薩婆若海に流入するが故に
名けて道と爲す。無始より已來所作顛倒して一として實體有ること無しと解すが故に
名けて覺と爲す。畢竟して一切種智を具するを成菩提と名く。第十に(四)涅槃に入ると

(二)二相俱に盡きて煩惱生せず、好醜現前すれども心安き
は、此の師子と金とを見るに、(二)二相俱に盡きて煩惱生せず、好醜現前すれども心安き
こと海の如し。妄想すべて盡きて諸の逼迫なし、纏を出でて障を離れ永く苦源を絶する
を入涅槃と爲すなり。
又た澄觀法師の新華嚴の疏に云く、頓に諸行を成ずとは、一行即ち是れ一切行なるが故
に。此に復た二義あり、一には心觀に約す、二には性融に約す。今謂く一念相應して能
く頓に具し成す。謂く此の心を知るは即ち是れ佛智なり、佛智は即ち是れ無念なり、無
念の心體は内外に著すること無く諸過自ら防ぎ諦理を忍可し身心の相を離れ寂然とし
て動せず、了かに性空を見、善く有無に達して進んで妙覺に詣る、是れ眞の修習なり、
決斷分明にして十度具せり、十度既に爾なり餘行も例して然なり、故に一行を修して
一切行を成す。二に性融に約すとは、一行に隨つて法性に稱ふを以ての故なり、法性
融攝するが故に、此の一行は性に如ふて普く收めて行として具せざること無し、廣く
は下に説くが如し。(三)又云く七に地位を知らしむとは、同じく一道を修して佛果に至
るに階差あるが故に、虛室の千燈の同じく空に遍すと雖も、前後の明に微著あること
を妨げざるが如し。若し此の位無くんば徒らに妙行を修せむ。此の位を知らずんば、

(三)又云 自下圓
教華嚴に位を設く
る大意を明す。

は、此の師子と金とを見るに、(二)二相俱に盡きて煩惱生せず、好醜現前すれども心安き
こと海の如し。妄想すべて盡きて諸の逼迫なし、纏を出でて障を離れ永く苦源を絶する
を入涅槃と爲すなり。
又た澄觀法師の新華嚴の疏に云く、頓に諸行を成ずとは、一行即ち是れ一切行なるが故
に。此に復た二義あり、一には心觀に約す、二には性融に約す。今謂く一念相應して能
く頓に具し成す。謂く此の心を知るは即ち是れ佛智なり、佛智は即ち是れ無念なり、無
念の心體は内外に著すること無く諸過自ら防ぎ諦理を忍可し身心の相を離れ寂然とし
て動せず、了かに性空を見、善く有無に達して進んで妙覺に詣る、是れ眞の修習なり、
決斷分明にして十度具せり、十度既に爾なり餘行も例して然なり、故に一行を修して
一切行を成す。二に性融に約すとは、一行に隨つて法性に稱ふを以ての故なり、法性
融攝するが故に、此の一行は性に如ふて普く收めて行として具せざること無し、廣く
は下に説くが如し。(三)又云く七に地位を知らしむとは、同じく一道を修して佛果に至
るに階差あるが故に、虛室の千燈の同じく空に遍すと雖も、前後の明に微著あること
を妨げざるが如し。若し此の位無くんば徒らに妙行を修せむ。此の位を知らずんば、

(二) 上流 自己は凡下に居るも佛地等を得ると謂ふ是は上聖なり。

(三) 華嚴三昧 華嚴の祖唐の杜順の撰せし華嚴五教止観なり。

(四) 圓明 圓明の法界縁起なり。(五) 若し云云 三乘より一乘に廻入する漸機にあらざるなり。(六) 如し云云 漸入の方便練根の相を説くなり。

(七) 色等の諸事云 色等の諸事を無礙を明す。

(一) 經に云く 佛經の意は理は癡楞證たるを證する文なり。(二) 實體の性云 色聲等の事の諸法は法界の性に歸するが故に實體の性無ければなりと云ふ。(三) 問ふ云云 此より下漸機の見入を決擇するなり。

(四) 一には云云 悉見をして斷盡せしむの意。(五) 六種 名と事と體と相と用と因となり。初の方便は且小乘の所説の三科の事法に同じて彼の惡見の迷事を責めて一乘の理法を界の亡言絶解の正法を顯すなり。

叨りに(一) 上流に濫し或は少を得て足んぬと爲む。此れに亦た二種あり。一には行布の位なり、初後の淺深五位の差別なり。二には圓融の位なり、一切を攝して一一の位滿に即ち成佛を説く。一位の中に具さに一切の諸位の功德を攝す、信に果海を該ね初發心の時に便ち正覺を成すと。上の二の相攝は行に例して説け。

又杜順和尚の(三) 華嚴三昧に云く。但し法界縁起は、惑へる者は階かたひ難し、若し先きに垢心を濯すすはずんば、以て其の正覺に登ること無し。故に大智論に云く、人の鼻下に糞有れば沈麝等の香を臭ぐとも亦た臭しと爲るが如し。故に維摩經に云く、生滅の心行を以て實相の法を説くことなかれと。故に須らく先づ計執を打つて然して後に方さに(三) 圓明に入るべし。(四) 若し直に色等の諸法の縁に従ふは、即ち是れ法界の縁起なりと見るに有るは、必ずしも更に前方便を須もとひざるなり。(五) 如し其れ直ちに此に入ることを得ざる者せば、宜しく始より終に至るまで、一一に徵問して、惑を斷じ、迷を盡し、法を除き、言を絶し、性を見、解を生じて、方めて爲れ意を得せしむることを致す可きのみ。問ふて云く、云何が色等の諸法を見て、即ち大縁起法界に入ることを得るや。答へて曰く、(七) 色等の諸事は本より眞實にして、詮を亡し即ち妄心及ばざるを以

てなり。故に(一) 經に云く、言説は施行と別なり、眞實は文字を離れたり。是の故に眼耳等の事を見て、即ち法界縁起の中に入るなり。何となれば皆な是れ(二) 實體の性無ければなり、即ち無體に由て幻相方さに成ず、縁より生ずるは自性の有に非らざるを以ての故に、即ち無性に由て幻有を成ずることを得るなり。是の故に性相渾融し全收して一際なり。所以に法を見て即ち大縁起法界の中に入るなり。(三) 問ふ、既に空有無二にして即ち融通に入ると言はば、如何んが復た眼耳等を見て即ち法界の中に入ると云ふや。答ふ、若し能く空有を見ることは是くの如くなる者は、妄見の心盡きて方に理に順じて法界に入ることを得、何を以ての故に、縁起法界を見を離れ情を亡して萬像を繁興することを得ての故なり。問ふ、既に是くの如くなることを知んぬ、何なる方便を以てか入ることを得せしむるや。答ふ、方便同じからずして略して三種あり。(四) 一には徵して見をして盡さしむ。如しからく事を指さば問ふて、何者か是れ眼なりやと云ふ、已前の小乗の中の(五) 六種に之を簡ふが如くにせよ。若し一切諸法但名門の中に入れて收むれば、一法として名に非ざるものあることなし。復た須く其の眼等は是れ名のみなりと知る所以を責む可し。是の如く展轉して其の所以を責めて、其れをして言を亡し解を

(二)二には云云
前の大乗始教の無
生門に寄せ一乘法
を誘起するなり
(三)顛倒 第六識
妄心

(三)法 法界緣起
にて談する色香等
の事法。

(四)三には云云
此は前の終頓二教
に寄同し、遮情表
縁起無碍自在の
法門を明す。

絶せしむ。(二)には法を示して思はしむ、此れに復た二門あり、一には(三)顛倒の心を
剝いて決し盡す。如く事を指せば、色香味觸等を以て、其の妄計を奪つて倒惑なるこ
とを知らしむ、有らゆる執取は法に順せず即ち是れ意識の無始の妄見熏習の所成にし
て、無始より急曳、生を三界に續けて輪環すること絶えず。若し能く此の執は即ち是
れ緣起なりと覺知すれば當處無生なり。(二)には(三)法を示して疑を断せしむ。若し先き
に妄心を識らずんば法を示すとも、反つて倒惑を成せん、若し法を示して見せしめずん
ば、迷心還つて空に著せん。所以に先づ妄心を剝いて後に乃ち法を示し見せしむべし。
(三)には法は言を離れ解を絶つことを顯す、此の門の中に就て亦た二と爲す。一には
遮情、二には表徳。遮情と言ふは。問ふ、緣起は是れ有なるや、答ふ、不なり、即空の故に
緣起の法は無性にして即ち空なればなり。問ふ、是れ無なりや、答ふ、不なり、即有の
故に、緣起の法は即ち無始より有を得るに由るを以ての故なり。問ふ、亦有亦無なりや、
答ふ、不なり、空有圓融し一にして二無きが故に、緣起の法は空有一際にして二相無き
が故なり、金と莊嚴の具との如く之を思へ。問ふ、非有非無なりや、答ふ、不なり、兩
存を礙へざるが故に、緣起の法は空有互に奪つて同時に成するを以てなり。問ふ、定

(二)問ふ
通じて前
便に同て
乘の自解
り教の所
て一乘の
信解を同
ぶ。

んで是れ無なりや、答ふ不なり。空有互融して兩ながら存せざるが故に、緣起の法は空
は有を奪ひ盡くして唯空にして有に非ず、有は空を奪ひ盡して唯だ有にして空に非ず、
相ひ奪ふこと同時にして兩ながら相ひ雙て混す。二に表徳とは。問ふ、緣起は是れ
有なりや、答ふ、是なり幻有は無にあらざるが故に。問ふ、是れ無なりや、答ふ、是なり無
性は即空の故に。問ふ、亦有亦無なりや、答ふ、是なり兩存を礙へざるが故に。問ふ、
非有非無なりや、答ふ、是なり互に奪て雙て混する故に、又緣起を以ての故に是れ有
なり、緣起を以ての故に是れ無なり、緣起を以ての故に是れ亦有亦無なり、緣起を以
ての故に是れ非有非無なり。乃至一と不^{フタツ}一と亦^{フタツ}一と非^{フタツ}一と非^{フタツ}一となり、
多と不多と亦多と亦不多と非多と非不多となり、是の如く是多と是一と亦是多と亦是
一と非非是多と非非是一と非非多と非非一となり。即と不即との四句は之れに準せよ。
是の如く遮表圓融無礙なることは、皆な緣起自在に由るが故なり。若し能く是くの如
くなる者は、方に緣起の法を見ること得、何を以ての故に、圓融一際にして法に稱つ
て見る故に。若し同時ならずして前後に見る者は、是れ顛倒の見にして正見に非らざ
るなり、何を以ての故に、前後の別見は法に稱はざる故に。(二)問ふ、是くの如く見る

(一)性起 彼此相
由すれども而も自
性なし無性を果さ
なるを名けて性起
さす。大小若しは
大乘の菩薩若しは
乗の聲緣にして小
本より以來性起を
具するが故に衆生
(二)此彼衆生界なり

(三)一が中云云
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱
以下引く二文が俱

こと已ぬ、云何なる方便をもて法界に入らむや。答ふ、入方便と言ふは、即ち縁起の法の上に於て消息して之を取れ。何んとなれば、即ち此の縁起の法は、即空にして無性なり、無性に由るが故に幻有方に成ず。然れども此の法は、即ち全く無性の性を以て其の法と爲るなり、この故に此の法は即ち無性にして而も相存することを礙へず。若し無性にあらずんば、性起成せざらん、自性不生にして皆な縁に従ふを以ての故なり。既に全く性を收め盡す、性は即ち無爲なれば分別すべからず。其の(三)大小に随つて性は圓かならずと云ふことなし。一切も亦た即ち性を全ふして身を爲す。是の故に彼を全ふして此れと爲し性に即して幻相を礙へざるなり。所以に一に衆多を具し既に彼此全體相ひ收むるに彼此の差別を礙へざるなり。是の故に(四)彼が中に(五)此れ有り、此が中に彼れ有り。故に經に云く、法は法性に同して諸法に入るが故にと。解して云く、法とは即ち縁起幻有の法を擧ぐるなり。同性とは縁起即空にして此の相を礙へざるが故に、全く彼を收めて此と爲す、彼れ即空にして彼の相を礙へざるを以ての故に。既に此彼全收するに相皆な壞せず、是の故に此が中に彼れ有り、彼が中に此れ有り、但だ彼此相收するのみに非ず、一切もまた復た是くの如し。經に曰く(六)一が中に無量を解し無量

(一)即入 即入は
相即相入なり。二
法。緣成 法智の
二法は相對俱成の
故に。普眼 平等の
法門なり。法界を見
るが故に、即ち理
量の二智を以て體
さなすなり。

(五)帝網 帝釋所
住の大衛殿の上
張る所の羅網は百
千萬の雜色寶珠
を以て之を貫結す
るなり。(六)既に
西南の邊に向つて
一切の珠に復た
珠影を現す。

の中に一を解す、轉轉して生じ、實に非らざるをもて智者は畏るる所無しと。また云く一法の中に於て衆多の法を解し、衆多の法の中に一法を解了すと。是くの如く相ひ收めて彼此(一)即入し、同時に顯現して前無く後無し、一に随つて圓融して即ち彼此を全ふす。問ふ、(二)法既に是くの如し智は復た如何ん。答ふ、智は法に順ふて一際(三)緣成なり、冥に契ふて差無し、頓に現するとも先後無きにあらず。故に經に云く、普眼の境界は清淨の身なり、我れ今演説す人諦かに聽けと。解して云く、(四)普眼とは即ち是れ法と智と相應して頓に多法を現す、即ち法の唯だ普眼の所知にして、餘智の境界に非ずと簡ふことを明す。境界とは即ち多法互入して、猶し帝網天珠の重重無盡なるが如くの境界を明すなり。清淨身とは、即ち前の諸法同時に即入して、終始(五)原難縁起集成して見心寄る所なきことを明す。然るに帝釋天の珠網とは、即ち因陀羅網と號するなり、然るに此の(六)帝網は皆な寶を以て成ず、寶の明徹するを以て遞ひに相影現して涉入重重にして、一珠の中に於て同時に頓に現す、一に随つて即ち爾なり竟に去來なし。今且く西南の邊に向つて一顆の珠を取て之を驗めん、即ち此の一珠には能く頓に一切珠の影を現す、此の珠(七)既に爾なり餘の一も亦た然かなり、既に一一の珠に一時

(二) 妨げず。上は此の珠が餘相を混ぜざるなり。下は餘色一相を妨げざるなり。
(三) 若し一珠一多相互に滲入するに前後もなく同一時なることを明す。
(四) 一珠。此の一珠を離れて一切珠の中に入らずこの意。

に頼に一切珠を現す、既に爾なり餘の一も亦た然り、是くの如きは重重にして邊際有ることなし。即ち此の重重無邊際の珠の影、皆な一珠の中に在つて炳然として齊く現す、餘も皆な此れを(二)妨げず。(三)若し一珠の中に於て坐する時は、即ち十方重重の一切の珠に坐著するなり。何を以ての故に、一珠の中に一切珠あるが故に、一切珠の中に一珠ある時は即ち一切珠に坐著するなり。一切も此れに返じて準じて以て之を思へ。既に一珠の中に於て一切珠に入るとも、竟に此の一珠を出でず。一切珠に於て一珠に入るとも、竟に此の(三)一珠を出でざるなり。問ふ、既に一珠の中に於て一切珠に入るに、竟に此の一珠を出でずと言はば、云何んぞ一切珠に入ることを得んや。答ふ、只だ此の珠を出でざるに由るなり、是の故に一切の珠に入ることを得るなり、若し此の一粒を出でて一切珠に入れと云はば、即ち一切珠に入ることを得ざるなり。何を以ての故に、此の珠の内を離れて別の珠無きが故に。問ふ、若し此の珠の内を離れて一切珠無くんば、此の網は即ち但だ一粒の所成ならむ、如何んぞ多珠を結んで成すと言んや。答ふ、只だ唯獨一の珠に由て、方始て多を結んで網と爲す、何を以ての故に、此の一珠も獨り網を成するに由るが故に、若し此の珠を去れば、全く網無きが故に。

(二) 一珠。西南邊の一珠なり。

(三) 一を以て、且く西南邊の一珠に就てなり。
(四) 成する。此の所有の道理を成するの意。

問ふ、若し唯獨一の珠ならば、云何して結んで網を成すと言はんや。答ふ、多珠を結んで網を成することは即ち唯獨一の珠なり、何を以ての故に、一は是れ總相なり、多を具して成するが故に、若し一無くんば一切も無きが故に、是の故に此の網は一珠を以て成するなり。一切一に入ることも準じて思ふて知んぬ可し。問ふ、西南の邊の一珠に、總じて十方一切珠を收め盡して餘無なしと雖も方さに各各に珠有り、云何んぞ網は唯一珠をもて成すと言ふや。答ふ、十方の一切珠は、總じて是れ西南方の一類の珠なり。何を以ての故に西南邊の一珠は即ち十方一切の珠なるが故に。若し西南の邊の一珠は即ち是れ十方一切の珠なりと信せずんば、但だ墨點を以て西南邊の一珠に點し著くる時に、即ち十方珠の中に皆な墨點あり、既に十方の一切珠の上に皆な墨點あり、故に知んぬ十方の一切珠は即ち是れ(二)一珠なることを。十方の一切珠は是れ西南の邊の一珠にあらずと言はば、豈に是の人一時に遍く十方の一切珠を點すべけんや、縱令、遍く十方の一切珠を點すといはば即ち是れ一珠なり、此の一を始と爲ることは既に爾なり、餘を初めと爲ることも亦た然なり、重重無際にして點點皆な同じ、杳杳として原ね難し、(三)一を以て(四)成すること成く畢んぬ。斯の如くの妙喻を法に類して之を思へ。

法は然云云
法は即ち然らず
一分相似に據る故
に此云ふは、法は
但た影のみ周し、
は即ち然らず。

盧舍那佛の過去行は
佛刹海をして皆な清淨ならしむ
無量無數にして邊際無し
彼の一切處に自在に遍す
如來の法身は不思議なり
無色無相にして倫匹無し
色相を示現することは衆生の爲めなり
十方に化を受るに現せずと云ふことなし
一切佛刹微塵の中に
盧舍那自在力を現す
弘誓の佛海に音聲を震ふて
一切衆生の類を調伏す
次に秘密趣とは、自上所説の極無自性住心は、是れ普賢菩薩所證の三摩地門なり、亦た是れ大毗盧舍那如來の菩提心の一門なり。故に善無畏三藏の説かく、東南方の普賢菩薩とは何ぞや、普賢とは是れ菩提心なり、若し此の妙因無くんば終に無上の大果に至ること能はじ。故に經に云く、時に普賢菩薩、佛境界莊嚴三昧に住して自心の眞言

秘密趣、自下
極無自性心を秘密
眼を以て觀するな

法は然るの如くにあらずとも喩は非喩に同じ、一分相似するが故に以て言を爲す。何となれば此の珠には但だ影のみ相ひ渉入することを得て其の質は各の珠なり、法は然るの如きにはあらず、全體交徹す。故に經に云く、非喩を以て喩と爲す等といへり。諸有る行者喩に準じて之を思へ。

盧舍那佛の過去行は 佛刹海をして皆な清淨ならしむ

無量無數にして邊際無し 彼の一切處に自在に遍す

如來の法身は不思議なり 無色無相にして倫匹無し

色相を示現することは衆生の爲めなり 十方に化を受るに現せずと云ふことなし

一切佛刹微塵の中に 盧舍那自在力を現す

弘誓の佛海に音聲を震ふて 一切衆生の類を調伏す

次に秘密趣とは、自上所説の極無自性住心は、是れ普賢菩薩所證の三摩地門なり、亦た是れ大毗盧舍那如來の菩提心の一門なり。故に善無畏三藏の説かく、東南方の普賢菩薩とは何ぞや、普賢とは是れ菩提心なり、若し此の妙因無くんば終に無上の大果に至ること能はじ。故に經に云く、時に普賢菩薩、佛境界莊嚴三昧に住して自心の眞言

を説き給ふ。

三曼多怛囉多、微羅闍達摩爾闍多、摩訶摩訶。

顯句義に云く初の句は普なり、次は去なり往なり、微羅闍といは離塵垢なり、謂く一切の障を除く、達摩爾闍多といは法生なり、謂く法界の體性より生ず、摩訶摩訶といは上の摩(梵字)字は是れ第五の字なり、一切處に遍す即ち是れ大空なり、空中の大なれば名けて大空と爲す、故に重ねて之を言ふ、更に等比と爲ることを得べき者なきが故に名けて大と爲す、重空の中に更に無比なり。意の言く、等とは即ち是れ諸法畢竟平等なり、進とは是れ逝の義なり、謂く佛は善逝にして正覺を成ず、然るに此の平等の法界は無行無到なり、云何んが來去有らむや。次に即ち釋して云く、能く垢を離れ一切障を除くを以て即ち是れ勝進の義なり、無行にして而も進むを最も善逝と爲く。是くの如く進行して、能く法生を成ずるは即ち是れ平等の法性より佛家に生るるに以るが故なり。次に大が中の大と言ふは即ち等等無礙にして證の中の大空なり、大空とは佛の境界なり。秘密に云く初の訶字を以て體と爲す、喜なり因なり、所謂る菩薩の行を修行するなり。若し衆生有つて、此の法門に従つて受持し讀誦し或は觀照せば、即ち普

意の言く、自
下義意を述ぶ。

秘密 字義を
示す。詞 是れ原本
梵字、已下にも出
づ知るべし。

賢の門に同ふして久しからずして能く佛境界莊嚴三昧自在の力を得む。喜とは隨喜なり、他の善を見て猶し己が如くにす、平等觀に住して嫉妬を離るゝが故に。因とは因縁なり、菩提心を因と爲し大悲萬行を縁と爲して三密方便を修行し、娑羅樹王の萬德華果を成就す。此の詞(梵字)字に十二轉の聲字有り、即ち是れ十二地なり、中の七字を除いて菩提の因行證入方便なり、中間は則ち大悲の句に攝す、是の五字は則ち五佛五智なり、則ち普賢一門の五佛なり、是の五佛に各各に十佛刹微塵數の四種曼荼羅を具す、この四種曼荼羅に各各に不可說不可說の眷屬曼荼羅を具す。詞(梵字)の一字をいふ如く自餘の字等もまた復た是くの如し。又喜とは歡喜と喜悅と喜樂との義なり。所謂る大安樂適悅の義なり。金剛頂經に大安樂金剛薩埵と名くるが故に。經に云く、時に薄伽梵一切如來大乘現證三昧耶一切曼荼羅の持金剛勝薩埵、三界の中に於て調伏して餘無し、一切義成就金剛手菩薩摩訶薩、重ねて此の義を顯明せんと欲するが爲の故に、無怡微咲して左の手に金剛慢印を作し、右の手に本初の大金剛を抽擲して勇進の勢を作し、大樂金剛不空三昧耶の心眞言を説いてと曰ふ。釋經に云く、此の字は因の義なり、因の義とは謂く菩提心を因と爲す、即ち一切如來の菩提心なり、亦た是れ一切

(二)此の下の詞、阿は原本梵字。

如來の不共眞如の妙體と恒沙の功德とは皆な此の字より生ず、此の一字に四字の義を具す、且(一)詞字を以て本體と爲す、詞字は阿字より生ず、阿字は一切法本不生に由るが故に、一切法因不可得なり、其の字の中に汗の聲あり、汗の聲とは一切法損減不可得なり、其の字の頭らの上に圓點半月あり、即ち麼字と爲す。麼字とは一切法我不可得の義なり。我に二種あり、所謂る人我と法我となり、此の二種は皆な是れ妄情の所執なり、名づけて増益の邊と爲す、若し損減増益を離るれば即ち中道に契ふ云云。今この説に依らば、一切如來の不共眞如の妙體と恒沙の功德と皆な此のまより出生す。諸の顯教は皆な眞如を以て諸法の體性と爲す、佛華法華等も亦た此の眞如を以つて至極の理と爲す。今此の眞言法教は字を以て一切眞如等の所依と爲す。眞如は則ち所生の法なり、眞言は則ち能生の法なり。眞如の法體すら猶し此れより生ず、何に況んや能證の人をや、能證の佛も既に亦た此くの如し、何に況んや所説の法教をや。能證所證平等無二なりと云ふと雖も、然も猶(二)二門の眞如に於て究竟の説を作す。亦た三種世間互相に圓融して、無盡無盡の義を説くと雖も、迹を此の域に逗め影を此の牀に休む、無盡の教義は一つの聲より出づ、三種の圓融は二門の境に優遊す、誰か眞如に

(三)二門 生滅眞如の二門なり。

更に所依あることを信せむ。

佛菩薩共に此の説あり。(一)經に云く、善男子無上法王に大陀羅尼門有り、名づけて圓覺と爲す、一切清淨の眞如を流出すと。一切清淨と言ふは眞如に無量淺深差別あり、故に一切と云ふ、一切の言其の意甚深なり。(二)論に云く、摩訶衍とは總なり、説に二種あり、云何んが二と爲す、一には法、二には義なり、言ふ所の法とは謂く衆生の心なり、是の心は則ち一切世間の法、出世間の法を攝す、此の心に依つて摩訶衍の義を顯示す。何を以つての故に、是の心眞如の相は即ち摩訶衍の體を示すが故に、是の心生滅因縁の相は能く摩訶衍の自體相用を示すが故に。言ふ所の義とは即ち三種あり、云何んが三と爲す、一には體大、謂く一切法眞如平等にして増減せざるが故に、二には相大、謂く如來藏に無量性功徳を具するが故に、三には用大、謂く能く一切世間出世間善因果を生ずるが故に。謂く世間とは心生滅門なり、出世間とは心眞如門なり、三種世間を過ぐるが故に出世間と名く。又云く心生滅門の正智、所證の性、眞如の理は、何の門の所攝ぞ、生滅門の所攝なり、眞如門には非ず分界別の故に。二門の眞如に復た何の別か有る、眞如門の理は理自ら理なるが故に、生滅門の理は智自ら理なるが故に、此の生滅

(一)經に云く大方廣圓覺修多羅了義經。

(二)論 大乘起信論。

に就いて更に四重の眞如本覺あり、具さには論に説くが如し。

佛華所説の三種世間圓融の佛は、則ち四種の鏡の中の第二に當るなり。四種鏡と言ふは一には如實空鏡、二には因熏習鏡、三には法出離境、四には緣熏習鏡なり、第一の鏡とは一切の心と境界の相とを遠離す、法として現す可きもの無きが故に。性淨本覺の體性の中には一切の攀緣慮知の諸の戲論識を遠離して、一味平等の義を成するが故に名づけて如と爲す。一切の虛妄境界の種種の相分を遠離して、決定眞實の相を成就するが故に名づけて實と爲す。遠離の義を顯示せんと欲ふが故に名づけて空と爲す、鏡は謂く喩の名なり。此の中の鏡は即ち摩奢^{マサ}跋^{バツ}珠鏡なり。此の鏡を取つて一處に安置して、珠鏡の前の中に種種の石、種種の物を蘊める時に、彼の珠鏡の中に餘像は現せずして、唯し同類の珠のみ分明顯了なる故に、如實空鏡もまた復是くの如し。此の鏡の中に於て、唯し同じく自類清淨功徳のみ安立し集成して、種種の異類の諸の過患の法は皆な遠離するが故に此れは眞如門の法を表す。二に因熏習鏡とは性淨本覺は三世間の中に、皆な悉く離れず、彼の三を熏習して一覺と爲して一大法身の果を莊嚴す、是の故に名づけて因熏習鏡と爲す。三種世間とは、一には衆生世間、二には器世間、

二經に云く 守護國界經。

三には智正覺世間なり。衆生世間とは衆生は謂く異生性界なり、器世間とは謂く所依止の土なり、智正覺世間とは謂く佛菩薩等是れなり。此の中の鏡とは謂く輪多黎華鏡なり。輪多黎華を取つて一處に安置して周く諸物を集むるに、此の華熏に由て一切の諸物皆な悉く明淨なり。また明淨の物の華の中に現前して皆な悉く餘無し、一切諸物の中に彼の華現前することも、また復た餘無きが如し、因熏習鏡もまた復た是くの如し。一切の法を熏して清淨覺と爲して悉く平等ならしむ、此れは三自門の法を表す。次ぎの二種の鏡は染淨本覺と及び應化身とを表す、此の住心に於て無用なり故に出さず。又二經に云く、佛、秘密主に告げて言く、一の陀羅尼あり名けて守護國界主と曰ふ。是の眞言とは毗盧舍那佛色究竟天にして、天帝釋及び諸の天衆の爲めに已に廣く宣説し給ふ。我れ今此の菩提樹下金剛道場に於て、諸の國王及び汝等が爲めに略して説かん。汝當さに諦あきらに聽くべし、善男子、陀羅尼の母は所謂る唵うん（梵字）字なり所以何んとなれば三字和合して一字をなすが故に、謂く三初さんしつの字とは是れ菩提心の義なり、是れ諸の法門の義なり、亦た無二の義なり、亦た諸法果の義なり、亦た是れ性の義なり、自在の義なり、猶し國王の黑白善惡、心に隨つて自在なるが如し、又法身の義なり。第二の字

三初さんしつの字 阿字なり。

は即ち報身の義なり、第三の字は是れ化身の義なり。以て三字を合し共じて唵うん（梵字）字と爲す、義を攝すること無邊なるが故に一切陀羅尼の首と爲す、即ち是れ毗盧舍那佛の眞身なり。我れ無量無數劫の中に於て、能く十波羅蜜を習ふて最後身に至つて六年苦行せしかども、阿耨多羅三藐三菩提を得て毗盧舍那と成らざりき、道場に坐せし時、諸佛猶し油麻の如く虚空に遍滿せり、諸佛同聲にして我れに告げて言く、善男子、云何んが成等正覺を求むる。我れ佛に言いして白まく、我れは是れ凡夫なり未だ求むる處を知らず、唯願くは慈悲を以て我が爲めに解説し給へと。是の時に佛同じく我れに告げて言く、善男子、諦あきらに聽け、當さに汝が爲めに説くべし、汝今宜しく當に鼻端に於て淨月輪を想ふて、月輪の中に於て唵字の觀を作すべし、是の觀を作し已つて、後夜分に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。善男子、十方世界の恒河沙の如くなる三世の諸佛、月輪に於て唵字の觀を作さずして成佛すること得と云はば、此の處ところり有ること無し。今此等の文に依るに唵うん（梵字）字は是れ法身なり、法身は即ち眞如なり、眞如法身悉く皆な唵字の一聲より出づ、何に況んや諸餘の法門をや。當に知るべし眞言は一切の法の母たり一切の法の歸趣なり。又論に云く、諸佛甚深廣大義とは、即ち是

れ通じて前の所説の門を總攝す。所謂る通じて三十三種の本數の法を攝するが故に、此の義云何ん。諸佛と言ふは即ち是れ不二摩訶衍の法なり。所以何となれば、此の不二の法を彼の佛に形つくるに、其の徳勝れたるが故に。彼の佛とは眞如生滅の二門の佛と及び三大義の佛とを指す。大本華嚴契經の中には是の如くの説を作す、其の圓圓海徳の諸佛は勝れたり、其の一切の佛は圓圓海を成就すること能はず、劣なるが故に。一切佛と言つば即ち本末二門の佛なり。若し爾らば何が故に分流華嚴契經の中に是の如くの説を作す、盧舍那佛は三種世間を其の身心と爲し、三種世間に法を攝するに餘無し、彼の佛の身心もまた復攝せざる所有ること無きか。答ふ、盧舍那佛に三世間を攝すと雖も、攝と不攝との故に過^{トガ}無し、攝不攝と言ふは即ち上の所説の性海と因海との攝不攝是れなり。また眞如生滅の二門も是くの如し、故に文に云く、是の二種の門に皆な各の總て一切の法を攝すとは、即ち是れ法門該攝圓滿門なり、謂く眞如門を以て一切の法を攝するに、一一の法として眞如に非らざることなし。生滅門を以て一切の法を攝するに、一一の法として生滅に非らざること無きが故に。然れども眞如門には、生滅門の一切の法を攝すること能はず、また生滅門には、眞如門の一切の諸法を攝すること能はず。而

も總攝一切法と言ふは總じて生滅の一切の法を攝するが故に。總じて眞如の一切法を攝するが故に。所以何となれば是くの如くの二門は皆な悉く平等にして各各別なるが故に。また云く、何が故に不二摩訶衍の法は因縁無きや。是の法は極妙甚深にして獨尊なり、機根を離れたるが故に。何が故にか機を離れたる、機根無きが故に。何ぞ建立を須ふる建立に非らざる故に。是の摩訶衍の法は諸佛の所得なりや、能く諸佛を得ず。諸佛は得するや、不なるが故に。菩薩二乗一切異生もまた復た是くの如し、性徳圓滿海是れなり。所以何となれば、機根を離れたるが故に、教説を離るるが故に、初に諸佛と云ふは是れ眞如門の諸佛を指す。次の諸佛は亦た眞如門の佛なり、能得とは言く不二門の諸佛なり、其の徳勝れたるが故に能く眞如門の諸佛を攝得す。次に諸佛とは生滅門の佛を指す。意の言く生滅門の諸佛は不二門の諸佛を攝得するや、不故とは是れ答の辭なり。生滅門の諸佛は眞如と不二との佛を攝することを得ざることを言ふ。又云く、八種の本法は因縁より起る、機に應ずるが故に、説に順ずるが故に。何が故にか機に應ずる、機根有るが故に。是くの如くの八種の法の諸佛は得せらるるや、諸佛は得せらる。諸佛を得ずや、不なるが故に。是の如きは修行種因海是れなり、所以何となれば

機根あるが故に、教説あるが故にと。初に諸佛と言ふは種因海の本法の八佛を指す、次に諸佛と言ふは末法の八佛是れなり、言く本の八佛は末の八佛を攝することを得。次に諸佛とは不二性徳の佛を指す、言く本末の八佛は圓圓海の佛を攝することを得ず、是くの如くの諸佛は皆な悉く平等平等にして虚空法界に遍満すと云ふと雖も、然れども猶は本末各各差別なり、末佛は本を以て所依の境と爲す、勝劣差あり。是の故に劣を以て勝を攝することを得ざるなり。人既に是くの如し法も亦た是くの如し、華嚴所説の三種世間の佛は是れ則ち種因海の佛なり、故に性徳海の佛を攝することを得ざるなり。經論の明證是くの如し、末學の凡夫強いて胸臆に任せて難思の境界を判攝す可らず、高きに居て低きを攝すれば功徳無量なり、劣を執して勝を潜すは定て深底に入る。信せずんばある可らず、慎ますんばある可らず。是くの如く諸佛及び所説所證の教理境界は悉く一字に攝し盡す、有智の薩埵極めて善く思念せよのみ。

國譯秘密曼茶羅十住心論卷第九 終

國譯秘密曼茶羅十住心論

卷 第十

秘密莊嚴住心第十

秘密莊嚴住心とは、即ち是れ究竟して、自心の源底を覺知し、實の如く(一)自身の數量を證悟す。(二)所謂る胎藏海會の曼茶羅と、金剛界會の曼茶羅と、金剛頂十八會の曼茶羅とは是れなり。是の如くの曼茶羅に、各各に四種曼茶羅四智印等有り。四種と言ふは、摩訶と、三昧耶と、達磨と、羯磨と是れなり。是の如くの四種曼茶羅其の數無量なり、刹塵も喩に非ず、海滴も何ぞ比せむ。(三)經に云何んが菩提謂く實の如く自心を知ると云ふは、此れ是の一句に無量の義を含めり、豎には十重の淺深を顯し、横には塵數の廣多を示す。(四)また心續生の相は諸佛の大秘密なり我れ今悉く開示すと云ふは即ち是れ豎の説なり、謂く初め羝羊の開心より、漸次に闇を背き明に向ふ求上の次第なり。是の如き次第に略して十種あり、上に已に説くが如し。(五)また云く、復た次に三藐三菩提の句を志求するものは、心の無量を知るを以ての故に身の無量を知る、身の

(一)秘密莊嚴身
口地三密等
十地見聞能
はざる故に
三秘の體端
の故に莊嚴
三の自身、自
三毒の妄心、
まは無邊際、
自己の肉身は
如來の意。即
に約して密
部に初めに
會曼茶羅に
住心品に大
(二)また心續生
を以て十住
の次第をなす
心品九句中
句なり。中第
(三)また云く大
日經第六百字
住心に約して
義を明す。

二、衆生の自心
三、衆生の自心
四、衆生の自心
五、衆生の自心
六、衆生の自心
七、衆生の自心
八、衆生の自心
九、衆生の自心
十、衆生の自心
十一、衆生の自心
十二、衆生の自心
十三、衆生の自心
十四、衆生の自心
十五、衆生の自心
十六、衆生の自心
十七、衆生の自心
十八、衆生の自心
十九、衆生の自心
二十、衆生の自心

無量を知る故に智の無量を知る、智の無量を知るが故に即ち衆生の無量を知る、衆生の無量を知るが故に即ち虚空の無量を知ると。此れは即ち横の義なり、(一)衆生の自心其の數無量なり、衆生狂醉して、覺せず、知せざるなり、(二)大聖彼の機根に隨つて、其の數を開示したまふ。唯蘊、拔業の二乗は但し(三)六識を知り、他縁、覺心の兩教は但し八心を示し、一道、極無は但し九識を知る。(四)釋大衍には十識を説き、(五)大日經には無量の心識、無量の身等を説く。是の如くの身心の究竟を知るは、即ち是れ(六)秘密莊嚴の住處を證す。故に經に云く、若し大覺世尊大智灌頂地に入んぬれば、自見に(七)三昧耶の(八)句に住す。三三昧耶と謂ふは、一には佛部三昧耶、二には蓮華部三昧耶、三には金剛部三昧耶なり。是の如くの三部の諸尊其の數無量なり、一一の諸尊に各の四種曼荼羅を具す。佛部は即ち身密、法部は即ち語密、金剛部は即ち心密なり。(九)眞言と謂ふは且らく語密に就て名を得、若し具さには梵語に據つて曼荼羅と名く、龍猛菩薩は秘密語と名く。且らく語密の眞言法教に就て、(一〇)法曼荼羅心を顯示せば、(一一)經に云く、云何なるか眞言法教、謂く(一二)阿字門は一切諸法不生の故に、迦字門は一切諸法作業不可得の故に、佉字門は一切諸法等虚空不可得の故に、伽字門は一切

眞言の法
一、眞言の法
二、眞言の法
三、眞言の法
四、眞言の法
五、眞言の法
六、眞言の法
七、眞言の法
八、眞言の法
九、眞言の法
十、眞言の法
十一、眞言の法
十二、眞言の法
十三、眞言の法
十四、眞言の法
十五、眞言の法
十六、眞言の法
十七、眞言の法
十八、眞言の法
十九、眞言の法
二十、眞言の法

諸法一切行不可得の故に、伽字門は一切諸法一合相不可得の故に、者字門は一切諸法離一切遷變の故に、車字門は一切諸法影像不可得の故に、社字門は一切諸法、生不可得の故に、社字門は一切諸法戰敵不可得の故に、吒字門は慢不可得の故に、他字門は長養不可得の故に、茶字門は怨對不可得の故に、茶字門は執持不可得の故に、多字門は如如解脫不可得の故に、他字門は住處不可得の故に、陀字門は施不可得の故に、陀字門は法界不可得の故に、波字門は第一義諦不可得の故に、頗字門は不堅如聚沫の故に、婆字門は縛不可得の故に、婆字門は一切有不可得の故に、也字門は乘不可得の故に、囉字門は塵垢不可得の故に、囉字門は一切相不可得の故に、轉字門は言語道斷の故に、奢字門は本性寂の故に、沙字門は性鈍不可得の故に、娑字門は一切諦不可得の故に、訶字門は一切諸法因不可得の故に、哦囉拏曩莽は一切處に遍して一切の三昧に於て自在に速に能く一切の事を成辨し、所爲の義利皆な悉く成就す。(一三)是の如くの諸の字門は各各に十二轉聲の字を具す。且く初の(一四)迦字に就て十二轉なり、迦迦祈鷄句句計蓋句皓欠迦なり、此の十二字は即ち一一の尊の十二地なり。中間の(一五)八字を除て、初後の四字は即ち求上門の(一六)因行證入なり、更に訶字有り、即ち是れ方便具足の義なり。一一の字門の五字は即ち

(一) 身語意云云
四法身の中自性身
の説を明す。
(二) 時に彼の云云
四法身の中受用身
の説。

(三) 毗盧遮那佛云
云々法身の中變
化身の説。

(四) 又執金剛云云
四法身の中流身
の説。
(五) 所謂る以下
所化の得益を明す

(六) 將に云云已
下受用身の瑞相と
動するに約す。

如く、當に知るべし諸菩薩も法門相對するに、亦た十佛刹微塵の衆有ることを。加持を以ての故に、各の法界の一門より現じて、一善知識の身と爲ることを得。此の四菩薩は則ち是れ佛身の四德なり、偏闕する所あれば、則ち無上菩提を成ずること能はず、是の故に列ねて上首と爲して以て塵沙の衆德を統ぶ、具さに名義を釋すること疏の如し。次に經に云く、所謂る三時を越えたる如來の日、加持の故に、身語意平等句の法門なり。(一)時に彼の菩薩には普賢を上首と爲し、諸執金剛には秘密主を上首と爲し、毗盧遮那如來加持の故に、身無盡莊嚴藏を奮迅示現し、是の如くの語意平等無盡莊嚴藏を奮迅示現したまふ。(二)毗盧遮那佛の身或は語或は意より生ずるに非ず、一切處に起滅邊際不可得なり、而も毗盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切處、一切時に有情界に於て眞言道句の法を宣説したまふ。(三)又執金剛、普賢、蓮華手菩薩等の像貌を現じて、普く十方に於て眞言道清淨句の法を宣説したまふ。(四)所謂る初發心より乃し十地に至るまで、次第に此の生に満足す、緣業生の増長せる有情類の業壽の種を除いて、復た牙種生起すること有り。釋して云く、(五)將に此の平等の法門を説かんとする故に、先づ自在加持を以て大衆を感動して、悉く普門の境界秘密莊嚴不可

(一) 普賢秘密主
以下實行の當機を
化するに約して横
類無用實類の所用
を明す。

(二) 一平等一平
等の身語意は能
現の六大體性なり
所現の身語意は四
曼三密なり。

(三) 具には金剛峰
樓閣一切瑜伽祇
經と云ふ不空の
譯。經文中最深秘
に於て顯密二教
論即身成佛等之
引文すれども之を
談せざるものさな
す、今且く二教論
に於て頭注せり。

思議未曾有の事を現じたまふ。(一)普賢秘密主等の上首の諸の仁者は、則ち是れ毗盧遮那の差別智身なり、是の如くの境界に於て久しく已に通達せり。然も此の諸の解脱門所現の諸の善知識、各の無量の當機衆を引て同じく法界曼荼羅に入る、此の初入法門の實行の諸の菩薩を饒益せむが爲めの故に、如來加持して大神通力を奮迅示現するなり。師子王の將に震吼せむと欲するとき、必ず先づ其の身を奮迅し、材力を呈現して然して後に聲を發するが如く、如來も亦た爾かなり、將に必定師子吼して一切智門を宣説せむと欲ふが故に、先づ無盡莊嚴藏を奮迅示現す。所謂る莊嚴とは、謂く(一)一平等の身より普く一切の威儀を現す、是の如くの威儀は密印に非ざること無し、一平等の語より普く一切の音聲を現す、是の如くの音聲は眞言に非ざること無し、一平等の心より普く一切の本尊を現す、是の如くの如の本尊三昧に非ざること無し、然れども此の一の三業差別の相は皆な邊際無し度量すべからず、故に無盡莊嚴と名づくるなり。又(二)金剛頂經に云く、一時、薄伽梵金剛界遍照如來 此れは總句を以て 諸尊の德を歎す、五智所成の四種法身 謂く五一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智、五には法界體性智なり、即ち是れ五方の佛なり、次ぎの如く東南西北中に配して之を知れ、四種法身とは一には自性身、二には受用身、三には變化身、四には等流身なり、此の四種身に豎横の二義を具す、横を以て本有の金剛界 此れは性徳の法界 體性智を明すなり、是則ち自利、豎は則ち利他なり、深義更に問へ、

耶此れは則ち妙平等性 自覺本初 大菩提心普賢滿月大圓鏡 不壞金剛光明心殿中に於て不壞
 觀察智なり。金剛とは總じて諸尊の常住の身を歎す、光明心とは心の覺徳を歎す、殿とは身心互に能住所住と爲ることを明す、
 中とは語密なり、亦た難邊の義なり、此れ是の三密は彼の五邊百非を離れて獨り非中の中に住す、等覺十地も見
 聞すること能はず、所謂る法身自證の境界なり、亦た是れ成所作智なり、三密の業は皆なこれよ、自性所成の
 眷屬、金剛手等の十六大菩薩と、及び四攝行の天女使と、金剛内外の八供養の金剛天
 女使と、各各に本誓加持を以て自ら金剛月輪に住し、本三摩地の標幟を持す、皆な以て
 微細の法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛なり。此れは三十七根本自性法
身の内眷屬の智を明す。 各の五
 智の光明峰杵より五億俱胝微細の金剛を出現して虚空法界に遍滿す、諸地の菩薩能く
 見ること有ること無し、俱に熾然の光明自在の威力を覺知せず。此れは三十七尊の根本の五
智に各の恒沙の性徳を具す
ること明す、若し次第に約せば出現の文あり、若し
本有に據らば俱時に是の如くの諸徳を圓滿するなり。 常に三世に於て不壞の化身を以て有情を利
 樂して、時として暫くも息むことなし。謂く三世とは三密なり、不壞といは金剛を表す化は業用
なり、言るは常に金剛三密の業用を以て、三世に亘つて自
他の有情をして妙 金剛自性阿闍佛 光明遍照寶光佛 清淨不染清淨法界 種種の業用羯磨智 方便加
 持方便受用 身を以て有情を救度す、大慈悲 金剛乘說法の 徳を演べたまふ、唯一の金剛圓滿理
 能く煩惱を斷ず、利智の徳なり、已上の九句は則ち是れ五印四徳なり、一一の佛印
に各の四徳を具す、自受用の故に常恒に金剛一乘を演説したまふ。 此の甚深秘密心地
 普賢自性常住の法身を以て諸の菩薩を攝す、此れは自性法身に自眷屬を攝すること明す、唯だ
又通じて他を攝す、自を擧げて他を兼ね。 唯だ

(一) 已に云云
 來は住心の立名に
 就き粗部の説に
 を明したる已下は
 卷末に至る迄此の
 宗の要義を決擇せ
 り、第一密教は法
 爾法然の法門たる
 (二) 大日經 大日
 經第二の具緣品な

此の佛利は盡く以て金剛自性清淨に成せられ密嚴華に嚴られたり。謂く密とは金剛の三密
なり、嚴とは種種の徳を具せり、言るは恒沙の佛徳摩數の三密を以て身土を莊嚴す、是れを曼荼羅と名
なり、又金剛は智を表し清淨は理を表し、自性は二つに通ず、言るは彼の諸尊各の自然の理智を具す、諸の大
悲の行願を以て有情に圓滿せしむる福智の資糧の成就する所なり。 謂く上に稱する所の恒
 沙の諸尊各の普賢行願
 の方便を具、五智の光りを以て照らし常に三世に住して暫くも息むこと有ること無し平等
 智身なり。五智と言ふは五大所成の智なり、一一の大に各の智印を具す、三世とは三密三身なり、無有暫息
り、身とは心の體なり、平等とは普遍なり、言るは五大所成の三密の智印其の數無量なり、身及び心智三種世間
に遍滿し遍滿して勤めて佛事を作し刹那も休まず、是くの如くの文句一一の文、一一の句皆な是れ如來の密號な
り、二乘凡夫は但し句義を解して字義を解すること能はず、但し字相を解して字の密號を知ることを得ず、之を
覽む智人顯句義を以て秘意を傷ふこと勿れ、若し薩埵の釋經を見れば此の義知んぬ可し、怪むも莫れ、怪むも莫れ。
 (一) 已に秘密莊嚴住心の所在の處、及び身語心密の數量等とを知りぬ、今傳ふる所の眞
 言教法は誰が作ぞや。答ふ(二) 大日經に據つて云はば、諸佛と菩薩と聲聞と緣覺と摩醯
 と梵王と那羅延天と釋提と四王と、是の如くの人等は作すこと能はざる所なり。何を
 以てか知ることを得るとならば、大日世尊分明に説きたまふが故に。云何んが説きた
 まふぞや、佛、秘密主に告げたまはく、この眞言の相は一切諸佛の所作にも非ず、他
 をして作さしむるにもあらず、亦た隨喜し給はず。何を以ての故に、是の諸法は法是
 くの如くなるを以ての故に、若しは諸の如來出現し、若しは諸の如來出でたまはざれ

自下は解して云く、
の相を述べて引
の經を解す。所
の相を述べて引
の經を解す。所
の相を述べて引
の經を解す。所
の相を述べて引
の經を解す。所

來を明す。

此の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣
の意は法爾隨緣

ども、諸法法爾にして是の如く住す、謂く諸の眞言法爾の故にと云へり。(一)解して云く、(二)如來の身語意は畢竟して等しきを以ての故に、此の(三)眞言の相は聲字皆な常なり、常なるが故に流せず、變易あることなし、法爾にして是の如く造作の所成に非ざるなり、若し造作すべければ則ち是れ生法なり、法若し生あらば則ち破壊す可し、四相に遷流せられて無常無我なり、何ぞ名けて眞實語と爲ることを得んや。是の故に佛自作にもあらず他をして作さしむるにもあらず、設令ひ能作ありとも亦た隨喜したまはず。是の故に此の眞言の相は、若しは佛の世に出興し、若しは出世せず、若しは已説、若しは未説、若しは現説(四)法法位に住して性相常住なり、是の故に必定印と名く。衆聖は道同なり、則ち是れ大悲曼荼羅の一切の眞言と、一一の眞言の相とは皆な(五)法爾なり。

授けたまふ。

(一)既に付法傳來を知んぬ、(二)最初の説相云何ん。經に、秘密主、正等覺を成する一切知者一切見者、世に出興して自ら此の法をもて、種種の道を説き、種種の樂欲に隨つて、乃至種種の諸趣の音聲をもて加持を以て眞言道を説きたまふと云ふ。(三)解して云く、斯の意の言く、如來自證の法體は佛の自作にも非ず、餘の天人の所作にも非ず、法爾常住なれども而も(四)加持神力を以て世に出興し衆生を利益したふ。今(五)此の眞言秘密の身口意は、則ち是れ法佛平等の身口意なり、然も亦た加持力を以ての故に世に出興し衆生を利益したまふ。如來無礙知見は一切衆生の相續の中に在て、法爾に成就して缺減有ること無し。此の眞言の體相に於て、實の如く覺らざるを以ての故に、名けて生死の中の人と爲す、若し能く自ら知り自ら見る時を、則ち一切知者一切見者と名づく。是の故に是の如くの知見は佛の自ら造作したまふ所にも非ず、亦た他に傳授したまふ所にも非ざるなり。佛、道場に坐して是の如くの法を證し已つて、一切の世界は本より以來常(六)に是れ法界なりと了知して、即時に大悲心を生じたまふ、云何んぞ衆生は佛道を去ること甚だ近ふして自ら覺ること能はざると。故に此の因縁を以て、

如來、世に出興して還つて是の如くの不思議法界を用ひて、種種の道を分作し、種種の乘を開示し、種種の樂欲の心機に隨ひて、種種の文句方言を以て、自在に加持して眞言道を説きたまふ。機感の因縁に従つて生ずと雖も、而も實際を動せざるなり。善巧方便をもて爲さざる所なしと雖も然も佛の所作に非ず。普門をもて異説すと雖も、而も但だ佛の知見を以て衆生に示悟す。(一)若し行者此の眞言の十喻の中に於て、妄りに有爲生滅を見て更に心垢を増せば、則ち如來の本意に非ざるなり。復た次に、世尊未來世の衆生は鈍根なるを以ての故に、二諦に迷ふて(二)俗に即して眞なることを知らず、是の故に慇懃に事を指して言く、秘密主云何んが如來の眞言道、謂く此の書寫の文字を加持すと。世間の文字語言は實義なるを以て、是の故に如來は則ち眞言の實義を以て之を加持し給ふ。若し法性を出でて、外か別に世間の文字有りと云はば、則ち是れ妄心の謬見なり。都て實體の求む可き無けれども、而も佛、神力を以て之を加持すと云はば、是れ則ち顛倒に墮して眞言には非らざるなり、已に所加持の處を知らぬ、如來、何なる法を以てか加持し給ふや。故に佛、次に、秘密主、如來は無量百千俱胝那庾多劫に、眞實諦語と四聖諦と四念處と四神足と十如來力と六波羅蜜と七菩提寶

(一)若し行者行
所の佛身は皆是れ
能觀の心の影の影
海會現前なり、影
像を是れ至極なり
と思へば其の意留
著し又漫心を作せ
ばなり。(二)俗に
俗は世間書寫の摩
多體文に即ち俗
諦の形音義は是れ
眞諦なり。

と四梵住と十八佛不共法とを積集し修行し給へり、秘密主、要を以て之を言はば、諸の如來の一切智智と一切如來の自福智力と自願智力と一切法界加持力とをもて、衆生に隨順して其の種類の如く、眞言教法を開示し給ふと言ふは、謂く如來の無量阿僧祇劫に集むる所の功德を以て、而も遍一切處の普門加持を作し給ふ、是の故に一一の言名成立の中に隨つて、皆な(三)因陀羅宗の一切義利成就せざることを無きが如くなるが故に。又此の(四)一一の功德は則ち眞言の相に同じく、法性自爾にして造作の所成に非ざるなり。(五)云何んが眞言教法ぞや。謂く阿阿迦佉伽伽哦乃至し奢沙娑訶等の字は爲れ本母なり。各各の字に十二轉有つて字を生ず、此の各各の十二を本と爲して、一合二合三合四合等の増加字有り、都て計すれば一萬に餘れり。此の一一の字門に無量無邊の顯密の教義を具ふ。一一の聲、一一の字、一一の實相は、法界に周遍し一切諸尊の(六)三摩地門と陀羅尼門と爲る。衆生の機根量に隨つて顯教密教を開示す。密教とは大毗盧遮那十萬頌の經、及び金剛頂瑜伽十萬頌の經是れなり。顯教とは他受用應化佛釋迦如來所説の五乘五藏等の經是れなり。(七)問ふ、華嚴、般若、涅槃等の經に、皆な四十二字を説けり。此の經の(八)四十九字と何

(一)因陀羅宗天
帝釋自ら聲論を造
る、彼の中は是の
如き義あるが故な
り。(二)四聖諦等の
徳法門と眞言に用
ふる所の阿等は、梵
字とは同じく是れ
法爾にして互に相
入るが故に能所加
持となるを明す。(三)
云何んが云何んが
自下眞言所用の字
數を示す、阿々の等
は原文梵字今は對
譯文字を梵字たり
は眞言は唯だ聲此
等の法を具するこ
とを明す。(四)三摩
地門は唯だ聲此
等の法を具するこ
とを明す。(五)問ふ
第五十八法界品
大品般若廣乘品
四十二文字門を説
十誑經五十字門を
説くも大約十字門
を説くも大約十字
門を説くも大約十
十字門を説くも大
除くも大約十字門
を説くも大約十字
門を説くも大約十
十字門を説くも大

(一) 四種の言説
 (二) 四種の言説
 (三) 四種の言説
 (四) 四種の言説
 (五) 四種の言説
 (六) 四種の言説
 (七) 四種の言説
 (八) 四種の言説
 (九) 四種の言説
 (一〇) 四種の言説

んが別なる。答ふ、華嚴、般若、所説の字門とは是れ末なり、涅槃所説は是れ本母なりと雖も、然れども但し淺略の義を説いて之れが深秘の義を秘せり。

問ふ、悉曇の字母は世間の童子も皆な悉く誦習す、此の眞言教と何んが別なる。答ふ、今世間に誦習する所の悉曇章とは、本は是れ如來の所説なり、梵王等轉傳授して世間に流布せり。同じく用ふと云ふと雖も、然も未だ曾て字相字義眞實の句を識らず、是の故に但世間の(二)四種の言語を詮して如義の眞言を得ず、義語を知らざるは皆な是れ妄語なり、妄語は則ち四種の口業を長じ三途の苦因と爲る、若し眞實の義を知るときは則ち一切の罪を滅して一切智を得。譬へば毒藥の知ると知らざると、損益立ちどころに驗あるが如し。云何んが如實義を知る。且らく阿(梵字)等の五轉に各の本不生と寂靜と邊際不可得等の義有り、又阿字に諸法性の義と、因の義と、果の義と、不二の義と、法身の義とあり、即ち是れ大日如來の種子眞言なり、此の五轉は即ち五佛の種子眞言なり、(三)求上門に約すれば則ち因行證入の方便なり。此の一字に一百二十の義及び無數の義理を具す、具さには(四)守護國經に説くが如し。此の字義を解するを名けて(五)法自在王菩薩、及び大毗盧遮那佛と曰ふ、自餘の一一の字義もまた復た是の如し、

(一) 四種の言説
 (二) 四種の言説
 (三) 四種の言説
 (四) 四種の言説
 (五) 四種の言説
 (六) 四種の言説
 (七) 四種の言説
 (八) 四種の言説
 (九) 四種の言説
 (一〇) 四種の言説

諸佛菩薩、無量の身雲を起し無數劫を歴て、一一の字門の義を説かんに、劫は猶し盡く可し、眞言の實義は窮盡すべからず、即ち是れ實の如く字義を知るなり。

問ふ、毘盧遮那の所説をば秘密と名け、釋迦の所説をば顯教と名くといは、釋迦の説の中にも亦た眞言及び秘密の名有り、之れと何んが別なる。(二)答ふ、釋迦の説は、多名句に簡んで秘の名を得、彼の眞言の義も亦た機根量に逗へり。法華涅槃律藏等にも亦た秘の名あり、各の所望に隨つて斯の名を得るのみ。律藏は世間の外道に望めて秘の名を得、法華は二乗を引攝するに約して斯の名あり、涅槃は佛性を示すに據つて之を得、世間の外道の經書の中にも亦た斯の名あり。各各の所愛所珍に隨つて之れに名くるのみ、並びに是れ小秘にして究竟の説に非ず。(三)大日經に勝上大乘句の心續生の相は諸佛の大秘密と説く。秘密に約するに大小あり。眞言にも亦た大小あり、故に(四)菩提場經に云く、我をば眞言と名け、亦たは大眞言と名くといへり、初に眞言とは應化身所説の眞言なり、次に大眞言とは究竟法身所説の眞言なり。問ふ、眞言と大眞言と何んが別なる。答ふ、譬へば大乘と小乘との如し。(五)若し淺略門に就て説かば淺深あり。云何んが不同なる。(六)且らく初の阿字に就て釋せば、世天乃至如來所説の眞言に皆な阿

(一)世間云云。自下世間阿字に約して不生と説く、護世四王の眞言は、疫癘等の不起に約して不生と説く、帝釋の眞言は十不善と災横との不起に約して義を明す。梵王の眞言は欲覺の不起に約して不生と説く、自在の眞言。聲聞の眞言は盡無生智に約して不生と説く、緣覺の眞言は十二因縁の不起に約して不生と説く。諸の菩薩の眞言は各各の諸通達に約して不生と説く、他緣乘は生法の二空と二障の不生とに約して義を明す、覺心不生乘は諸の戲論の不生に約して義を説く、一道無爲乘は無明の不動に約して不生を明す、極無自性乘は約して。

字あり、是れ阿字本不生の義なり。此の不生に於て無量の不生あり。(二)世間呪術の眞言は寒熱等の病を除くに約して不生と説く、護世四王の眞言は、疫癘等の不起に約して不生と説く、帝釋の眞言は十不善と災横との不起に約して義を明す。梵王の眞言は欲覺の不起に約して不生と説く、自在の眞言。聲聞の眞言は盡無生智に約して不生と説く、緣覺の眞言は十二因縁の不起に約して不生と説く。諸の菩薩の眞言は各各の諸通達に約して不生と説く、他緣乘は生法の二空と二障の不生とに約して義を明す、覺心不生乘は諸の戲論の不生に約して義を説く、一道無爲乘は無明の不動に約して不生を明す、極無自性乘は約して。

國譯秘密曼荼羅十住心論卷第十 尾大

國譯眞言淨菩提心私記

傳法院 覺鑊の撰

本書は五輪九字明、秘密釋、修行問答、十九執、金剛秘釋なりとす。(一)覺鑊、興教大師、新義眞言宗の祖師、自性云云、菩提心の廣大なることを明す。(二)亦は云云、衆生を佛陀の實際を示す。(三)普門海會、無盡莊嚴藏の大曼荼羅、空性無境を指すも、今諸法を密に説く、法界の眞相、即ち六大の實相の故に、此の句あり。(四)一切開智なり、極位の一切開智なり、所開の加持門なり、加持門の外縁を以て加持世界の淨菩提を以て、自下

それ眞言の淨菩提心は、是れ自性法身心地法界大日如來心王の具體なり、亦は一切衆生の色心の實相、普門海會の平等の種子なり。故に大日經の疏第二に云く、この心は即ち是れ如來の自然智なり、亦た是れ毘盧遮那の遍一切身なり。心は是の如くなるを以ての故に諸法も亦た是の如し、根塵皆阿字門に入るといへり。又同じき疏第一に云く、一切衆生の色心の實相は、本際より已來常に是れ毗盧遮那の平等智身なり、是れ菩提を得るときに、強ちに諸法を空して法界と成さしむるにあらず。佛、平等の心地より無盡莊嚴藏の大曼荼羅を開發し已りて、還て用て衆生の平等心地の無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發したまふ。妙感妙應皆阿字門を出でず。當さに知るべし、感應の因縁、所生の方便も亦た復た阿字門を出でずといへり。(二)又この淨菩提心は、是れ一切衆生の自然本有の心地の實際、即ち是れ一切智智なり、實の如く了知するを名けて一切智者と爲す。故に大日經の第一に云く、云何んが菩提

(一) 十重の淺深なり
 五輪九字 眞言宗
 義の兩著に委細あり
 對讀すべし
 (二) この品の一致
 は心と智との一致
 を明す
 (三) 大意 因根究
 竟の三句法門
 (四) 眞語云云 般
 若寺鈔上、流第十、
 十九、二十に三密
 共に眞言と稱す
 (五) 入修淨菩提
 を以て佛境界に入
 る修行之意
 (六) 愍して云云
 速疾なるは淨心の
 功力に依るを明す
 (七) 一體云云 疏
 三、六を對見せよ
 (八) 除蓋障 煩惱
 さ業さ生障さ法障
 さ所知障の五蓋障
 を除く即ち覺位に
 入る
 (九) 自心の實相
 六大體性曼荼羅な
 りとす

とならば、謂く實の如く自心を知るといへり。

十住心論第十に云く。經に云く、云何んが菩提とならば、謂く實の如く自心を知る、
 此れこの一句に無量の義を含み、豎に(一)十重の淺深を顯し、横に塵數の廣多を示すと
 いへり。

また大日經の疏第一に云く、(二)この品は經の(三)大意を統論す、所謂る衆生の自心品な
 り、即ち是れ一切智智なり、實の如く了知するを名けて一切智者となす、是の故にこ
 の教の諸の菩薩、(四)眞語を門となして、自心に菩提を發し、即心に萬行を具し、心の
 正等觀を見、心の大涅槃を證し、心の方便を發し、心の佛國を嚴淨す、因より果にい
 たるまで皆无所住を以て而も其の心に住す、故に入眞言門住心品と曰ふといへり。復
 た此の淨菩提心はこれ眞言行者の(五)入修の秘要、悉地成就速疾の妙藥なり。(六)愍じて
 世間出世の一切悉地速疾成就を得るは、必らず眞言淨菩提心の(七)一體の速疾の三昧に
 依りてなり。眞言行者、若し本尊の三密の方便を以て、勇猛精進に之を觀じ之れを行
 すれば、此の生に必ず(八)除蓋障三昧を獲て諸佛境界に入る。故に大日經の疏第一に
 云く、今眞言行者は、初發心の時に於て、直に(九)自心の實相を觀じ、本不生を了知する

(一) 人法戲論の淨なること虚空の如し、自然覺を成じて他に由りて悟ら
 ず。當に知るべし、此の觀を復た頓悟の法門と名くるなり。經に云く、秘密主、この
 菩薩の淨菩提心門を(二)初法明道と名く、菩薩これに住して、久しく勤苦せずして、便ち
 除一切蓋障三昧を得とは、佛の智慧に入るに無量の方便門あり。今この宗は直に淨菩提
 心を以て門となす、若し此の門に入れば即ち是れ初めて一切如來の境界に入る、乃至
 (三)法明といふは、心の本不生際を覺るを以て、その心淨住にして大慧の光明を生じ、
 普く無量の法性を照して諸佛所行の道を見る、故に法明道といふなり、乃至行人、淨菩
 提心に因て諸法を照明する故に、少しき功力を用ゐて除蓋障三昧を得て、(四)八萬四千
 の煩惱の實相を見るに、八萬四千の寶聚門となる、故に經の次に、菩薩此に住して修學
 して久しく勤苦せず、便ち除一切蓋障三昧を得、若し此を得れば即ち諸佛菩薩と同等
 に住すといふといへり。

又同疏第二に云く、行者初めて淨菩提心に入り、未だ無數阿僧祇劫に於て、具に(五)普
 賢の衆行を備へ、大悲方便を満足せずと雖も、然も此れ等の如來の功德皆已に成就す、
 何を以ての故に、即ち是れ毗盧舍那の具體法身なるが故にといへり。また(六)大日經

(一) 勢力 檀度等
 (二) 法に住す 三摩
 (三) 菩提心 本有
 (四) 淨白云云 五
 (五) 裏書 大師自
 (六) 唯是れ 迷悟
 (七) 八十華嚴 第
 (八) また云く 同
 (九) 心の如く 一
 (一〇) 心佛云云 諸
 (一一) 唯是れ 迷悟
 (一二) 唯是れ 迷悟
 (一三) 唯是れ 迷悟
 (一四) 唯是れ 迷悟
 (一五) 唯是れ 迷悟
 (一六) 唯是れ 迷悟
 (一七) 唯是れ 迷悟
 (一八) 唯是れ 迷悟
 (一九) 唯是れ 迷悟
 (二〇) 唯是れ 迷悟
 (二一) 唯是れ 迷悟
 (二二) 唯是れ 迷悟
 (二三) 唯是れ 迷悟
 (二四) 唯是れ 迷悟
 (二五) 唯是れ 迷悟
 (二六) 唯是れ 迷悟
 (二七) 唯是れ 迷悟
 (二八) 唯是れ 迷悟
 (二九) 唯是れ 迷悟
 (三〇) 唯是れ 迷悟
 (三一) 唯是れ 迷悟
 (三二) 唯是れ 迷悟
 (三三) 唯是れ 迷悟
 (三四) 唯是れ 迷悟
 (三五) 唯是れ 迷悟
 (三六) 唯是れ 迷悟
 (三七) 唯是れ 迷悟
 (三八) 唯是れ 迷悟
 (三九) 唯是れ 迷悟
 (四〇) 唯是れ 迷悟
 (四一) 唯是れ 迷悟
 (四二) 唯是れ 迷悟
 (四三) 唯是れ 迷悟
 (四四) 唯是れ 迷悟
 (四五) 唯是れ 迷悟
 (四六) 唯是れ 迷悟
 (四七) 唯是れ 迷悟
 (四八) 唯是れ 迷悟
 (四九) 唯是れ 迷悟
 (五〇) 唯是れ 迷悟
 (五一) 唯是れ 迷悟
 (五二) 唯是れ 迷悟
 (五三) 唯是れ 迷悟
 (五四) 唯是れ 迷悟
 (五五) 唯是れ 迷悟
 (五六) 唯是れ 迷悟
 (五七) 唯是れ 迷悟
 (五八) 唯是れ 迷悟
 (五九) 唯是れ 迷悟
 (六〇) 唯是れ 迷悟
 (六一) 唯是れ 迷悟
 (六二) 唯是れ 迷悟
 (六三) 唯是れ 迷悟
 (六四) 唯是れ 迷悟
 (六五) 唯是れ 迷悟
 (六六) 唯是れ 迷悟
 (六七) 唯是れ 迷悟
 (六八) 唯是れ 迷悟
 (六九) 唯是れ 迷悟
 (七〇) 唯是れ 迷悟
 (七一) 唯是れ 迷悟
 (七二) 唯是れ 迷悟
 (七三) 唯是れ 迷悟
 (七四) 唯是れ 迷悟
 (七五) 唯是れ 迷悟
 (七六) 唯是れ 迷悟
 (七七) 唯是れ 迷悟
 (七八) 唯是れ 迷悟
 (七九) 唯是れ 迷悟
 (八〇) 唯是れ 迷悟
 (八一) 唯是れ 迷悟
 (八二) 唯是れ 迷悟
 (八三) 唯是れ 迷悟
 (八四) 唯是れ 迷悟
 (八五) 唯是れ 迷悟
 (八六) 唯是れ 迷悟
 (八七) 唯是れ 迷悟
 (八八) 唯是れ 迷悟
 (八九) 唯是れ 迷悟
 (九〇) 唯是れ 迷悟
 (九一) 唯是れ 迷悟
 (九二) 唯是れ 迷悟
 (九三) 唯是れ 迷悟
 (九四) 唯是れ 迷悟
 (九五) 唯是れ 迷悟
 (九六) 唯是れ 迷悟
 (九七) 唯是れ 迷悟
 (九八) 唯是れ 迷悟
 (九九) 唯是れ 迷悟
 (一〇〇) 唯是れ 迷悟

の第七に云く、若し(一)勢力の廣く増益すること無くば、(二)法に住して但し(三)菩提心を觀せよ。佛、この中に萬行を具し(四)淨白純淨の法を満足すと説きたまふといへり。又發菩提心論に云く、若し人、佛慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證すと。

(五)裏書に曰く(裏書とは後人の言也、表書の菩提心に付て釋せらる、心は自心即ち能求なり、菩提心は所答を設けてその義を結す、即ち裏書)
 答を設けてその義を結す、即ち裏書
 答は諸法一心廻轉の旨を成す。

問ふ何故に心を以て菩提と名くるや。答ふ無始無終十方法界所有の善惡迷悟の諸法は、(六)唯是れ一心の作なり。問ふ何を以て之を信解すべしや。答ふ佛説を以て信す可きなり。問ふ其の教文何等ぞや。答ふ大日經に云く、云何んが菩提、謂く實の如く自心を知ると。また云く、心と虚空と菩提との三種は無二なりと。また(七)八十華嚴に云く、若し人、三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性を觀すべし、一切は唯心の造なりと。(八)また云く、(九)心の如く佛も亦た爾り、佛の如く衆生も然なり、(一〇)心佛及び衆生、是の三つ差別なしと。また大乘起信論に云く、是の心は則ち一切世間法出世間法を攝すと。また云く、心生すれば諸法生ず、心滅すれば諸法滅すと。

(一) 勢力 檀度等
 (二) 法に住す 三摩
 (三) 菩提心 本有
 (四) 淨白云云 五
 (五) 裏書 大師自
 (六) 唯是れ 迷悟
 (七) 八十華嚴 第
 (八) また云く 同
 (九) 心の如く 一
 (一〇) 心佛云云 諸
 (一一) 唯是れ 迷悟
 (一二) 唯是れ 迷悟
 (一三) 唯是れ 迷悟
 (一四) 唯是れ 迷悟
 (一五) 唯是れ 迷悟
 (一六) 唯是れ 迷悟
 (一七) 唯是れ 迷悟
 (一八) 唯是れ 迷悟
 (一九) 唯是れ 迷悟
 (二〇) 唯是れ 迷悟
 (二一) 唯是れ 迷悟
 (二二) 唯是れ 迷悟
 (二三) 唯是れ 迷悟
 (二四) 唯是れ 迷悟
 (二五) 唯是れ 迷悟
 (二六) 唯是れ 迷悟
 (二七) 唯是れ 迷悟
 (二八) 唯是れ 迷悟
 (二九) 唯是れ 迷悟
 (三〇) 唯是れ 迷悟
 (三一) 唯是れ 迷悟
 (三二) 唯是れ 迷悟
 (三三) 唯是れ 迷悟
 (三四) 唯是れ 迷悟
 (三五) 唯是れ 迷悟
 (三六) 唯是れ 迷悟
 (三七) 唯是れ 迷悟
 (三八) 唯是れ 迷悟
 (三九) 唯是れ 迷悟
 (四〇) 唯是れ 迷悟
 (四一) 唯是れ 迷悟
 (四二) 唯是れ 迷悟
 (四三) 唯是れ 迷悟
 (四四) 唯是れ 迷悟
 (四五) 唯是れ 迷悟
 (四六) 唯是れ 迷悟
 (四七) 唯是れ 迷悟
 (四八) 唯是れ 迷悟
 (四九) 唯是れ 迷悟
 (五〇) 唯是れ 迷悟
 (五一) 唯是れ 迷悟
 (五二) 唯是れ 迷悟
 (五三) 唯是れ 迷悟
 (五四) 唯是れ 迷悟
 (五五) 唯是れ 迷悟
 (五六) 唯是れ 迷悟
 (五七) 唯是れ 迷悟
 (五八) 唯是れ 迷悟
 (五九) 唯是れ 迷悟
 (六〇) 唯是れ 迷悟
 (六一) 唯是れ 迷悟
 (六二) 唯是れ 迷悟
 (六三) 唯是れ 迷悟
 (六四) 唯是れ 迷悟
 (六五) 唯是れ 迷悟
 (六六) 唯是れ 迷悟
 (六七) 唯是れ 迷悟
 (六八) 唯是れ 迷悟
 (六九) 唯是れ 迷悟
 (七〇) 唯是れ 迷悟
 (七一) 唯是れ 迷悟
 (七二) 唯是れ 迷悟
 (七三) 唯是れ 迷悟
 (七四) 唯是れ 迷悟
 (七五) 唯是れ 迷悟
 (七六) 唯是れ 迷悟
 (七七) 唯是れ 迷悟
 (七八) 唯是れ 迷悟
 (七九) 唯是れ 迷悟
 (八〇) 唯是れ 迷悟
 (八一) 唯是れ 迷悟
 (八二) 唯是れ 迷悟
 (八三) 唯是れ 迷悟
 (八四) 唯是れ 迷悟
 (八五) 唯是れ 迷悟
 (八六) 唯是れ 迷悟
 (八七) 唯是れ 迷悟
 (八八) 唯是れ 迷悟
 (八九) 唯是れ 迷悟
 (九〇) 唯是れ 迷悟
 (九一) 唯是れ 迷悟
 (九二) 唯是れ 迷悟
 (九三) 唯是れ 迷悟
 (九四) 唯是れ 迷悟
 (九五) 唯是れ 迷悟
 (九六) 唯是れ 迷悟
 (九七) 唯是れ 迷悟
 (九八) 唯是れ 迷悟
 (九九) 唯是れ 迷悟
 (一〇〇) 唯是れ 迷悟

また云く、心眞如とは、即ち是れ(一)一法界大惣相法門の體なり。所謂る心性は生ぜず滅せざるなり、一切諸法は唯(二)妄念に依りて(三)差別あれども若し心念を離るれば即ち一切の境界の相なし、是の故に一切法は、本より已來言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離れたり、畢竟平等にして變異あることなければ破壊すべからず、唯是れ(四)一心なり、故に眞如と名くと。
 また云く、心體は念を離る、(五)離念の相とは、虚空界に等しく徧せざる所なし、法界一相なり即ち是れ如來の平等の法身なり、此の(六)法身に依りて説きて本覺と名くと。
 (七)問ふ、云何んが菩提と云ふや。答て云く、菩提此に翻して覺といふ、謂く實の如く自心を知るを菩提と名くるなり。問ふ、如何んが自心を知るや、答ふ、心を知る法門は下に至りて具に解釋すべし。それ佛の智慧に入るに無量の門あれども、入修頓證は實の如く自心を知るに如くはなし。(八)問ふとろの實の如く自心を知るの行相如何ぞ。答ふ實の如く自心を知るの行相の法門は、具には大日經住心品の如し。云何んが菩提とならば謂く實の如く自心を知るの文より、此の菩薩の淨菩提心門を初法明道と名くるの文に至るまで、(九)十二番に之を説く、疏に具に之を釋せり。また

（一）十句の法門を説く、所謂る（二）空性には根境を離るの文より、是の如くの（三）初心は、佛、成佛の因と説きたまふの十句の經文に至るまで是れなり、疏に具に釋せり。今惣相を以て之を言はば、菩提心論に云く大毗盧遮那佛經に云ふが如し、諸法は無相なり爲く虚空の相なり、是の觀を作し已るを勝義菩提心と名く。當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本无生を悟んぬれば、心躰自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失なからしむ、安心若し起らば知て隨ふことなかれ、妄若し息む時んば心源空寂なり、萬徳斯に具し妙用窮りなし、所以に十方の諸佛、勝義・行願を以て戒と爲す、但しこの心を具するものは、能く法輪を轉じて自他俱に利すと。

同經の住心品の下の文に、淨菩提心門に超入するの（一）十句の法門を説く、所謂る（二）空性は根境を離るの文より、是の如くの（三）初心は、佛、成佛の因と説きたまふの十句の經文に至るまで是れなり、疏に具に釋せり。今惣相を以て之を言はば、菩提心論に云く大毗盧遮那佛經に云ふが如し、諸法は無相なり爲く虚空の相なり、是の觀を作し已るを勝義菩提心と名く。當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本无生を悟んぬれば、心躰自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失なからしむ、安心若し起らば知て隨ふことなかれ、妄若し息む時んば心源空寂なり、萬徳斯に具し妙用窮りなし、所以に十方の諸佛、勝義・行願を以て戒と爲す、但しこの心を具するものは、能く法輪を轉じて自他俱に利すと。

（五）大日經の疏第一に云く。經に云く、佛、金剛手に告げたまはく、菩提心を因と爲し、大悲を根と爲し、方便を究竟となすとは、猶し世間の種子の四大乘縁に藉るが故に、根を生ずることを得るがごとし、是の如く次第に乃至果實成熟するを名けて究竟と爲す。然れども中智を以て之を觀するに畢竟不生不滅なり、是の故に因果の義成す。（六）若し法、然らずんば、生滅斷常の相のみありて則ち戲論に墮し、皆悉く

（一）出過するの實相を出過するの實相（二）深信畢究不（三）深信畢究不（四）深信畢究不（五）深信畢究不（六）深信畢究不（七）深信畢究不（八）深信畢究不（九）深信畢究不（十）深信畢究不

破すべし因果の義成せざるなり。今行者、心の實相を觀することも亦た復た是の如し、一切の戲論を（一）出過して淨虚空の如し、内證の所行に於て（二）深信の力を得、（三）薩婆若の心堅固にして動せず、業受の生を離れて（四）眞性の生を成す、萬行の功德これより増長す。故に菩提心を因となすと曰ふ。此の菩提心を後の二句の因と爲す後の二句とは、大悲を根となすの句と方便を究竟と爲すの句なり。若し生死の中の所殖の善根に望むれば、則ち名けて果となす、佛法の（五）前相を觀るを以ての故に。 己上 裏書

（六）問ふ、此の淨菩提心に於て分位差別ありや。答ふ、此の淨菩提心に於て豎に略して十重の分位差別あり、横に廣く（七）塵數不可説の淨菩提心あるなり。故に十住心論第十に云く、經に云く云何んが菩提とならば謂く實の如く自心を知ると、これはの一句に無量の義を含み、豎に十重の淺深を顯し、横に塵數の廣多を示すと。

問ふ、淨菩提心の（八）横豎の大意如何んぞや。答ふ、實の如く自心を知るを淨菩提心と名く、横豎の義門甚深廣大なり、若し佛にあらざれば誰れか之れを知らん、然りと雖も且つは深法渴仰の爲めに、且つは自心練磨の爲めに聊か（九）經論の文を抄し、頗る（一〇）章疏の釋を出さん。先づ豎に十重の差別を明し、後に横に塵數の一兩を述べん。先

(一)章疏 章十卷
 (二)辟越 辟越論
 (三)求所 秘密莊
 (四)嚴密 嚴密莊
 (五)莊嚴 莊嚴莊
 (六)名號 名號莊
 (七)自性 自性莊
 (八)地獄 地獄莊
 (九)天堂 天堂莊
 (十)佛性 佛性莊
 (十一)對世 對世莊
 (十二)出世 出世莊
 (十三)秘號 秘號莊
 (十四)大悲 大悲莊
 (十五)大慈 大慈莊
 (十六)分別 分別莊
 (十七)惡平等 惡平等莊
 (十八)善差別 善差別莊
 (十九)迷悟 迷悟莊
 (二十)得失 得失莊

づ堅に十重差別とは、謂く初め羝羊の暗心より、漸次に暗に背き明に向ふ求上の次第なり、是の如くの次第に略して十種あり、一には異生羝羊心乃至十には秘密莊嚴心なり、此の十住心一の大意、須らく經論に依りて問答し章疏を以て斷簡すべし。眞言行者若し差別を檢せず、更に淺深を知らず、不同を同と謂ひ、未得を得とせん、然れば則ち發心(一)辟越すれば終に(二)求所を知らず智者之を悉すべし、信するものは之を知るべし故に十住心論第一に云く、若し能く(三)明に(四)密號名字を察し(五)莊嚴の秘藏を開裏書に曰く

闡提・煩惱・菩提・生死・涅槃・邊邪・中正・空有・偏圓・二乘一乘・皆是れ自心の佛の名字なり、焉れをか捨て焉れをか取らん。然りと雖も(六)秘號と知るものは猶し驕角の如く自心に迷へるものは既に牛毛に似たり、是の故に(七)大慈この無量乘を説て一切智に入れしむ。若し堅に論すれば則ち乘乘差別淺深あり、横に觀すれば則ち智智平等一味なり。(八)惡平等のものは未得を得となし不同を同と爲す。(九)善差別のものは分滿不二即離不謬なり。(一〇)之に迷ふものは藥を以て命を天し、之に達するものは藥に因りて仙を得、迷悟已れにあり執なくして至る、(一一)有疾の菩薩迷方の狂子慎まさんばあ

るべからず云云。 已上 裏書

(一)有疾 執見あり
 (二)現圖 現圖あり
 (三)四重 四重あり
 (四)三密 三密あり
 (五)六度 六度あり
 (六)十身 十身あり
 (七)五教 五教あり
 (八)華嚴 華嚴あり
 (九)本地 本地あり
 (十)成佛 成佛あり
 (十一)外迹 外迹あり
 (十二)十身 十身あり
 (十三)華嚴 華嚴あり
 (十四)見よ 見よあり
 (十五)五教 五教あり
 (十六)住心 住心あり
 (十七)約云 約云あり
 (十八)第七 第七あり
 (十九)菩薩 菩薩あり
 (二十)根塵 根塵あり
 (二十一)六識 六識あり
 (二十二)五蘊 五蘊あり
 (二十三)是の如き 是の如きあり
 (二十四)心王 心王あり
 (二十五)不二 不二あり

夫れ深より淺に至る第一の秘密莊嚴住心の分位淨菩提心とは、所謂る无始无終・三世十方・周遍法界・法爾常恒・金剛堅固・自性・受用・淨妙法身・摩訶毘盧遮那如來・大悲胎藏の三部・(一)四重・三密・六大・金剛界會の五部五智・及び無際智と、四種法身の曼荼・種種無量の秘密曼荼との一切惣持の心王なり。究竟して自心の源底を覺知し、實の如く自身の數量を證悟すれば、圓極自在にして一味一際なり、法然不壞の堅固金剛の智慧是れなり、是れを毘盧舍那(二)本地淨菩提心と名け、亦た能加持無相法身と曰ふ、是れを眞言究竟淨菩提心と名くるなり。此の究竟の淨菩提は自性(三)法身・受用(四)法身・智法身・不二の心王なり、横に無邊無盡十方虛空界を究め、豎に無始無終の劫跋耶の法界所有の諸佛の三身・四身・(五)十身・無盡の色心・身土の功德智慧・三身所説の一切の契經の海・(六)一切の菩薩・聲聞・緣覺・及び法界所有の六趣・四生・一切衆生の善惡の因果・(七)根塵識等の色心依正を盡す。(八)是の如きの横豎の一切諸法の惣躰なり。所以に心王は是れ諸法、諸法は即ち心王なり、心王本不生なれば、亦た諸法も本不生なり、諸法の緣起即ち心王の緣起なり、心王の緣起は本初不生にして、心王一切處に遍すれば心數も一切處に

國譯眞言淨菩提心私記

(一) 廻轉云云 華嚴の唯心廻轉門に
 唯心廻轉法門に
 依る開解抄十九
 (二) 不改淨善提
 (三) 不改なる也
 (四) 即ち此の云云
 (五) 自三大を以て理
 智の二に比す
 (六) 此の智印を以て
 下不二理を以て
 (七) 佛身を成ず
 (八) 大日云云 法
 義門を別にして二
 義門を成ず
 (九) 上賢聖觀品に法
 性應化の二身を
 説く今法性身を
 きて理智の二身と
 (一〇) 自覺聖智同
 金剛頂會同す
 (一一) 三昧に入れば善
 覺一切は本不生に
 從ふ本不生を
 知れば即ち妄想
 と知る
 (一二) 曰ふの言は
 顯略にして機に
 又次の密藏と謂ふ

遍す、一念一切處に遍すれば一塵も一切處に遍す、是の如く心王自在にして(一)廻轉無窮なり、無窮に廻轉すれども當體金剛なり、實際堅固にして破すべからず壞すべからず。この心王は是れ體を論すれば無相なること猶し虚空の如し、性を論すれば(二)不改なること亦た金剛の如し、相を論すれば明了なること譬へば光明の如し、用を論すれば無碍自在なり。誠に法界海の中に心王を除きて、餘の一切諸法、今心王に比類するものあることなし、(三)則ち此く心王の體性の無相なるは是れ理なり、相用明了無碍なるは是れ智なり、(四)此の智即ち理なり、此の理即ち智なり、理智不二自在の心王(五)大日如來理法身を毘盧遮那と名け、智法身を盧遮那と稱す。故に辯顯密二教論に云く、若し(六)瓔珞經に依らば、毘盧遮那は是れ理法身なり、盧遮那は則ち智法身なり、釋迦を化身と名く、然れば則ち是れ金剛頂所談の毘盧遮那佛・自受用身所説の内證(七)自覺聖智の法とは、此れ則ち理智法身の境界なりと。此の二教論の説に依らば、眞言秘教は是れ自性(八)理法身(九)受用(十)智法身(十一)理智不二の法身所説なり。理智不二の故に、或は自性身所説と云ふは、是れ理法身の所説をいふ。或は自受用所説と云ふは是れ智法身を云ふなり。又二教論に云く、佛に三身あり、教は則ち二種なり、應化の開説を顯教と(十二)曰ふ、法佛

次に言は秘典にし
 て實説の句を略せ
 (一) 問ふ 自下廣
 密の區別を辨す
 (二) 所引は第二十八清
 淨蓮花明王第六十
 七の文なり此の
 (三) 一品別行あり
 (四) 親菩薩の金剛般若
 論を釋す卷第八に
 具文あり
 (五) 三法報化の
 三身なり

(五) 體同用異 唯多
 密の顯密合論と華
 嚴報身の三身と天
 台無作の三身と等
 りも今は密の意な

の談話之を密藏と謂ふと。
 (一) 問ふ、佛の三身は、體は一體無二とやせん、各身各體とやせんや。答ふ、佛の三身は一體無二なり、但し用に約するが故に三身の異を云ふ。放し弘法大師の略は法傳に云く、法・報・應・化・體同用異といへり。
 また(二) 羅索經に云く、三身一體皆平等にして毘盧遮那の自性身なりと。
 また(三) 金剛仙論に云く、(四) 三に即して一、一に即して三、三を言ふに其の一を傷らす、一を言ふに其の三を壞せずと。
 裏書に云く。
 問ふ、三身の(五) 體同用異の意如何ん。答ふ、三身の如來は理智不二の金剛是れ一なり。此の一金剛は但し人執を破し、未だ法執及び無明を破せざる時を變化身といふ。次に漸く法執を破し、無明を伏する時を他受用報身といふ、次に人法二執及び頓に無明破する時を名けて法身と曰ふ。此の法身の佛、理智不二なるを以ての故に理を理法身と名け、智を智法身と名く。此の理智法身俱に本有なりと雖も、始覺還成の義あるを以ての故に亦た報身と名くと云云。今此の三身體同用異は、譬へば金剛の木

を摧く力用は是れ劣なり、次に此の金剛亦た石を碎く力用は是れ漸強し。次に此の金剛、金の類を摧破する力用は極めて堅固なるが如く、金剛は體一なれども所に隨ひ物を摧く力用に勝劣ある故に、三身は體一用異りといふなり。 已上 裏書

問ふ、佛の三身說法の中の所説の法門更に互に之れありや。答ふ、三身の說法は是れ異なり、亦た更に互に之れある故に、弘法大師の(二)請來目錄に云く、法海一味なれども機に隨て深淺あり、五乘鑿を分て器を逐て頓漸あり、頓教の中に顯あり密ありと。此の文已に法海一味なれども、機に隨て深淺あり、頓教の中に顯あり密ありといふ。亦た顯教の中に密教ある可きなり、然りと雖も(三)文は執見に隨て隠れ、義は機根を逐て現るゝまくのみ。

(四)問ふ、毘盧遮那・盧遮那・釋迦牟尼の三種の名義は三身に皆之れありや。答ふ、此の毘盧等の三種の名義は三身に皆之れあり。問ふ、法身を毘盧遮那と名け、亦是盧遮那と名け、亦是釋迦牟尼と名けたる證據ありや。答ふ、先づ法身を毘盧遮那と名くること(五)顯密諸經の説の如くし。亦た盧遮那と名くること(六)璽珞經の説の如くし。亦た釋迦牟尼と名くるは、(七)禮懺に作變化身釋迦牟尼佛といふとは、是れ法身に名けたるなり

(二)請來目錄
二丁左經軌を献す
るの文。

(三)文云云秘密の
執見は顯人の
義、機根は密教の
機根。
(四)問ふ 自下三
身名義の問答、中
に於て展轉問答七
番あり。
(五)顯密教經 顯
は璽珞經、密は金
胎の大經。
(六)璽珞經 二教
論及び指光鈔に引
證せり。
(七)禮懺 金剛界

(二)所以云云禮
懺を以て所由とな
す。

(二)金剛界義決
不空三藏の作。文
の中諸と是の二字
は現流の本になし
撰者義を以て之を
加へしならん。
(三)次に自ら報
化の二段は顯佛也
(四)光明毗盧遮那
自受用身他受用身
と云へり。
(五)華嚴經 盧遮
那品の盧遮那を指
す、現流の本には
此の字なし。
(六)普賢觀經 具
文に釋迦牟尼を叱
盧遮那と名く一切
處に通すと。
(七)華嚴經に云く
十華嚴名號品なり
(八)問ふ 時下三
身名義通局の問答
なり。

(二)所以何んとならば、云く上の金剛界大曼荼羅の三十七尊の如きは、並びに是れ諸佛の内眷屬毘盧遮那の互躰なるが故なり。此の禮懺文の意の云く、三十七尊は皆是れ毘盧遮那の一體性の金剛界の身・内性内證の自覺聖智の心王心數の諸尊なるが故に此の三十七尊は、皆同一躰金剛界より生せる身の故に、同じく自性身と名くるなり。(三)金剛界義決に云く、一切諸佛の身は即ち是れ一佛の身なりと。

(四)次に他受用報を毘盧遮那と名くるは、(四)金剛頂分別聖位經の説の如し、亦た盧遮那と名くることは、(五)華嚴經の説の如し。亦た釋迦牟尼と名くるも亦た華嚴經の説の如し。復た次に化身を毘盧遮那と名くること、(六)普賢觀經に、或は釋迦と名け、或は毘盧遮那と名くと説くが如し。聲字實相義に云く、若しは謂く應化の佛を或は大日尊と名く、應化の光明普く法界を照すが故に此の名を得。故に(七)經に云く、化身を盧遮那と名く、華嚴經の説の如し。化身を釋迦牟尼と名くること廣く諸經の説の如し云云。

(八)問ふ、三身體一なれども、用の差別に依ると。爾るとならば三身各別の名義如何んが三身に通すべきや。答ふ、三身の體用離散せざるが故に、三名の義理三身に通するなり。

問ふ、三身の體用若し離散せずんば、三身の功能作用如何んが分別すべきや。答ふ、
 三身の體用は是れ離散せざれども、但し機縁の感得に隨て用の差別を論ずるのみ。
 問ふ、佛、機縁の感得に隨て作用差別なる意如何んぞ。答ふ、三身の作用次第に現す
 時、若し機縁が化身を感得する時は、人執及以び相應の煩惱障を斷じ、未だ法執
 及び所知障を斷せず。若し機縁が他受用身を感得する時は、法執及以び相應の所知
 障并びに少分無明を斷ず。若し機縁が法身を感得する時は、に煩惱・所知・無明の
 三惑を斷ず、云云。
 問ふ、所知障は是れ無明なり、如何んぞ所知の外に無明を論ずるや。答ふ、法界縁
 起の事を障ふる無知を所知障と名く、一心平等の理を障ふる不覺を無明といふ。法
 身は是れ人法理事平等一心法の故に、機縁感得の時に頓に三惑を斷じ、三身の菩提
 を證得するものなり。
 問ふ、三身の名如何んが翻するや。答ふ、毘盧遮那に四種の翻あり、一番に遍一切處、
 二番に遍照、三番に大日、四番に最高顯廣眼藏なり。金剛頂義決に云く、遍照と大
 日との二つの翻は、此れ並びに略にして名義闕けたりと。盧遮那は淨滿と翻し、釋迦牟

照す如來なり。
 記九の一、專心鈔
 支談、舊華嚴通
 品等此の名あり之
 を翻名と然らざる
 との異義あり

(三) 地前云云
 地上、法身は佛果

(三) 地前、自下は
 辯顯密二教論に由
 論りて文を成す、同
 論は聖位經に同異
 につつき多義あり
 は同の義に隨ふ、今
 爲の設ひ云、地上の
 即中の報身は勿論
 なるも設ひは化身の
 りともとの意なり

尼を此に能忍と翻す、能く五濁惡世に出で、忍び難きの苦を忍び、化し難き生を化す
 る故なり。又た一度沃燠と翻す、大海の底に石あり沃燠と名く、大海の水を呑で海水を
 して増さらしむ、日月劫數を經と雖も飽き足ることなし、娑婆世界の衆生も亦た復
 た是の如し、設ひ五欲の樂を受け百歳千年を過ぐと雖も、貪欲の心彌々盛んにして更に
 飽き足ることなし、此れ等の衆生を度する故に度沃燠といふ。
 問ふ、諸佛の教法に差別あるが如く、能説の教主も三身に差別ありとやせん差別なしと
 やせん。答ふ、佛の所説の教法に差別あるが如く、能説の教主も三身の差別あり。問
 ふ、所説の教法に隨つて、能説の教主に差別ある方如何んぞ。答ふ、三乗教の教主は
 地前と地上と佛果と次での如く三身の次第なり。佛乘圓教の教主は、三身相即不縱不横
 の法身にして一切處に遍す、報應未だ嘗し法身を離れず、三身相即すと雖も、次第に隨
 て機感得するなり。地前二乘菩薩の爲めに三乗教を説く。他受用身は地上の菩薩の爲
 めに顯の一乘を説く。自性受用の法身は自性所成の眷屬と俱に、自受法樂の爲めに三平
 等句の法門を説きたまふ。亦た三身相即なる故に、一乘圓教の機熟すれば、設ひ地
 前住前の位にも三身即一の化身、顯の一乘を説きたまふ。若し秘密の機ある時は、法

(一) 瑜祇經 佛身の開合に多義あり、同經は法身化身を説き、化身に自受を攝す。化身は三身を攝す。持身の受用已下(二) 釋して 弘法大師註釋。自下法身說法は或は顯の教に隨するや否やの問あり。(三) 十地は顯なり答意は加持門説法にして修行の十地を益せしめて本有にあらす。(四) 秘密機 答は加持世界の密機は所説の一段の概意は證教主の法門は他證をして受けしむる謂る自證説法は内證なり能説の便に約せば隨宜なり、是れ加持説肝の用心なり。要の具感加持世行に於ける密機なり。

身如來、無盡莊嚴藏を奮迅示現して、遍一切乗の三平等句の法門を説きたまふ。故に二教論に(一) 瑜祇經の常に三世に於て、不壞の(二) 化身にして有情を利益して、時として暫くも息む時なしとの文を引(三) 釋して云く、謂く三世とは三密なり、不壞とは金剛を表す、化とは業用なり、言は常に金剛の三密の業用を以て三世に亘り、自他の有情に妙法の樂を受けしむるなりと。

(四) 問ふ、自性受用佛は是れ唯し佛の自境界因位の人人(五) 十地等覺も更らに見聞せず、如何んぞ若し(六) 秘密の機あらば三平等句の法門を説きたまふと云ふや。若し法身の佛、具感の機の爲めに法を説かば是れ則ち他受用身所説の教法にして、猶し亦た顯教といふべし、如何んぞ内證三密の教を説くと云はんや。

答ふ 秘密の機とは直に本地法身の内證三密を信解する器水なるが故に、諸佛の本誓加持力の故に、法界宮の中の月輪海會の聖衆影現して、直に内證の三密を説く、故に是を眞言の他受用身所説の教法と名け、金剛一乘と名く、他をして法樂を受けしむる故に、是れ顯の一乗の他受用身所説教法にあらず。亦た顯の一乗は唯是れ自性法身内證の三密金剛なるにあらず、故に金剛一乘と名けざるなり。

(一) 無量 顯密不同ありとは一萬の不同亦五重の不同を示す。(二) 夫れ 自下天台を明す。(三) 隨自隨他 義二ノ二日隨他の佛智を以て廣大の佛境を照す其の源底に到るな隨自意の法と名け、若し九法界の性相芥末を照すこそ總他意の法と名く(四) 異事 六道諸法の異事なり。(五) 一乘 別教一乘。諸教 華嚴判教の小始終頓圓の五教。(六) 妙法 妙法蓮華經は會三歸一なり。華嚴は稱性の本教と云ふ。(七) 金剛一乘 眞言密教を指す。

問ふ、顯の一乗と金剛の一乗と差別云何んぞ。

答ふ、顯密差別は是れ(一) 無量なりと雖も、今大意を以て述べん。(二) 夫れ顯の一乗は無始無終、無近無遠、本來常住、妙覺究竟の如來の智慧と、百界千如三千世間と、及び十方三世の諸佛、隨自隨他の一切教法、一一に皆是れ妙覺究竟の如來の本地法身なる本地内證の理智不二、平等大慧との妙法を以て開顯し、一切衆生をして佛の智見に開示悟入せしむ、是れを開權顯實の妙法一乘と名く。復た無始無終、本來法爾、本有常住の妙覺究竟の如來、性海圓明の法界を以て華嚴一乘の本源と爲す、則ち等覺已還の因分可説の普賢の境界を見ると、及び一切一乘三乘の六道の諸法は、一一皆是れ性海圓明の法界の具德なり、更らに(三) 異事なく果海に證入す、是れを華嚴(四) 一乘の究竟果分性海圓明の法界縁起と云ふ、一切の諸教諸乘一切の因果善惡の諸法と、性海圓明の法界と無二無別なりと顯示するを華嚴一乘と名く。已上の(五) 妙法一乘と華嚴一乘と並びに顯の一乗と云ふなり。

(六) 金剛一乘とは、無始無終本來常住心王の毗盧遮那と、心數の諸尊、數刹塵に過ぐる同一體性の金剛と、同一周遍虚空法界互相圓融無碍にして、帝網垂珠の如く、而して此

(一) 横堅多種の對
 (二) 二教論等の對
 (三) 辯論の對
 (四) 辯論の對
 (五) 辯論の對
 (六) 辯論の對
 (七) 辯論の對
 (八) 辯論の對
 (九) 辯論の對
 (十) 辯論の對
 (十一) 辯論の對
 (十二) 辯論の對
 (十三) 辯論の對
 (十四) 辯論の對
 (十五) 辯論の對
 (十六) 辯論の對
 (十七) 辯論の對
 (十八) 辯論の對
 (十九) 辯論の對
 (二十) 辯論の對

(一) 常同云云
 (二) 常同云云
 (三) 常同云云
 (四) 常同云云
 (五) 常同云云
 (六) 常同云云
 (七) 常同云云
 (八) 常同云云
 (九) 常同云云
 (十) 常同云云
 (十一) 常同云云
 (十二) 常同云云
 (十三) 常同云云
 (十四) 常同云云
 (十五) 常同云云
 (十六) 常同云云
 (十七) 常同云云
 (十八) 常同云云
 (十九) 常同云云
 (二十) 常同云云

の一切の心王心數の諸尊の身口意業、虚空に遍して、如來三密門金剛一乘甚深教を演説したまふ、是れを金剛一乘と名くと云云。

問ふ、顯の一乘と密の一乗との差別猶ほ未だ明了ならず、如何んが之を分別すべきや。答ふ、顯密の一乘(一)横堅多種なり、下の進修門に至て、諸宗の章疏の釋を集めて之れを開示すべし。今且つ鏡像の譬喩を以て、堅に(二)四種の不同を開示すべし。夫れ鏡に無量影像あり、性に本質の衆像あるに由りて、鏡に自ら影像を現するに所現の影像の形色、差別無量なり、唯是れ鏡體にして本質の體に非ず、本質の實跡は是れ縁となると雖も、實體隔碍して鏡中に入らず。當さに知るべし、所現の影像は唯し是れ鏡體なり、已に鏡體と一切影像と不二一體にして鏡外に影なし、影即ち是れ鏡なり。一一の影像形色の差別は、鏡を以て之を見るに、一切の影像皆悉く一味一相なり。一味一相の影像と知るの後、無量の影像形色の體に於て更に異執なし、異執なきが故に常に萬像を見て唯し鏡體のみと悟る。萬像の體各別の迷執なし、鏡影(三)常同常別一異不可得なり。(四)鏡を理智平等の一心に譬へ、影を一心縁起の俗諦恒沙の諸法に喩ふ。因縁所生の一切善惡迷悟染淨の諸法、皆是れ無相第一義諦、一心所現の影像なるを以ての故に、心

(一) 復た次に約す
 (二) 復た次に約す
 (三) 復た次に約す
 (四) 復た次に約す
 (五) 復た次に約す
 (六) 復た次に約す
 (七) 復た次に約す
 (八) 復た次に約す
 (九) 復た次に約す
 (十) 復た次に約す
 (十一) 復た次に約す
 (十二) 復た次に約す
 (十三) 復た次に約す
 (十四) 復た次に約す
 (十五) 復た次に約す
 (十六) 復た次に約す
 (十七) 復た次に約す
 (十八) 復た次に約す
 (十九) 復た次に約す
 (二十) 復た次に約す

(一) 鏡の如く鏡體は
 (二) 鏡の如く鏡體は
 (三) 鏡の如く鏡體は
 (四) 鏡の如く鏡體は
 (五) 鏡の如く鏡體は
 (六) 鏡の如く鏡體は
 (七) 鏡の如く鏡體は
 (八) 鏡の如く鏡體は
 (九) 鏡の如く鏡體は
 (十) 鏡の如く鏡體は
 (十一) 鏡の如く鏡體は
 (十二) 鏡の如く鏡體は
 (十三) 鏡の如く鏡體は
 (十四) 鏡の如く鏡體は
 (十五) 鏡の如く鏡體は
 (十六) 鏡の如く鏡體は
 (十七) 鏡の如く鏡體は
 (十八) 鏡の如く鏡體は
 (十九) 鏡の如く鏡體は
 (二十) 鏡の如く鏡體は

性の不生不滅と、諸法の不生不滅と、心性の不一不異と、諸法の不一不異と、心性の本不生と、諸法の本不生と、根塵識等皆阿字門に同じて、一切皆是れ無相第一義諦なり。是れ三乘終教亦(一)菩薩の所明の一乗の義なり。此の一乗の教理は、十住心の中には是れ覺心不生心なり。亦た是れ中論所明の八不中道是れなり。又た華嚴五教の中の第三の終教と、天台四教の中の別教に明す所の佛性一乘これなり。

(二) 復た次に、鏡體影像異ならざるに非ず、(三)鏡に無邊の影像の性あるが如く、一一の鏡も同じく是れ(四)鏡なる故に、一一の影像皆亦た無邊の影像の性あり。此の鏡の惣體の中に無邊の影像の性を備ふと、一の影像の上に亦た無邊の影性あると同じく増減なし、一一の影像と鏡體と是れ唯だ一なるが故に。無邊の影像皆同じく鏡の體性なるが故に、更に(五)差別の異執なし。(六)一一の影像は鏡の明淨なるが如く、一一皆亦た明淨なり、亦た(七)一一の影像皆同じく明淨なるが故に、一一の影像の衆德、虚空法界に周遍して、相即相入重重無盡なり。また帝網の垂珠の如く重重無盡なり。然れば則ち一切一切即一、また一が中に一切あり、一切が中に一あり、一一の垂珠皆互に圓融し、互に主伴となる。(八)今この影像垂珠圓融不思議の事を、唯だ一鏡の上の縁起の影

(一) 淨心 自性清
 (二) 蓮華三昧 法
 (三) 蓮華三昧 法
 (四) 蓮華三昧 法
 (五) 蓮華三昧 法
 (六) 蓮華三昧 法
 (七) 蓮華三昧 法
 (八) 蓮華三昧 法
 (九) 蓮華三昧 法
 (十) 蓮華三昧 法
 (十一) 蓮華三昧 法
 (十二) 蓮華三昧 法
 (十三) 蓮華三昧 法
 (十四) 蓮華三昧 法
 (十五) 蓮華三昧 法
 (十六) 蓮華三昧 法
 (十七) 蓮華三昧 法
 (十八) 蓮華三昧 法
 (十九) 蓮華三昧 法
 (二十) 蓮華三昧 法
 (二十一) 蓮華三昧 法
 (二十二) 蓮華三昧 法
 (二十三) 蓮華三昧 法
 (二十四) 蓮華三昧 法
 (二十五) 蓮華三昧 法
 (二十六) 蓮華三昧 法
 (二十七) 蓮華三昧 法
 (二十八) 蓮華三昧 法
 (二十九) 蓮華三昧 法
 (三十) 蓮華三昧 法
 (三十一) 蓮華三昧 法
 (三十二) 蓮華三昧 法
 (三十三) 蓮華三昧 法
 (三十四) 蓮華三昧 法
 (三十五) 蓮華三昧 法
 (三十六) 蓮華三昧 法
 (三十七) 蓮華三昧 法
 (三十八) 蓮華三昧 法
 (三十九) 蓮華三昧 法
 (四十) 蓮華三昧 法
 (四十一) 蓮華三昧 法
 (四十二) 蓮華三昧 法
 (四十三) 蓮華三昧 法
 (四十四) 蓮華三昧 法
 (四十五) 蓮華三昧 法
 (四十六) 蓮華三昧 法
 (四十七) 蓮華三昧 法
 (四十八) 蓮華三昧 法
 (四十九) 蓮華三昧 法
 (五十) 蓮華三昧 法
 (五十一) 蓮華三昧 法
 (五十二) 蓮華三昧 法
 (五十三) 蓮華三昧 法
 (五十四) 蓮華三昧 法
 (五十五) 蓮華三昧 法
 (五十六) 蓮華三昧 法
 (五十七) 蓮華三昧 法
 (五十八) 蓮華三昧 法
 (五十九) 蓮華三昧 法
 (六十) 蓮華三昧 法
 (六十一) 蓮華三昧 法
 (六十二) 蓮華三昧 法
 (六十三) 蓮華三昧 法
 (六十四) 蓮華三昧 法
 (六十五) 蓮華三昧 法
 (六十六) 蓮華三昧 法
 (六十七) 蓮華三昧 法
 (六十八) 蓮華三昧 法
 (六十九) 蓮華三昧 法
 (七十) 蓮華三昧 法
 (七十一) 蓮華三昧 法
 (七十二) 蓮華三昧 法
 (七十三) 蓮華三昧 法
 (七十四) 蓮華三昧 法
 (七十五) 蓮華三昧 法
 (七十六) 蓮華三昧 法
 (七十七) 蓮華三昧 法
 (七十八) 蓮華三昧 法
 (七十九) 蓮華三昧 法
 (八十) 蓮華三昧 法
 (八十一) 蓮華三昧 法
 (八十二) 蓮華三昧 法
 (八十三) 蓮華三昧 法
 (八十四) 蓮華三昧 法
 (八十五) 蓮華三昧 法
 (八十六) 蓮華三昧 法
 (八十七) 蓮華三昧 法
 (八十八) 蓮華三昧 法
 (八十九) 蓮華三昧 法
 (九十) 蓮華三昧 法
 (九十一) 蓮華三昧 法
 (九十二) 蓮華三昧 法
 (九十三) 蓮華三昧 法
 (九十四) 蓮華三昧 法
 (九十五) 蓮華三昧 法
 (九十六) 蓮華三昧 法
 (九十七) 蓮華三昧 法
 (九十八) 蓮華三昧 法
 (九十九) 蓮華三昧 法
 (一百) 蓮華三昧 法

像に之を論す。而も此の事事圓融の影像皆悉く唯是れ一なり、實體と鏡と亦た無二無別なり、鏡體を本地寂光性海圓明理智不二一心の體性に譬ふ。緣起圓融の影像の事事を、一心所現の所作の、百界・千如・三千世間・十方三世の諸佛所説の一切諸教、一切の因果緣起の諸法に喩ふ。この一切衆生・一切諸佛との同一本源なる理智不二の一心を、亦是常寂光と名け、亦是性海圓明と名け、亦是中道と名け、亦是實相と名け、亦是法性と名け、亦是法界と名け、亦是佛性と名け、亦是眞如と名け、亦是法身と名け、亦是如來藏と名け、亦是(一)淨心と名け、亦是第一義諦理と名け、亦是第一義空智と名け、亦是實際と名け、亦是淨菩提心と名け、亦是(二)蓮華三昧と名け、亦是阿字門と名け。この一心所現の一切善惡・一切染淨の緣起の諸法、若しは普賢因人の可説の事事圓融、若しは三乘教の單の理事、若しは六道の因果依正、(三)これ等の偏圓五、龜細善惡の事と、本地法身性海圓明の本源と不二なり、一味一相に開顯するを佛乘圓教と名く、是を顯の一乘と名く。是れ一大法身一法界心の所現の緣起影像の諸法の上に圓融を論す、
 一大法身の法、本と法身緣起所現の(四)事迹と不二に開顯する故に、本迹異なれども不思議一なりと云ふ。華嚴に因分可説果分不可説といふ是れ一と異との二義に開示する故に猶し水波の如し之を思ふて見るべし。
 但し天臺・法華宗の(五)釋に云く、根塵相對して一念心起り、根塵識等の諸法、一塵一念

(一) 淨心 自性清
 (二) 蓮華三昧 法
 (三) 蓮華三昧 法
 (四) 蓮華三昧 法
 (五) 蓮華三昧 法
 (六) 蓮華三昧 法
 (七) 蓮華三昧 法
 (八) 蓮華三昧 法
 (九) 蓮華三昧 法
 (十) 蓮華三昧 法
 (十一) 蓮華三昧 法
 (十二) 蓮華三昧 法
 (十三) 蓮華三昧 法
 (十四) 蓮華三昧 法
 (十五) 蓮華三昧 法
 (十六) 蓮華三昧 法
 (十七) 蓮華三昧 法
 (十八) 蓮華三昧 法
 (十九) 蓮華三昧 法
 (二十) 蓮華三昧 法
 (二十一) 蓮華三昧 法
 (二十二) 蓮華三昧 法
 (二十三) 蓮華三昧 法
 (二十四) 蓮華三昧 法
 (二十五) 蓮華三昧 法
 (二十六) 蓮華三昧 法
 (二十七) 蓮華三昧 法
 (二十八) 蓮華三昧 法
 (二十九) 蓮華三昧 法
 (三十) 蓮華三昧 法
 (三十一) 蓮華三昧 法
 (三十二) 蓮華三昧 法
 (三十三) 蓮華三昧 法
 (三十四) 蓮華三昧 法
 (三十五) 蓮華三昧 法
 (三十六) 蓮華三昧 法
 (三十七) 蓮華三昧 法
 (三十八) 蓮華三昧 法
 (三十九) 蓮華三昧 法
 (四十) 蓮華三昧 法
 (四十一) 蓮華三昧 法
 (四十二) 蓮華三昧 法
 (四十三) 蓮華三昧 法
 (四十四) 蓮華三昧 法
 (四十五) 蓮華三昧 法
 (四十六) 蓮華三昧 法
 (四十七) 蓮華三昧 法
 (四十八) 蓮華三昧 法
 (四十九) 蓮華三昧 法
 (五十) 蓮華三昧 法
 (五十一) 蓮華三昧 法
 (五十二) 蓮華三昧 法
 (五十三) 蓮華三昧 法
 (五十四) 蓮華三昧 法
 (五十五) 蓮華三昧 法
 (五十六) 蓮華三昧 法
 (五十七) 蓮華三昧 法
 (五十八) 蓮華三昧 法
 (五十九) 蓮華三昧 法
 (六十) 蓮華三昧 法
 (六十一) 蓮華三昧 法
 (六十二) 蓮華三昧 法
 (六十三) 蓮華三昧 法
 (六十四) 蓮華三昧 法
 (六十五) 蓮華三昧 法
 (六十六) 蓮華三昧 法
 (六十七) 蓮華三昧 法
 (六十八) 蓮華三昧 法
 (六十九) 蓮華三昧 法
 (七十) 蓮華三昧 法
 (七十一) 蓮華三昧 法
 (七十二) 蓮華三昧 法
 (七十三) 蓮華三昧 法
 (七十四) 蓮華三昧 法
 (七十五) 蓮華三昧 法
 (七十六) 蓮華三昧 法
 (七十七) 蓮華三昧 法
 (七十八) 蓮華三昧 法
 (七十九) 蓮華三昧 法
 (八十) 蓮華三昧 法
 (八十一) 蓮華三昧 法
 (八十二) 蓮華三昧 法
 (八十三) 蓮華三昧 法
 (八十四) 蓮華三昧 法
 (八十五) 蓮華三昧 法
 (八十六) 蓮華三昧 法
 (八十七) 蓮華三昧 法
 (八十八) 蓮華三昧 法
 (八十九) 蓮華三昧 法
 (九十) 蓮華三昧 法
 (九十一) 蓮華三昧 法
 (九十二) 蓮華三昧 法
 (九十三) 蓮華三昧 法
 (九十四) 蓮華三昧 法
 (九十五) 蓮華三昧 法
 (九十六) 蓮華三昧 法
 (九十七) 蓮華三昧 法
 (九十八) 蓮華三昧 法
 (九十九) 蓮華三昧 法
 (一百) 蓮華三昧 法

に百界・千如・三千世間の諸法、並びに三世十方の諸佛所説の一切契經海の、所説の橫豎の義理法門、本來具足圓融圓滿頓極頓足するなり。この一念の心は空と言へば法界悉く空なり、假と言へば法界みな假なり、中と言へば法界舉つて中にして、而も不縱不橫不可思議なり。佛の知見の純一實相なるに任せて、圓頓の一心三觀と名く。この三觀一心を、亦た眞如法身中道實相と名く。この中道實相の本地本有妙覺果海の佛の知見を妙法一乘と名く。故にこの妙法一乘の一心三觀の方便修行を以て、此の生に圓教の初住位を證し、乃し十地究竟に至る、但し一生に妙覺に入る義ありと云ふ。今の所説の一心三觀は、圓教の初住位に入らん爲めの入修ニラシユの要門なり、住上地上の功德は今論する所なし、後に當に重ねて釋すべし云云。(一)法華の正意は、一切衆生をして佛の知見に開示悟入せしむるを宗となす云云。一一の釋文下に至りて具さに之を引くべし。
 (二)復た次に、眞如法身性海圓明、不守自性法界緣起所現の影像の諸法に就て、以て十玄緣起六相圓融を明すに約せば、この十玄緣起六相圓融の義理法門、五教十宗逆順自在無自性の旨を、華嚴一乘教分記中卷の義理分齋の内に明す、華一乘と名く。この華嚴經所説の別教一乘は圓融自在の法門なり、これは圓教の(三)初住位より、第十地に至る

(一)三種の三論
天台華嚴の三種
の佛性なり
(二)性海眞言の
智法身に約す六
大不二の本際双
性海なり
(三)眞如法身理
法身に就く十如
輪の旨趣なり
(四)法門顯教は
緣起無盡なるも
心無明の因縁密
教は性徳無盡の
起の故に當相之
れ諸佛通智の境
なり
(五)虚空云云
字義の燈光一に
らざれども冥然
して同體なり合
す

(六)無邊内性心
王心所具の萬徳
則ち性徳輪圓具
足の法なり
謂く智は執金剛を
現じ慈は彌勒を成
し悲は觀音を成す
る等なり

まで因位の菩薩の證知する分齊を明す。故に華嚴教分記の上卷に云く。この乗の一一の釋は下に至りて具さに之を引くべし。この上の(一)三種の一乗は皆金剛一乘に望むれば、猶ほ隨他意の教なる故に、未だ(二)性海圓明(三)眞如法身の内性内證法然具足の心王心數、利塵海會の四種法身無盡莊嚴藏の諸尊三密平等の(四)法門を説かざるなり。復た次に、金剛一乘とは、無始無終本來常住の自性(理)受用(智)淨妙法身摩訶毘盧遮那一大法身の心王如來なり、是れ本來法爾に虚空法界に周遍し、一微塵許も空處あることなし、この心王の體に亦た無盡利塵の心數の萬徳あり。この心數の萬徳亦た心王と同じく、虚空法界に周遍して互ひに相碍へず。譬へば(五)虛室の千光の一一室内に周遍して、互ひに隔碍せざるが如し。この心王心數の一切の萬徳は、一相一味にして同一體性の堅固金剛なり、猶ほ千光の同一體性の如く、一塊にして更に餘あることなし。又この心王心數は、本來法爾に自性・受用・變化・等流の四種法身を成就す、この四種法身は、一一皆同じく虚空法界に周遍して互ひに相ひ碍へず。又虛室の千光の如し、また同一體性なり、また千光の同一體性なる如く一塊の光にして更に餘相なし。今この心王心數は無始無終にして、大日如來廣大法界の加持力を以て一一(六)無邊内性法門の如く、

各各に普門三昧身に住す。

(一)裏書に云く。

普門三昧身とは、(一)大日入佛三昧耶の身、(二)釋迦寶處三昧の身、普賢佛境界莊嚴三昧の身、彌勒大慈三昧の身、觀音普觀三昧の身、金剛手大金剛無勝三昧の身等なり、是の如くの一一の三昧耶身に、皆密印標幟あり、この一一の三昧身は亦は無盡莊嚴藏と名く。

(三)而もこの能加持の心王心數と所加持の三昧普門の身と、能所不二無相第一實際堅固金剛の故に。一一の三昧普門の身、一一の四種法身皆擧げて自性身と名く。即ちこれ自性法身自ら法樂を受用するを自受用身と名く。この自性受用法身の機與すれば則ち生じ、緣謝すれば即ち滅するを(四)變化身の如來金剛の幻と名く、またこれ大日如來の金剛の幻なり。(五)但し佛身を示現して十方一切世界に充滿するのみにあらず、所現の金剛菩薩等の身も、亦た復た一切處に遍するを等流身と名く。(六)今この四種法身は、一大法身に於ける心王心數の一塊の金剛なり、四種と論するが故に、この四種法身を皆自性身と名く、四種皆受身と名く、四種皆變化身と名く、四種皆等流身と名く。(七)

圓譯眞言淨菩提心私記

(一)裏書 此は十
の取意 第十の初め
(二)大日云云 大
日經三昧之れ法界
胎藏三昧第九に具
釋せり 釋迦云云 大
日經普通眞言藏品
疏の第十 眞言藏品
上の經疏云云 同
觀音 金剛 彌勒
同疏にあり 而も
下能所不二を以て
現身皆四身の名を
得 變化身云云
この四身は本開迹
合なれば此に他受
を合す 但し云云 等
流身を明す
(三)今この云云
自下四と云ふも一
さ云ふも自在に得
名するなり
(四)この四種云云
四身皆三時を越て
自受の爲めに説法
するを明す

(二)この金剛云云
金剛の廻轉に約し
す。法門の大意を示

(三)同一云云
に約せば、法に流出
の聖者、法に約せ
ば無量の差別智印
なり。故に斯く云ふ
(四)内證功德
證功德即ち曼茶羅
の普門三昧身の諸
尊なり。
(五)一體の鏡
大心王則ち淨菩提
心の譬喩。
(六)無量 佛々の
自境界は餘人の見
ざる所の曼茶羅の
喩説なり。
(七)唯是れ云云
本質及び浮影を而
て云ふ。

(八)今この心王
と虚空等の同一
性に就て釋す。
(九)諸相 心縁を
言説と名す。この諸
相なり。則ち機上の
局見なり。

の四種法身は皆三時を越へたる日の加持の故に、無始無終に自ら法樂を受くるが故に、一切の諸尊互ひに三密平等の金剛一乘甚深教を説きたまふ。(一)この金剛一乘の大意とは、四種法密と四種曼茶と三密平等として内證法門の無窮無盡の廻轉は、唯是れ無始無終、本來常住淨妙法身、大日如來心王心數(二)同一體性、堅固金剛廻轉にして更に餘なし、故に是れを金剛一乘と名く。この具なる解釋は大日經の疏第一、十住心論の第十なり、文に臨んで委く見るべし。この金剛一乘教所説の法身如來の(三)内證功德曼茶羅の諸尊、(四)一體の鏡に備ふる所の(五)無量の影像の體性は、(六)唯是れ一體の鏡にして更に異體なきが如し。故に禮懺に云く、盡虚空の遍法界の同一體性の金剛界より生ぜる身の一切諸佛なり。また云く、上の金剛界の大曼茶羅の三十七尊の如きは、並びに是れ法佛の現に菩提を證したまへる内眷屬なり毘盧遮那の互體なりといへり。この文の意に云く、一大法身の心王無始無終にして自然本有なり、虚空法界に周遍す、此の心王法界海の中の所現の諸法は、唯是れ心王一法界の體にして更に餘體なし。(七)今この心王の體性は虚空の如く金剛の如し、十方を盡して邊際なし、また(八)諸相を離れて更に其の相を見るべからず。又この心王虚空の性は破壊すべからざること金剛の如し。故

(一)また云云
位經を引て諸三昧
身の自性自作を證
す。

(二)諸尊云云
來大日の自性自作
同一體性の故に大
日と同時の諸尊種
々の身密相を流
現するなり。

に盡虚空遍法界同一體性金剛界と云ふ。この心王の内性に備ふる所の無量無邊の心數は、唯だ是れ心王一法の自作なるが故に、虚空と金剛との義味全く心王に同じ、故に盡虚空遍法界同一體性金剛界生身の一切諸佛と云ひ、また現證菩提内眷屬毘盧遮那互體なりと云ふ。(一)また分別聖位經に云く、佛徳の三十六は皆自性身に同すと。此に皆自性身に同すと云ふは、佛徳の三十六、乃至普門塵數の諸の三昧身は皆是れ心王大日の自性自作なる故に皆自性に同すと云ふ。この皆自性身に同する諸尊の一一の體性は、虚空に等しく十方に周遍し、虚空に同じて諸相を遠離す。その性は然なりと雖ども、心王大日の加持力の故に、心王内性の無邊心數の一一の義理より、心王大日身密相を現する時、心數の(二)諸尊一一皆悉く種種身密相を現す、皆同じく秘密法門の標像を示現して心王の大日を圍遶布列す。これはの一切心王心數の諸尊横豎圓德皆互ひに輪圓具足せり、故に曼茶羅と云ひ亦た皆悉く集會すと云ふ。これはの四種法身と四種曼茶羅と三平等句の法門は、塵數不可説にして廻轉窮りなし。唯だ是れ大日如來の心王心地の堅固金剛の無窮廻轉なる故に金剛一乘と名く、亦た是れを遍一切乘自心成佛教と名く云云。故に聖位經には佛徳三十六は皆自性身に同すと云ひ、禮懺には、同一體性の金剛界よ

(二) また金剛云云此は金剛頂略出經を釋す中に於て今經の釋する所は四卷の經の第一爾時金剛界如來乃至跋折囉薩埵の一段なり(三) 有が翻して遍照王并三藏なり。

(三) 無緣 無は平等緣に義別の義謂く大日の大空智の平に此佛彼佛の差別なし一所依と成つて法界を照す

り生せる身の一切諸佛なりと云ひ、また現に菩提を證したまへる内眷屬なり毘盧遮那の互體なりと。(二) また金剛頂義決に云く、梵に毘盧遮那といふ。此に最高顯廣眼藏如來と翻す、毘とは最高顯なり、盧遮那とは廣眼なり。先に(三) 有が翻して遍照王如來となし、また有が翻じて大日如來と爲す。これ並びに略にして名義闕けたり。又この如來を亦是佛菩薩眼如來と名け、亦是諸佛菩薩母と名け、亦是諸佛菩薩最上廣博清淨藏と名く。所謂る諸佛菩薩之に依りて明かに見るが故に、諸佛菩薩中に於て出生するが故に、一切賢聖中に於て住するが故に。又この大日如來常住して虚空法界に滿ち量微塵に等し、諸佛の身相も一一の身相は皆中邊なく、又増減なし、故に毘盧大經に説て無盡莊嚴藏三昧となす。經に云く、一切如來の身を持し、以て其の體となすと云ふは、第二に顯本なり。釋して曰く、(三) 無緣の智相虚空に遍滿して、一切佛身即ち一佛身なりといへり。

國譯真言淨菩提心私記 終

國譯真言宗即身義章

本草は覺上人人衆教大師の撰なれども古來の例に依り別に掲出せず。

(二) 十六生十六大菩薩の三昧を十六大菩薩の位に生じて正覺を成ずるなり

問ふ、諸經論の中に三大阿僧祇劫に五十二位の行を滿じ、煩惱障・所知障を斷盡して成佛すと説く、今即身成佛の義を立つるに何の證據か有る。答ふ、真言秘密藏の中に如來は明かに説きたまへり。問ふ、何れの經に云何んが説くや。答ふ、金剛頂經に説かく、此三昧を修する者は現に佛菩提を證すと。又云はく若し衆生ありて此教に遇ひて晝夜四時に精進して修すれば現世に歡喜地を證得し、後の(二) 十六生に正覺を成ず。或は云はく、若し衆生有りて此勝義に依りて修すれば、無上覺を成ずることを得。或はまさに知るべし、自身即ち金剛界と爲る、自身金剛と爲りぬれば堅實にして傾壞なし、我れ金剛身と爲る。大日經に云く、此の身を捨てずして神境通を逮得し、大空位に遊歩して身秘密を成すと。龍猛菩薩の菩提心論に曰く、真言法の中にのみ即身成佛するが故に是の三摩地の法を説く、諸教の中に於て闕して書せずと。或は云く、若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證すと、是れ等の教理文證に依りて此義を成立す。問ふ、且らく此の三昧を修する者は等と云ふ文、

(一) 一字頂輪王
發嚙呼(ボロ)の一
字を眞言と爲し金
輪を持せる佛頂尊
王に同じ。一字金輪

(二) 鏡智 大圓鏡
智を云ふ。

即身成佛を證するかいかん。答ふ、此三昧を修すれば現に佛菩提を證すと云ふ、即身成佛なること明けし。問ふ、此三昧を修すとは云何なる三昧ぞや。答ふ、大日尊(一)一字頂輪王の三摩地なり。問ふ、この頂輪の三摩地は如何んが修すれば即身成佛するや。答ふ、大日尊の三字の密言と印とを以て五處を印する時、五智五佛を成す。問ふ、何を印す時何れの智・佛を成するや。答ふ、印を以て心を印する時、(二)鏡智を成じて速をかに菩提心堅固の體を獲。額を印すれば平等智を成じて灌頂地の福聚身を得。口を印する時妙觀察智を成じて佛の智慧身を得。頂を印すれば成所作智を成じて佛の變化身證し、自身を加持すれば法界體性智・毘盧遮那虛空法界身を成すと云ふ。以て即身成佛なることを知る。問ふ、其三字の密言とは何れぞ、答ふ、文の如く之を知るべし。印相は唵僕欠に準知せよ。三昧と密言との義は陀羅釋續記の如し。問ふ、若し衆生ありて此の教に遇ふ等とは何れの文ぞや。答ふ、金剛頂文殊儀軌經の文なり。問ふ、此教に遇ふとは顯密二教の中には何れぞや。答ふ、法佛自内證の三摩地大教王を指す。問ふ、大般若經等に三摩地と説く、今この所説の三摩地と同異如何。答ふ、名同じくして意異なるなり。問ふ、如何が異なるや。答ふ、今説く所の三摩地は法佛の所説なり、般若經

(一) 楞伽經 佛、
大慧菩薩に如來藏
を説きしものなり

に説く所の三摩地は應化佛の所説なり、故に名同じくして意異ると云ふ。問ふ、何を以てか爾か知るや、答ふ、菩提心論に眞言法の中に即身成佛するが故に、是の三摩地の法を説く諸教の中に於て闕して書せず等と云ふを以て爾か知るなり。問ふ、何を以てか爾か云へば三摩地各々異なりと證(一本には證ない)知するや。答ふ、諸教とは他受用身、變化身等の所説の諸の顯教なり、是の三摩地法を説くとは自性法身所説の秘密眞言の三摩地門なり。是れ所謂、金剛頂十萬頌の經等是れなり。問ふ、自性法身とは言語道斷心行所滅、廢詮談旨、一心法界の眞理なり。如何んぞ三摩地法は自性身の所説と云ふや、若しくは明かなる證文ありや。答ふ、(二)楞伽經の第二卷に説かく、またつぎに大慧法佛の説法とは攀縁を離れ能所觀を離れたるが故に、所作の相量の相を離れたるが故に、諸の聲聞・緣覺・外道の境界に非ざるが故にと云ふ。又説かく、大慧法佛の説法とは心相應の體を離れたるが故に、内證聖行の境界なるが故に、大慧是を法佛説法の相と云ふ。阿闍梨耶の曰く、唯法身の佛のみ有りて此の内證智を説きたまふ、具さには二教論に之を説くが如し。また金剛頂五秘密經に説かく、若し顯教に於て修行するものは、久しく三大無數劫を経て然して後に無上菩提を證成す。若し毘盧遮那自受用身所

説の内證自覺聖智の法及び大普賢金剛薩埵他受用身の智に依らば現生に成佛すと云ふ。問ふ、毘盧遮那佛とは理智法身の中には何れの身ぞや。答ふ、瓔珞經に依らば毘盧遮那は是れ理法身なり、盧遮那は則ち智法身なり釋迦をば化身と名づくと云ふ。然らば則ち是の金剛頂經所説の毘盧遮那佛の自受用身所説の内證自覺聖智の法とは是れ則ち理智法身の境なり。具さには二教論に説くが如し。不空三藏の譯する金剛頂瑜伽法門は是れ成佛速疾の路なり、其の修行者は必ず能く頓に凡境を超え彼岸に達すと云ふ。次の文に歡喜とは顯教に言ふ所の初地に非ず自家佛乘の初地なり。後の十六生とは十六菩薩生を指す、所謂る薩王愛喜等なり。問ふ、何が故に初地を歡喜地と云ふや。答ふ、初めて出世の心を修得すれば未だ得ざる所を而かも今始めて得、大事の用に於て爾かも其所願の如く皆成就して極喜樂を生ず、故に初を名づけて歡喜地と爲す。問ふ、云何んが出世の心等と云ふや。答ふ、出世の心得とは即ち二空の智なり、大事の用とは利他なり、菩薩は衆生を利するを以て大事の用と爲す、極喜を生ずるが故に歡喜と云ふ。問ふ、何が故に二空の智を出世の心と云ふや。答ふ、心と相應するを出世の心と名づく。問ふ、其の二空の智とは何ぞ。答ふ、生空智、法空智是れなり。問ふ、二空の智とは如

不空三藏、眞
言宗付法第六、折
羅と云ふ、唐の開
元六年十四歲に
元龜國にて金剛
智三藏に會して
八年に龍智、那
智、三藏、金剛、
南印度に遊、後
教の梵天を携へ
支那に歸り、八
密教の經典を譯
り、密教の經典を譯

何なる觀の所顯の智ぞや。答ふ、且らく初地の菩薩生空法空を觀する智、是を二空の智と云ふ。次に問ふ、若し能くこの勝義に依て修すれば現世に無上覺を成ずることを得るとは、如何なる勝義の行を修すと云ふや。勝義の行とは一切の法を無自性と觀するなり。問ふ、云何んが一切法を無自性と云ふや。答ふ、菩提心論の意は云何んが無自性か、謂く凡夫外道二乘及び次第行の菩薩は皆幻夢陽焰の如し、所以に信樂すべからず、須らく瑜伽勝上の法を修すべし、人は能く凡より佛位に入るものなり、また十地の菩薩の境界を超ゆ云云。問ふ、論文は爾かなり、經の證文ありや。答ふ、大日經に云く、諸法は無相なり、謂く虚空の相なり、この觀を作し已るを勝義の菩提心と名づくと論に云ふ。問ふ、その凡夫二乘等を無自性と云ふ意は何ぞ。答ふ、論に云く、凡夫は名聞利養資生の具に執著して務むるに安身を以てし、諸の外道等は其身命を戀んで或は助くるに藥物を以てして仙宮の住壽を得、幻夢陽焰に同じきなり。二乘の人は聲聞は(一)四諦を執じ、緣覺は(二)十二因縁を執す、四大五陰畢竟磨滅すと知る。定性あるものは發生すべきこと難し、劫限等の滿を待つを要してまさに乃ち發生す。若し不定性の者は劫限を論することなし、緣に遇へば廻心向大す。衆生ありて大乘の心を

四諦、苦、集、滅、道の稱して、
迷悟の因果を明
るものにて、聲
果を得るに觀じ
二の迷の因縁を
廻の迷の因縁を
廻の迷の因縁を
廻の迷の因縁を

發して菩薩の行を行するに、諸の法門に於て遍修せざることなし、また三阿僧祇劫を経て六度萬行を修し然して佛果を證す無自性云ふは眞言行人此れ皆之を厭患すべし。問ふ、眞言行人は何等の修行ぞや。答ふ、眞言行人は一切の法無自性と觀すと云ふ、無餘界の一切衆生を利益し安樂にして、永く外道二乗の境界を超え、瑜伽勝上の法を修して、能く凡夫より佛位に入る者なり、また十地の菩薩の境界を超ゆ云云。問ふ、眞言行人十地の菩薩の境界を超過すとは其の意何ぞ。答ふ、これ所修の行を云ふ。問ふ、若し爾らば所得の果にはあらざるか。解して云く、所得の果には非ず。問ふ、其所修の行とは如何んぞや。答ふ、最初眞言阿闍梨に遇ひ曼荼羅界會に入る、灌頂受法の人の所修の行はこれ佛境界の行なり、十地の菩薩の分際に非ずといふ。問ふ、所修の行にして所得の果に非ずとは如何。論に云く、眞言行人は妙道を欲求し次第を修持して、凡より佛位に入るものなり。即ち此三摩地は能く諸佛の自性に達し諸佛の法身を悟り、(二)法界體性智を證して大毗盧遮那佛の自性身・受用身・變化身・等流身を成すと云ふ。次に又た自身金剛界と爲る、自身金剛と爲りぬれば傾壞なし、我れ金剛身と爲りぬとは金剛とは何物ぞ。答ふ、金剛界とは阿闍梨のたまはく、金剛とは智なり金剛堅固智と云ふが如し、界と

(二)法界體性智
五智の第一、大日如來の總智を云ふ、大日如來の如來が故に法界體性智と名づく、周遍するものが故に法界體性智と名づく、第九卷摩訶羅識なる果徳なり。

は身なり持金剛者の身なり、身は即ち聚集の義なり、言く一身に無量の身を聚集するなりと。堅實とは如來智の堅固不壞なるを云ふ。問ふ、胎藏の金剛と金剛界の金剛と優劣如何ぞ。答ふ、胎藏の金剛は理なり、金剛界の金剛は佛の内證智なり、故に優劣なし。次に達得神境通とは六通の中の一通なり。彼の婆沙論に云く、自所縁に於て無到に了達し妙用無礙にして塞滯する所なし、故に神通と名づくるなり、神は謂く等持、境は謂く行と化なり。所謂る所縁の境界なり。大空位に遊歩して身秘密を成すの文の意は何ぞ。答ふ、法身は大虛に同じて無礙なり衆像を含みて常恒なり故に大空と曰ふ、諸法の依住する所なるが故に位と號するなり、身秘密とは法身の三密は等覺・十地も何んぞ窺ひ見ん、故に身秘密と名づく。問ふ、三密とは何んぞ。答ふ、三密とは一に身密。印契を結びて聖衆を召請するが如きは是れなり。二には語密。密に眞言を誦じて文句をして了了分明ならしめ、謬誤なきが如きなり。三には意密。瑜伽に住して相應して菩提心を觀するが如きなり。問ふ、身密の印契を結ぶを以て何れの部の佛出現するや。餘もまた爾かなり。答ふ、身密加持の故に佛部の佛現じ、口密加持の故に蓮華部の佛現じ、意密加持の故に金剛部の佛現するなり。また釋す、各々三部の佛現するな

り。次に此の生に悉地に入るとは、持明悉地及び法佛悉地を明す。問ふ、云何なるを悉地と云ふや。答ふ、菩提心に住するを成就悉地と云ふなり。問ふ、何なる菩提心に住するを成就悉地と云ふや。解して云く、第十一地にして最正覺を成就す、是くの如くの悉地は諸の悉地の中に最も其上にあり、故に經に云く、彼の悉地は更に過上なしと云云。問ふ、悉地に約するに幾種ありや。答ふ、五種の悉地あり、一には信悉地、二には入悉地、三には五通悉地、四には二乗悉地、五には成佛悉地なり、是を五種の悉地と云ふ。問ふ、云何んが信悉地と云ふや。答ふ、分に隨ひて能く諸根を淨め、深く如來の秘藏を信じて決定して疑慮せざるなり。問ふ、何れの地何れの位を指して信悉地と云ふや。解して云く、地前は是れ信悉地なり、故に大日經疏に曰く、佛に是の如くの方便ありて、若し依行する者は必ず菩提を成す、此は是れ地前の信行なり。問ふ、信行とは是れ地前なりと、地前に約するに資糧・加行の二位あるの中何れぞや。答ふ、これ二位に通ず、何んが然か知るとならば、(一)探玄記に云く、信行地大に二釋あり、一には地前を信行と名づけ、二には地上をも信行と名づく。又(二)地前に約して信行と名づくるに二釋あり、一には外凡の遠位も通じて被る、二にに内凡廻向等の位を名づけ

(一)探玄記 華嚴經探玄記の略名なり。
(二)地前 初地以前の事。

て信行と云ふ。問ふ、何んが故に地前の菩薩の行を信悉地と云ふや。答ふ、地前の菩薩は未だ真如を證せずして但だ信心に依りて智行を起す、故に信行と名くるなり。問ふ、此疏の文に依れば地上も信行者と名づくべし、何が故に大日の疏には但だ地前と云ふや。答ふ、大日の疏の意も地上を信と名づくべし、而も地上は入悉地と云ふ故に、信悉地と名づけざるのみ。問ふ、何ぞ入悉地と云ふや。曰ふ、初歡喜地に入るを入悉地と云ふ。問ふ、何が故に初歡喜を悉地と云ふや。解して云く、此の位初めて無漏の正體智起りて、頓に遍法界の真如の理を證するが故に、悉地とはまた成就の義なり。問ふ、何が故に入悉地と云ふや。答ふ、入の字を解するに二義あり、世第一法の位の終りに初地に入る故に入と云ふ、二には入とは解なり、初めて遍法界の理を證解するが故に入と云ふ。問ふ、誰か遍法界の眞理を證するや。答ふ、初地の菩薩の正體智能く證するのみ。問ふ、正體智のみ眞理を證して後得は眞理を證せざるや。答ふ、後得は眞如の理を證せざる故に辨中邊論に云く、眞縁の義邊は正體智、俗縁の義邊は後得智と云ふ。問ふ、第三の五通悉地とは何ぞや。答ふ、世間の五通の境は猶ほ幻夢水月の如くにして、取著すべからずと了知す、その時に(一)五通仙人の地を度するを第三と

(一)五通仙人 下の本文に出づる五通を得たる仙人。

名くるなり。問ふ、この五通仙人の地は何れの位にして超度するや。答ふ、秘密宗の義は初歡喜地に自ら十心あり。初心より第四心に至りて五通の境界を度することを得と云ふ。問ふ、五通とは何ぞ。答ふ、一には神境智證通。神とは謂く等持、此によりて能く神變の事を爲すが故に、諸の神變の事を説いて名づけて境と爲す。二には天眼智證通。此の眼殊勝なり、故に名づけて天と爲す、遠見無礙なり故に天眼と名づく。三には天耳智證通。天の義は前に同じ、遠聞無礙なり故に天耳と名づく。四には他心智證通。他心を知るが故に他心智と名づく、また心所をも知る、心を以て先と爲す、この故に但だ他心智の名を立つ。五に宿住隨念智證通。諸の過去生の有漏の五蘊を宿住と名づく、隨念の勢力而も能く彼を知る故に隨念と名づく、謂く此の聚の中多法ありと雖も、而も念力増するが故に説いて隨念と名づく。六には漏盡智證通。漏は謂く煩惱、盡は即ち盡滅なり、故に漏盡と名づく。問ふ、云何んが通と云ふや。答ふ、大婆沙論に云く、自所縁に於て無到に了達し、妙用無礙なるが故に通となす、六通の中に於て漏盡を除く、菩薩は未だ煩惱を斷じ盡さず、故に此の五は境に於て擁滯なきが故に、名づけて通と爲す、具さには古仁王經の疏の如し。新經の疏は稍々異れり、之

を勘ふべし。問ふ、云何んが二乗の悉地なるや。答ふ、二乗の境界を觀察して心實際に墮せず、その時に二乗の境界を度することを得、これを二乗の悉地と云ふ。問ふ、何れの處にか聲聞緣覺の境界を度するや。答ふ、初地の十心の中、第五心より第八心に至るまで、聲聞緣覺の境界を度することを得。問ふ、心實際に墮せずとは何をか云ふや。答ふ、實法を執せざるを爾か云ふ、人執を斷するが故に。問ふ、若し第二地に入る時もまた第四心に至りて五通の境界を度し、又第八心に至りて二乗の境界を度し、第十心の中にて成佛するや。答ふ、十地毎に地あり十心あり、華嚴の眞金の喩にて準知すべきのみ。この初地の十心満する時は即ち身佛土の爲にす、但し百心成佛と云ふは、これ寶炬陀維尼經の文なり。問ふ、云何んが第五の成佛悉地なるや。答ふ、第九地より菩提の行道を修し轉た勝進して如來位を成ず、所以に悉地と云ふ。問ふ、十心の中何れの心にして成佛するや。答ふ、第九心より一向に菩薩の修道を行じて、第十心に至るを名づけて成佛と爲す、故に第十を名づけて觀見と爲す。問ふ、何物をか觀見と爲すや。答ふ、觀は謂く諦理を見る、この進修は一向に如來不思議界の秘密の功徳を觀す、所以に悉地なり、具さには疏の第十卷の如し。問ふ、經論の證文は爾

かなり、調度の意は如何。答ふ、是の如くの義を明さんが爲めに、阿闍梨、二頌を作りて曰く。

(一) 六大無礙にして常に瑜伽なり、 (二) 四種曼荼各々離れず、

(三) 三密加持すれば速疾に顯る、 重重帝網なるを即身と名づく。

法然に薩般若を具足して、 心數心王利塵に過ぎたり、

各々五智無際智を具す 圓鏡力の故に實覺智なり。

此の二頌は即身成佛の四字を歎す、即ち是の四字に無邊の義を含せり、一切の諸佛は此の一句を出でず、初の一句は體を明し、次の一句は相を明し、次の句は用を明し、第四の句は無礙を顯す、後の一頌の中に四あり、初に法佛の成佛を擧げ、次に無數を表し、三に輪圓を顯し、後に成佛の所由を出すなり。問ふ、六大とは何ぞや。答ふ、六大とは地大・水大・火大・風大・空大・識大これを六大と云ふ。問ふ、何を以て知りて是れを六大と云ふや。答ふ、大日經に云く、我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過を解脱することを得、因縁を遠離せり、空は虚空に等しと知る、種子眞言に曰く。阿・味・囉・吽・佉・吽。

(一) 六大 地・水・火・風・空・識の稱
(二) 四種 曼荼羅の稱
(三) 三密 身・口・意の稱
(四) 曼荼羅 法・受・茶・羅の稱
(五) 三密 身・口・意の稱

問ふ、この五句の文義六大に配すること如何、種子の字に約するも爾かなり。答ふ、阿字諸法本不生の義とは即ちこれ地大なり。縛字離言説とは水大なり。羅字清淨無垢塵とは火大なり。訶字因業不可得とは風大なり。欠字知空等虚空とは即ち空大なり。我覺とは識大なり。問ふ、五字五句の文を以て五大に相配することは顯然たり、我覺とはこれ識大と言ふ六大の言その意何んぞ。答ふ、我覺とは識大なり因位には識と名づけ果位には智と謂ふ、智即ち覺なり。問ふ、智即ち覺と云ふ意は何ぞや。答ふ、梵音の沒駄胃地は一字の轉なり、沒駄を覺と名づけ、胃地を智と云ふ、故に覺即ち智なり。問ふ、諸經の中の三藐三胃地と沒駄胃地と云ふ同異はいかん、答ふ、皆これ同じ義なり。三藐三胃地とは古くは遍智と翻じ、新には等覺と譯す、覺知の義相渉るが故に、此經に識を號して覺と爲すなり。問ふ、金剛頂經に諸法本より不生なり、自性言説を離れたり、清淨にして垢染なし、因業虚空に等しと云ふ。我覺本不生等と云ふと、若くは同か若しくは異か。答ふ、彼此同なり。問ふ、因位には識と名づけ、果位には智と名づく所以に我覺とは識大なりと云はば、因位には智を具せず果位には識なきや。答ふ、因位に智あり果位にも識あり。問ふ、若し爾らは何ぞ因位には識と名づけ、

果位には智と名づくるや。解して曰く、因位には識の用強く智の用劣なり、果位の智の用勝れ識の用劣なり。故に論に云く、如來の無垢識は大圓鏡智と相應すと云ふ。問ふ、何れの識を轉じて何れの智を成ずるや。答ふ、第八識を轉じて大圓鏡智を成じ、第七識を轉じて平等性智を成じ、第五識を轉じて妙觀察智を成じ、前五識を轉じて成所作智を成ずるなり。問ふ、八識を轉じて四智を成すと云ふ、何んぞ八識を轉じて八智を成ずるや。答ふ、五識を轉ずる時五の成所作智を成すべし、故に八智と云ふのみ但し五智の用等しきが故に一の成所作智と云ふ。問ふ、識智の義は何んぞ。答ふ、識とは了別の義、智とは決斷の義、簡擇の義なり。問ふ、阿味羅阇法とは是れ何んぞ。答ふ、これは五佛の三摩地の言に約して是の如くの説を作す故に、金剛頂經に、諸法本より不生なり、自性言説を離れたり云云。問ふ、且らく阿字とは何の義ぞ。答ふ、阿字に三義あり、所謂る本不生の義、空の義、有の義即ち是れなり。何んが不生の義なるや。答ふ、疏に曰く梵本の阿字の如きは、本初の聲ありこれ因縁の義なり、故に名づけて有の義と爲す。何んが是れ無生の義なるぞ、若し法因縁に依りて生ずれば則ち自性あることなし、この故に空の義と爲す。又不生とはこれ一實の境界即ち中道なりと

(一)一切智 内外一切の法相及び言教に達したる智
(二)道種智 諸佛一切の道法を用ひて衆生の善種を發起增長せしむる菩薩の智慧
(三)一切種智 一切の智を以て一切諸佛の道法に達する智慧

(四)六根の六識の所依となりて六識を起しむる境を認識せしむるもの、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根

云ふ、中道とは自性法身なり。問ふ、何れの證文に依りて此三義を明すや。答ふ、龍樹菩薩の云く、因縁生の法は亦空、亦假、亦中なりと云ふ、以て三義を具することを知るなり。問ふ、阿字不生の義、これ自性法身を詮するは何ぞ。大論に薩般若を明すに三種の名あり、一には(一)一切智は二乗と共に、二には(二)道種智は菩薩と共に、三には(三)一切種智は是れ佛不共の法なり、即ちこれ阿字の義なりと云ふ。此の文を以て見る時は、阿字は是れ智と爲ることあるべし、何んぞ理法身と云ふや。答ふ、阿字本不生義に一切の法を具する故なり。此の三種の智一字に幾所の義を具するや。答ふ、三義を具す、一には塵の義、二には無塵の義、三には波羅蜜の義なり。問ふ、云何んが塵の義等と云ふか。答ふ、塵とは五塵なり、一切の法阿字門に入れば、乃ち不生を成ずるが故にこれ無塵の義なり、究竟して彼岸に到るを以ての故に波羅蜜の義と云ふ。又た羅はこれ六根を淨むる義、(四)六根を淨むるに由るが故に無塵なり。吽字とは因の義なり。問ふ、因の義とは何れの因縁ぞや。答ふ、一切如來の菩提心爲因の義なり。問ふ、この一字に幾所の字義を具するや。答ふ、四種の字義を具す、謂く賀字・阿字・汗字・麼字これなり。又た吽に三義あり即ち如來の三解脱なり、修行して除く。訶字は一切因不可得の故に三解脱にして大

空位に住する義なり、即ち字義に通ずるなり。字相とは因の義なり、欠字とは等虚空不可得の義なり、大空とは遍一切處の義なり。問ふ、五字は五大の種子と云ふ。若し明證ありや。答ふ、大日經第五に云く、我れ即ち心位に同なり、一切處に自在にして普く種種の有情及び非情に遍せり、阿字は第一命なり。縛字を名づけて水と爲す、羅字を名づけて火と爲す、吽字を忿怒と名づけ、佉字は虚空に同じと云ふ。この經文の初の句に、我れ即ち同心位とは、心は即ち識智なることを明し、次の三句は六大の自在の用無礙の徳を表し、後の五句は即ち是れ五大なり。問ふ、金剛頂經に説く諸法本不生等の句を、五字に相配すること如何。答ふ、諸法本不生とは阿字、自性離言説とは縛字、清淨無垢染とは羅字、因業とは訶字、等虚空とは佉字なり。問ふ、諸法本不生とは何んぞ。答ふ、諸法とは心王心數其の數無量なり故に諸と云ふ、心・識名異にして義通せるなり、故に(一)天親等は三界唯心を以て唯識の義を成立するなり。問ふ、諸教には五大を説きて六大を説かざるや。答ふ、大般若及び瓔珞經等に亦た六大の義を説けり。是の如くの六大、能く一切の佛及び一切衆生・器界等の四種法身三種世間を造す。問ふ、その三種世間四種法身とは何ぞや。答ふ、一切の佛とは智正覺世間、一切衆生とは衆生世間、器世界と

(一)天親 世親の

(二)にはの下に
恐らくは受用法身の
四字を脱するか

(三)種恐らくは重
にあらざるか。

は器世間なり。四種法身とは自性法身・受用法身・變化法身・等流法身これなり。問ふ、何をか自性法身と云ふや餘も亦た爾かなり。一には自性法身とは謂く本來成佛常恒不變の故に、法とは軌持軌則の故に名づけて法と云ふ、身とは積聚の義、謂く三密の中に無量の三昧門を積聚するが故に。(二)には恒沙の性功徳を受用するが故にまた應法身と名づく三密相應の故に。(三)には化法身、三密の化用現じて休息有ることなく、乃至自身に印契說法等の相を莊嚴して而かも無盡の化用あるが故に。(四)には等流法身、謂く各別の三昧門に約して自他等流す、仍ち所謂等とは平等、流とは流類なり。問ふ、四種法身を以て(三)種曼荼羅に相配すること如何。答ふ、大日遍照を自性法身と爲すべし、四佛は受用身、十六大菩薩は應化法身、金剛天等は等流法身なり。問ふ、何を以てか六大は四種法身三種世間等を生ずと知るや。答ふ、大日尊は如來發生の偈を説きて曰く、能く隨類形の諸法と法相と 諸佛と聲聞と救世の因縁覺と勤勇の菩薩衆とを生ず及び仁尊もまた然かなり 衆生器世界次第にして成立す 生住等の諸法常恒に是の如く生ずと云ふ。問ふ、此の偈は何の義をか顯現するや。答ふ、六大能く四種法身と曼荼羅と及び三種

世間とを生ずることを明す。問ふ、云何んが然か知るや。答ふ、謂く諸法とは心法、法相とは色法なり。また釋す、諸法とは通名を擧げ、法相とは差別を顯はす、故に下の句に諸佛・聲聞・緣覺・菩薩・衆生・器世界次第して成立すと云ふ。また次に諸法とは法曼陀羅、法相とは三昧耶曼荼羅、諸佛菩薩等とは大曼荼羅なり。また佛菩薩二乗とは智覺世間を表し、衆生とは衆生世間、器世界とは即ち器世間なり。問ふ、六大を能生と爲して一切の佛・菩薩・二乗を生ずと云ひて、如來發生の偈の證文を引く。今勘ふるに大日經の疏に曰く、能く隨類形を生じ諸法と法相と等とは、謂く阿字門に入るが故に即ち是れ平等法身なり、此の無相法身に由るが故に即ち能く緣に隨ひて感應して普く色身を現す、彼の種種の類形に隨ひて、所意見の身を以て爲めに如來の智慧を開示したまふと云ひ乃至此の無生無相の身に由るが故に、一切の諸佛皆是れより生じたまふ、一切の聲聞・緣覺・菩薩の種種の行位、(一)一生補處の位も皆この阿字の理に由りて生ず。一切の有情世間・器世間、種種の差別次第に增長することも、またこの阿字の義によりて生ずと。此の文に由るに顯然として一切諸法を生ずることは阿字なり、云何んぞ六大一切法を生ずる證文と爲るや。答ふ、阿字と六大と所生の法にあらざるが故に爾か云ふに失なし、阿字はこれ唯だ地大、一切法を生ずと云ふも亦た失なし。問ふ、それは能生を云ふ、生に約するに若し種ありや。答ふ、三種あり即ち上中下品生これなり。問ふ、云何なるを上品の生と云ふや、餘もまた爾かなり。答ふ、上品生とは如來の眞法身常住の果體を生じ、中品生とは一切諸佛菩薩二乗を生じ、下品生とは即ち有情及び器世間を生ず、皆またこの法門に依りて成立するを得等と云ふ。問ふ、五字を以つて一體に置く方は何んぞや。答ふ、阿字を膝に置き、縛字は心、羅字は臆、卍字は額、佉字は頂の十字に置く。問ふ、何を以つて知る。答ふ、大日經に曰く、眞言者圓壇を先づ自體に置き、足より臍に至るまで大金剛輪を成じ、此れより心に至るまで水輪に思惟すべし、水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり、最上に虚空輪あり。問ふ、眞言者等とはいかん。答ふ、眞言とは心大なり、長行の中に謂ふ所の聖尊位とは如來内證の徳なり。種子とは法界生の種子なり。法界生とは即ち標幟する者の三昧耶、これ如來の自性身なり、標幟とは能く如來平等智法身を生ず、この故に名づけて三昧耶身と爲す、羯磨身は三身各各に具足す。問ふ、次の文に四界を攝持して心王を安住して虚空に等同なり、廣大の見・非見の果を成就し、一切の聲聞・辟支佛・諸の菩薩の位を生ずと。此の文は何の義を顯すや。答ふ、

(一) 一生補處の位を過ぐれば佛位を補ふべき等覺の位を云ふ。

國譯眞言宗即身義章

六大能く一切の法を生ずることを表すなり。問ふ、何を以てか爾か知るか。答ふ、心王とは識大なり、四界を攝持するとは四大なり、等虚空とは空大なり、この六大は能く見・非見の果を生ずと云ひ、また三乗の果を生ず。問ふ、其の見・非見の果とは何ぞ。答ふ、欲界・色界・無色界なり、即ち是れ所生の法なり、みな六大を以て能生と爲す。この所生の法は上法身に達し、下六道に及ぶまで、麤細隔てあり大小差ありと雖も、然かも六大を出でず、故に佛は六大を説きて法界體性と爲したまふ。難じて曰く、若し爾らば何んぞ顯教の宗に四大等を以て非情の物と爲るや。解して曰く、それ等の教の中には六大の色を三種世間と知らざるが故に、または先づ知る者の且らく若くは祕隱するを表するかなり。今密教に則ちこれを説きて如來の三昧耶身と爲す、四大等心大を離れず、色・心異ると雖も其の性即ち同なり、色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。智即ち境、境即ち理、理即ち智、智即ち理、無礙自在なり。能所の二生ありと雖も都て能所を絶せり、法爾の道理に何の造作かあらん、能所等の名は皆これ密號なり、常途淺略の義を執じて種種の戲論を作すべからず、是の如くの六大法界體性所成の身は、無障無礙にして互相に涉入相應し、常住不變にして同じく實際に住せり、故に六大無礙常瑜伽と

云ふ。問ふ、その無礙等とは何の義ぞや。答ふ、無礙とは涉入自在の義、常とは不動不壞の義、瑜伽とは翻じて相應と云ふ即ち涉入なり、涉入は即の義なり。次に四種曼荼各不離とは何をか云ふや。答ふ、大日經第六卷に云く、一切如來に三種の身あり、いはゆる字・印・形像これなり。問ふ、何物を字と云ふや餘もまた爾かなり。答ふ、字とは法曼荼羅、印とは謂く種種の標幟即ち三昧耶曼荼羅、形とは相好具足の身即ち大曼荼羅なり。この三種の身に各の威儀事業を具する、これを羯磨曼荼羅と名づく。問ふ、その字印形に約するに若し幾所の種ありや。答ふ、字に二種あり、印に約するにまた二種あり。問ふ、其の字の二種とは何等ぞや。答ふ、字の二種とは經に云ふ聲と菩提心とこれなり。問ふ、その聲字と及び菩提心とは何物ぞや。答ふ、これを云ふに多解あり。問ふ、その多解ありとは何ぞや。答ふ、疏に曰く、行者最初に字を修行するに略して四種の觀字あり、一には但だ菩提心を觀ず、この菩提心は即ちこれ字なり、謂く阿迦遮吒等なり。二には字輪を觀ず、心心所持の眞言を輪の形と爲して身に入るなり。三には種子の字を觀ず。四には字を觀せずして但だ聲を念ず、鈴鐸の聲の如くして次第に絶えず出入の息を調ふなり、聲とは即ち字なり。問ふ、印の二種とは何んぞ。

答ふ、經に云く、印の二種とは所謂有形無形なり。問ふ、その有無形とは何んぞや。答ふ、疏に曰く、印形とは青黃赤白乃至方圓三角等の形、所住の處の類なり、印とは所執の證、印即ち刀輪絹索金剛杵等の類なり。問ふ、何が故に是れ有形無形と云ふ。答ふ、初心には先づ晝尊を觀すべし、此に觸れ觀するを名づけて有形と爲す、後には漸く淳純す、加持力を以ての故に自然に本尊現じて心と相應す、別の外縁にあらざる故に無形と云ふ。問ふ、形像とは何ぞや。答ふ、經に曰く、本尊の身にまた二種あり、所謂清淨と非清淨と云ふ。問ふ、その清淨とは何ぞ餘もまた爾かなり。答ふ、疏に曰く、此の有相に由りて清淨處に引入す、有相なるを以て名づけて非淨と爲す、この三摩呬多に等引せらるるに由るが故に、清淨處に住して寂然として無相なるを名づけて清淨と爲す。問ふ、この淨非淨に約して因果の分別如何。答ふ、非淨は因、清淨は果なり、無常の因に由りて常の果に至るなり云云。問ふ、又た二種の尊形二種の事を成就す、有相は有相の悉地を成就し、無相の故に無相の悉地を生ず云云。問ふ、若し金剛頂經の説に依らば四種曼荼羅とは何ぞ。答ふ、一には大曼荼羅。謂く一一の佛菩薩の相好の身なり、亦は大智印と名づく。二には三昧耶曼荼羅。諸の執持する刀劍・輪寶・金剛蓮華等の類なり

または三摩耶智印と名づく。三には法曼荼羅。本尊の種子眞言なり、又た法身の三摩地及び一切契經の文義等皆これなり、または法智印と名づく。四には羯磨曼荼羅。即ち諸佛菩薩等の種種の威儀事業なり、または羯磨智印と名づく。是の如くの四種曼荼羅四智印其の數無量なり、一一の量虛空に同じ、彼は此を離れず、此は彼を離れず、猶し空光の無礙にして逆はざるが如し、故に四種曼荼羅各不離と云ふ、不離は即ち是れ即の義なり。問ふ、曼荼羅とは何の義ぞ。答ふ、漫荼羅とは輪圓の義、また發生の義なり。問ふ、云何んが輪圓の義と云ふ。答ふ、衆徳輪圓周備するを以て仍て曼荼羅と名づく。問ふ、如何んが輪圓周備するや。答ふ、大日如來四佛四菩薩醍醐の果徳、十世界塵數の金剛、密慧の差別智印、大悲萬行の三乘、六道の無量の應身、是の如く等の無量無邊の衆徳を具する故に輪圓周備の義なり、具さに解すること四種曼荼羅の如し。三密加持速疾顯とは、問ふ、三密とは何ぞ。答ふ、一には身密、二には語密、三には心密なり。問ふ、何が故にこの三業を密と云ふや。答ふ、法佛の三密は甚深微細にして等覺十地も見聞すること能はざる故に密といふ。問ふ、加持とは何をか云ふや。答ふ、一一の尊等しく刹塵の三密を具して互相ひに加入し、彼此攝持せり、衆生の三密

もまたまた是の如し、故に三密加持と名づく。問ふ、佛の三密と衆生の三密と互相に
 渉入すること如何。答ふ、吾れ遍法界の身なれば諸佛もまた遍法界の身なり。我が身を
 以て諸佛の身に入れば吾れ諸佛を歸命す、諸佛の身を以て我が身に入れば諸佛吾
 れを攝護したまふ、吾が口業を以て諸佛の口業に入れば、吾れ口業を以て實の如く
 諸佛の功徳を讚歎す、諸佛の口業を以て我が口業に入れば、諸佛說法教授して我れ
 を加持したまふ。我が意業實相の理を以て諸佛の意業實相の理に入れば、吾れ諸佛
 の心及び吾が自心を知る、諸佛の意業實相の理を以て吾が意業實相の理に入れば、
 諸佛は觀照の門を以て我れを開示したまふ、これ三密の入我我入なり。次の文に、若し
 眞言行人ありて此義を觀察し、手に印契を作し、口に眞言を誦し、心三摩地に住すれ
 ば、三密相應して加持するが故に、早く大悉地を得るは眞言行者三密加持の故に現身
 に菩提を成すと云ふ。問ふ、何を以てか三密加持の故に現身成佛すと知るや。答ふ、
 金剛頂經に云く、大日尊の三字の眞言を誦じて、まさに印を以て心を印すれば大圓鏡
 智を成じ、額を印すれば平等性智を成じ、口を印すれば妙觀察智を成じ、頂を印すれ
 ば、成所作智を成じ、自身を加持すれば法界體性智毘盧遮那法身を成す。四佛を成する、具
 とも同なり。

さには前に之を解するが如し。問ふ、其の三字の密言とは何ぞや。答ふ、三字の眞言
 を云ふ、密言とは亦たの名なり。問ふ、何が故に眞言を密言と云ふや。答ふ、眞言者
 の所修の道にして外道二乗の境界にあらず故に密言と云ふ。問ふ、其の密言の體は何
 んぞ。答ふ、陀羅尼纂記の如し勘知せよ。次の文に、法身眞如觀に入りて一緣一相に
 して平等なること猶し虚空の如しとは、問ふ、若しくはこれ正體智これを觀するか、
 若しくは後得智之を觀するか。答ふ、正體智之れを觀す、若しく專注して無間に修
 習すれば、現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫の福智の資糧を集む、衆多の如
 來に加持せらるゝに由るが故に、乃し十地・等覺・妙覺に至りて薩般若を具し、自他平
 等にして一切如來の法身と共なり、同とは是れ菩薩後得智の觀なり。これ即身成佛の
 證文なり。問ふ、十地に約するに幾所の十地ありや。答ふ、諸の聖教を檢するに五種
 の十地あり。問ふ、その五種とは何れぞや。答ふ、乾慧地等の十地、聲聞の十地、緣
 覺の十地、菩薩の十地、如來の十地是れなり。問ふ、その乾慧地等の十地とは何んぞ
 餘もまた爾かなり。答ふ、乾慧等の十地とは一には乾慧地、二には性地、三には八
 人地、四には見地、五には薄地、六には離欲地、七には已辨地、八には辟支佛地、

九には菩薩地、十には如來地なり。問ふ、乾慧地とは何ぞ、餘もまた爾かなり。答ふ、乾慧地とは謂く燔前の位、性地とは謂く燔等の位、八人地とは見道の十五心、見地とは第十六心、薄地とは斯陀舍、離欲地とは阿那舍、已辨地とは無學果なり。菩薩の十地とは、一には此地の菩薩始めて聖に入り二空の理を證し、能く自他を利用して大喜樂を生ず、是の故に極喜地と名づく。二には此地は清淨の戒を具して破戒を棄つ、非戒は行人を染汙す、故に離垢地と名づく。三には此地は自の勝定と及び殊妙の教と四種の總持とに由る、此を以て因と爲して能く三慧を起す、三慧を以て法を照すに顯現なり、之を名づけて光と爲す、定等能く慧光を起す、所以に此の地を發光地と名づく。四には此地は妙慧殊勝にして、能く煩惱を斷すること火の薪を焚くが如くなれば熾慧地と目づく。五には極難勝地、六には現前地、七には遠行地、八には不動地、九には菩薩地、十には法雲地なり、名を釋すること九會章華嚴瑜伽唯識論の如し。問ふ、乾慧等の十地と何の差別あるや。答へて曰く、乾慧等の十地は三乘共行す、今この十地はたゞ菩薩の行なり、この故に差別せり。聲聞の十地とは、一には住三歸行地、二には隨信行地、三には隨法行地、四には善凡夫地、五には學戒地、六には第八人地、七には須

陀洹地、八には斯陀舍地、九には阿那舍地、十には阿羅漢地なり。獨覺の十地とは、一には衆善資地、二には自覺深緣起地、三には聖諦地、四には勝深利智地、五には八聖支道地、六には知法界虛空界衆生地、七には證滅地、八に通性地、九には入微妙地、十には習氣薄地なり。如來の十地とは大乘同性經に云く、一には甚深難知廣明智德地、細の習氣を除き自性を得るが故に。二には清淨身分威嚴不思議明德地、正法輪を轉じて甚深の義を顯す。三には善明月輪寶相海藏地、聲聞戒を説き二乘を顯すが故に。四には精妙金光功德神通智德地、八萬法を説き四聖を伏するが故に。五には火輪威藏明德地、異邪の法を摧き惡行を伏するが故に。六には虛空内清淨無垢炎光開相地、六神通を示し六大通を現す。七には廣勝法界藏明界地、諸の菩薩の爲めに菩提を顯すが故に。八には最勝普覺智海藏能淨無垢徧無礙通地、諸の菩薩の爲めに方便を現するが故に。九には無邊億莊嚴廻向能照明地、諸菩薩の爲めに方便を現するが故に。十には毘盧遮那智海藏地、諸の菩薩の爲めに諸法を説くが故に。なり。今即身章の中に云ふ十地は菩薩の歡喜地等の十地なり。問ふ、この十地に約するに眞見道相見道あり何んぞ爾か云ふや。答ふ、眞見道とは體虛妄を離れ、親しく能く理を證し能く障を斷す故に眞と名づく。又眞とは理なり、見とはこれ智なり、眞を證するの智を眞見道と名づく。問ふて云く、何んが相見道と云ふや。答ふ、相見道とは類似的の義なり、眞見道の後此行解を起して、眞見に有らるゝ功能に安

仁王經 二卷
唐、不空譯。具
には仁王護國般若
波羅蜜多經と云ふ

模倣像して理を證し、及び障を斷すること能はず、眞に類似す故に相見と名づく。修習位とは此位の菩薩更に進みて無分別智を修して、所餘の障を斷ず、故に修習位と名づく、即ち極喜等の十位を修習位と名づく。問ふ、前の眞相二道何を以て體とするや。答ふ、性に尅して體を出さば、根本・後得の無漏の二智を其體性と爲す、後修習位は皆有爲無爲の諸の功德の法を以て自體と爲す。問ふ、何ぞ等覺位と云ふや。答ふ、等とは相似の義なり、此位は所作皆佛果に似たり、故に等覺と名づく、覺とは佛果の勝智なり。問ふ、此位は何を以て體と爲すや。答ふ、等覺位は菩薩の勝智を以て體と爲す。問ふ、妙覺位とは何ぞ。答ふ、妙とは最勝の義なり、二乘所得の菩提涅槃は最勝妙にあらず、唯佛獨り能く所作皆辨じて功德最勝なり、故に妙覺と名づく。問ふ、此妙覺は何を以て體と爲すや。答ふ、佛果の四智を以て體と爲すなり。問ふ、四智とは何ぞや。答ふ、大圓鏡智等なり。問ふ、若し爾らば此の二位は唯だ智を以て體と爲すや。答ふ、且く論すれば智なり、現實には涅槃もまた此の二位の體なり。問ふ、具薩波若とは何ぞや。答ふ、薩波若とは梵語なり、漢語の一切智なり。問ふ、仁王經の薩云若と同異如何。答ふ、少し異なり、即ち疏に云く、薩云若の覺、此に兩説あり、一に云く薩波若一切智と

三賢 十住、
十行、十迴向の菩薩を三賢と云ひ、十地の菩薩を十聖と云ふ。

云ふ、薩云若覺は一切種智なりと云ふ。問ふ、其の一切智等とは何ぞ。答ふ、一切智とは正體智、一切種智とは後得智なり。問ふ、何を以てか知るや。答ふ、良賁帥の疏に曰く、一切智とは即ち證如の智、一切種智とは後得智なりと云ふ。問ふ、何が故に正後二智を一切と云ふや。答ふ、正體智は一切の法の如を證するが故に、後得智は依他の萬法を證するが故に一切と云ふ。問ふ、この薩云若の覺の二諦の相攝何んぞ。答ふ、二諦を立て、一切を攝し盡く相攝す。問ふ、若し然らば何ぞ經に云ふや、世諦と第一義諦との外に超度するを第十一地薩云若の覺と爲し、有に非ず無に非ず湛然清淨に常住不變なりと云ふや。答ふ、三賢を度するが故に世諦を超度し、十地を度するが故に第一義諦を超度すと云ふ、眞諦俗諦を越すと云ふ謂ひにはあらざるなり。次に自他平等にして一切如來の法身と共同すとは意如何。答ふ、我が身は即ち印、語は即ち眞言、心は即ち本尊なり。この三密平等にして法界に通ず、これを自の三平等と名づく、吾が三平等と本尊の三平等と同一縁相なり、是を他の三平等と名づくるなり。只本尊と吾れと三平等同一縁相なるのみにあらず、成未成の一切諸佛の三平等も亦同一縁相なり、これを其の三平等と名づくるなり。次に頓に一大阿僧祇の福智の資糧を集むとは己

身を資益するの糧を名づけて資糧と爲す、菩提に趣かんと欲す。次に若し毘盧遮那佛自受用身所説の内證自覺聖智の法、及び大普賢金剛薩埵他受用身の智に依るとは、此れ則ち理智法身の境なり。瓔珞經に依らば、毘盧遮那はこれ理法身、盧遮那は則ち智法身なり、釋迦を化身と名づくと云ふ。問ふ、其理智法身の所説とは何者ぞ。答ふ、金剛頂分別聖位に、眞言陀羅尼宗とは一切如來秘奥の教、自覺聖智修證の法門なり、またこれ一切如來の海會の壇に入り菩薩の職位を受け、三界を超過し佛の教勅を受くるを三摩地門と云ふ。問ふ、この理智法身何人のために説法したまふや。答ふ、自受用佛は心より無量の菩薩を流出して皆同一性なり、謂く金剛の性なり。是の如くの諸佛菩薩自受法樂の故に、各々自證の三密門を説きたまふ。問ふ、何れの處にして此法を説きたまふや。答ふ、(一)瑜祇經に云く、金剛界遍照如來五智所成の四種法身を以て、本有金剛界金剛心殿の中に於て、自性所成の眷屬の微細法身と説法したまふと云云。この心殿とは法界殿なり、顯教所談の癡詮談旨、言語道斷、心行處滅の境これに同なり。又楞伽經に、大慧法佛の説法とは攀緣を離れ能觀所觀を離れたるが故に、所作の相量の相を離れたるが故に、諸の聲聞緣覺外道の境界にあらざるが故にと云ふと同じきなり、

(二)瑜祇經 具に
は金剛峰樓閣一切
瑜伽瑜祇經と云ふ
此經は兩部不二の
最極深秘經なり。

問ふ、その自覺聖智の經とは何れの經に當るや。答ふ、金剛頂十萬の偈、毘盧遮那十萬の偈の經これなり。問ふ、普賢金剛薩埵他受用身の智とは何ぞや。答ふ、普とは平等・遍滿・一切處の義、賢とは最妙善の義なり。問ふ、普賢に約して若し種ありや。答ふ、二種あり、一には依位の普賢、二には就實の普賢なり。問ふ、此二の中に今云ふ普賢は何れぞや。答ふ、この二の普賢にはあらず、此は大毘盧遮那の大智圓滿大普賢これなり、金剛とは喩への名にして是れ智なり、即ち受用身の智なり。次に普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入して、須臾の頃にまさに無量の三昧無量の陀羅尼を證すべし、問ふ、其三昧に入るとは何ぞ。答ふ、阿字門に入れば一念法界これ毘盧遮那の三昧なり。法蓮花の印に於て一心不亂なるは、これ觀自在の三昧なり、金剛慧の印に於て一心不亂なるはこれ秘密主の三昧なり、乃ち梵釋諸尊各各一法界門に於て自在を得、若し彼の解脫身に於て一心不亂なるは、彼の淨天眼三昧と名づけ、若し大悲藏雲海の中に於て一心不亂なるを普賢三昧と名づけ、また普賢色身三昧と名づく、是の如く等の三昧に入るを證無量三昧と云ふ。次に能く弟子の俱生我執の種子を變易して、身中大阿僧祇所集福德智慧を集得すれば佛家に生在す等と。問ふ、その俱生我執の種子を

(三)得一本に果
 (四)善逝佛十號
 (五)一如來の意は
 十方淨土の體を
 智に約すれば金
 剛界の密淨土と
 云ふ、法身如來の
 三密の金門を以て
 莊嚴するが故に、
 又理に約すれば、
 (胎藏界)蓮華藏世
 國の形蓮華の形に
 が故に、性清淨なる
 (六)四一一本兩に
 作る。
 (二)處一本に易
 に造る。
 (三)方に今以下
 廣釋真言分。
 (三)八萬四千五根
 本煩惱を初として
 五度再數すれば百
 六十心、これを九品
 に約して離分すれ
 は八萬四千の煩惱
 妙成る。花嚴孔目
 (四)殺生、邪淫、偷盜、
 覆藏他罪、隨順被

士に諍ふこと、悦ばしいかな今愚往生を當處に得ること。重ねて秘釋を述ぶる意たゞ
 此に在り、徃古の難處は有執の然らしむるのみ、(三)方に今、此の眞言を釋するに略
 して十門を作す。

擇法權實同趣門。正入秘密眞言門。所獲功德無比門。所作自成密行門。總修一行成多
 門。上品上生現證門。覺知魔事對治門。即身成佛眞行門。所化機人差別門。發起問答
 決疑門。

第一に、擇法權實同趣門とは、若し此の最上秘密不二大乘に入て修行せんと欲するも
 のは、先づ須らく深般若の心を發起すべし。然して後に、當に三密の行を修すべし。
 若し善男善女有て、纔に此の門に入れば、則ち(四)八萬四千の迷軍は、黨を率へて歸伏し、
 一百六十の妄賊は、伴を引いて馳走す。(五)四重八重の群山は、風に隨て飄去し、(六)三障
 五障の衆海は、波に應して消滅せん。茲に由て、流轉生死の業縛は、解脱を刹那に證し
 沈淪苦海の因縁は、破壊を須臾に成す。しかのみならず、五種有爲の妄風は、厭はざ
 るに自滅し、三部無相の覺實は、求めざるに忽ちに得、豈に妙ならざらんや、快から
 ざらんや。是くの如くの深義、何れの經論に依てか此の心の義を説くや、頌に曰く。

重、比丘(以上八
 重)三種禁は比丘
 比丘尼に對する戒
 禁なり。(五)見思、塵沙、
 無明、煩惱障、業
 障、生障、法障、
 所知障。
 (二)自性云云。大
 日如來は萬有諸法
 の自性なるか故に
 自性法身と云ふ。

(三)異生云云。自
 下眞言宗の發刊十
 住心の次第なり。

佛道權實の岐たを簡擇して 劣を捨て勝を取るを勝義と名く、
 法界淺深の區たを分別して 妄執を起すことなきを般若と稱す

(二)自性法身遍照尊 受用變化諸佛陀
 金剛薩埵妙德尊 古佛龍猛菩薩等

是くの如くの變化の佛菩薩の 所説の經論に分別して説きたまへり
 若し頓悟成佛せんと欲するものは 當に此の心に依て修行すべし

問ふ佛道に何等の數有て幾くか權、幾くか實、何れか淺、何れか深なる、頌に曰く。

(三)異生羗羊は惡に耽る基 愚童持齋は善を修する始

嬰童無畏は即ち天乘 唯蘊無我は是れ聲聞

拔業因種は緣覺の城 他緣大乘は法相の家

覺心不生は三論の宗 一道無爲は法華の宮

極無自性は華嚴の教 秘密莊嚴は眞言の法なり

前の九の住心を淺權と名け 後の一の心佛を深實と號す

各の妙覺と稱すれども實の佛に非ず 水中の圓鏡何の實か有らん

顯宗は菩薩人師の説　密藏は四種法身の説なり

顯教は正像末の興廢あり　眞言は常住不變の教なり

顯教は因縁所生の法　密教は法爾自性の法なり

顯教は多名句を以て一を説き　密は一字門に諸義を含む

顯教は他受應化の説　密教は自受法樂の説なり

顯は理一事多の義を説き　密教は俱同俱別の談なり

顯教は纔に字相門を説く　密教は字相字義の理なり

顯は(一)四印を説かず密は説く　顯は(二)五相を説かず密を説く

顯を五智を説かず密は説く　顯は六大は淺く密は深廣なり

顯は三密に暗く密は明明なり　顯は三部に暗く密は能く達す

顯は兩界を闕し密獨り説く　顯は(三)觀成佛の義無し

顯は觀字成佛の門無し　顯は結印成佛の義なし

顯は五百塵點の始を指し　密は本不生の成道を談す

如上の差別を勝義と名く。

(一)四印　(二)五相
法、羯の四種曼荼羅なり。
修、通達菩提心、成菩提心、
心、證菩提心、菩提心、佛
身圓滿、菩提心、佛
念、對讀せよ。
提、觀成佛の義なし。
成佛するを觀して著

(一)一體の義なり一體さは平等
の性なり六大法界
一切法に周遍して
平等無礙なるが故
に一體と云ふ。
大體性三摩地に住
すれば心佛衆生住
等なるが故に速疾
に成ずることを疾
力用あるが故に速
疾と云ふ。
作及 疏に除に

第二に正入秘密眞言門とは、此に三門あり、一には身密修行門、二には語密修行門、

三には意密修行門なり、今且らく密語修行門に就て、亦三門あり、一には誦持門、二

には觀字門、三には解字門なり、誦持門とは、勸ろに其の明を暗誦して文句をして誤

謬せしめざるが故に、觀字門とは明の字字の形相を觀するが故に、鼻端の字(原本)字字

を觀して後夜分に於て菩提を得るが如くなるが故に、解字門とは一一の字門の如實の

義門を解了するが故に、此の解了字義門の中に就て、亦分て二となす、一には略釋各

各字義門、二には總攝法界法身門なり、初めは五輪五智法身門、後は九字九品報身門

なり、且らく法身門とは摩訶毘盧遮那本地法身、一切如來(一)一體速疾力三昧に入て、法

界體性三昧を説いて曰はく、我れ本不生を覺り語言の道を出過し、諸過解脱を得、因

縁を遠離し、知る空は虛空に等しと、又毘盧遮那佛降伏四魔金剛戲三昧に住して、四魔

を降伏し六趣を解脱する満足一切智智金剛の句を説きたまふ、又毘盧遮那佛降伏四魔

降伏し、此の五字は即是れ四魔を降伏する眞言の句なり、初の句は歸命三寶等の義我字

は是れ行の義、本不生なり、傍の二點は是れ淨除の義、能く四魔(二)及び一切の苦を降

伏す廣く釋すること下の如し、地の萬物を生ずるが如く、我字は大地の六度萬行を出

五輪を五部と爲し
五部を五智と爲し
五智を五方と爲す



空輪の二點は肉髻なり



智拳印は金剛界を標し、定印は胎藏界を標す、是れ兩部不二の曼荼羅なり。

(二) 途一本逆に作る。

(三) 不惑くは割れるか。

右五輪の名、又頂輪、面輪、胸輪、腹輪、膝輪と名るは、行者に依て名を立つ、金剛界には身字の一字を以て、變じて五輪を成し、胎藏界には、身字の一字を以て五輪を現す、或は共して身字を以て五輪世界を成す、若し行者に約せば、白淨信心を以て五輪の種子となす、白淨信心とは、淨菩提心なり、是れ則ち、如實知自心なり、豎には十重の淺深を顯はし、横には塵數の廣多を示す、余生國を出し時の如きは、三毒の罪業、羶羊の妄想に任せば、三途八難に墮すべし、實の如く自心の惡業を知て、無明の父母の家を別れしよりこのかた、更に名利の心を捨て、深く無盡莊嚴恒沙の已有を信ず、是れ則ち一重の如實知自心なり、周處が三害を離れ、未生の三途を悔しが如きは、途一本逆に作る。實の如く持齋節食の理を知て、時時八關を受け、倍倍成果を願ふ、然りと雖、紫宸殿は前生の舊所、五欲の妙境は眼前に馱ふ所と、實の如く自心を知る、初禪の高臺は過去の慢所、離生喜樂は久しく受けて新ならずと、實の如く嬰童の自心を知り、漸く火宅の薪を知て、聲緣の室に眠る、實の如く二乗の小滅を知て、生空の理に味著することなし、他緣の廢詮は、性に差別あり、覺心の不生は、獨空慮絶す、實の如く(三)不有病空疾を知て、三大の遠路を出で、芥石の盡んことを期す、法華の本

佛は猶五百の始を指し、華嚴の果佛は、亦不談の説に留る、是れ分の如實知自心にして、未だ滿の如實知自心ならず、五相五智の秘密、智界理界の莊嚴、自覺本初の住心、是を自然覺と名け、又は如實知自心と名く、深義更に問へ、一切衆生の色心の實相は、無始本際より、毘盧遮那の平等智身なり、色とは色蘊、開て五輪となす、心とは識大、合して四蘊と爲る東開記に依らば心とは四蘊合して識大と爲ると云ふべし。是れ則ち、六大法身法界體性智なり、五輪各、衆徳を具す、故に名て輪と爲す、體相廣大なれば、稱して大の名と爲す、五佛は自覺覺他の故に、名て佛と爲す、五智は簡擇決斷の故に、名て智と爲す、色は心に離れざれば五大即ち五智なり、心は色に離れざれば、五智即ち五輪なり、色即是空なれば、萬法即ち五智なり、空即是色なれば、五智即ち萬法なり、色心不二なるが故に、五大即ち五藏、五藏即ち五智なり。

圖に云く。



肝の藏は眼を主る、阿頼耶識、大圓鏡智、寶輪佛、阿闍、藥師、發菩提心、東、木、春、青、肺の藏は鼻を主る、意識、妙觀察智、轉法輪智、無量壽、證菩提



果、西、金、秋、白、心の藏は舌を主る、末那識、平等性智、華開敷、寶生、多寶、行菩提行、南、火、夏、赤、腎の藏は耳を主る、五識、成所作智、不空成就、釋迦、天鼓音、入涅槃理、北、水、冬、黒、

脾の藏は口を主る口一本には身に作る、奄摩羅識、法界體性智、毘盧遮那

佛、具足方便、中央、土用、黃、



已上善無畏三藏の傳、

土、地、鎮星、中央、黃、土公、堅牢地神、水、水、辰星、北方、黒、水天、龍神、江河水神、火、火、熒惑星、南方、赤、火天、火神、金、風、太白星、西方、白、金神、風天、石、木、空、歲星、東方、青、木神、虛空天、空神、

已上不空三藏の傳





阿、自心發菩提、大圓鏡智、寶幢、阿闍、東方、
 吽、即心具萬行、平等性智、華開、寶生、南方、
 吽、見心正等覺、妙觀察智、阿彌陀佛、西方、
 吽、證心大涅槃、成所作智、天鼓、不空、釋迦、北方、
 勢、發起心方便、法界體性智、大毘盧遮那佛、中央、
 密嚴淨土理智不二の五佛五智、金剛界に即して是れ胎藏の五佛五智なり。

阿、發菩提心、大圓鏡智、阿闍、寶幢、
 吽、行菩提行、平等性智、寶生、華開、
 吽、成菩提果、妙觀察智、阿彌陀佛、
 吽、入涅槃理、成所作智、不空、天鼓、釋迦、
 勢、方便具足、法界體性智、大日如來、

金剛界不二摩訶衍の五佛心王、是れ胎藏に即して、即ち是れ金剛界不二の五佛智なり、此の阿字の五輪を知るが如く、餘の字母も亦復是くの如し、各具五智の故に、亦無礙智あり、圓鏡力の故に、實覺智なり、此を自心成佛と名く、若し行者四時の中に於て

間斷せしめず、眠に在ても覺に在りても、觀智離れずして、三摩地に順すれば即身成佛此の生に難きにあらす。

ア	イ	ウ	エ	オ
五寶部	五羯磨部	五虛空部	五佛	行者觀
腎	肺	脾	心	肝

三藏の云く、余金剛智三藏に依て、此の五字を傳へて信を起し、之を修して千日に及ぶ、秋夜の満月に於て忽然として、除蓋障三昧を得、云云茲に因て、弟子此の秘訣を聞くことを得、深く信じ、多年之を修して既に初位の三昧を得たり、有信の禪徒疑惑を生ずることなかれ、若し我が虚言ならば之を修して自ら知れ、唯願くば一生をして空しく過さしむることなかれ、復次に阿字は金剛部阿闍、肝の藏眼識を主る、いはゆる阿字は即ち是れ大日如來の理法身、自性清淨畢竟本不生不可得空なり、大悲地輪の種子、金剛部の曼荼羅なり、若し色法色法破地獄の軌に約せば地は是れ色法なり、五陰の中の識陰の心地を持す、其の種子不淨を施せば、地大識動取して能く愛有を招く。風空

三藏は不空三藏なり。初地所得の三昧なり。即ち心の不生を覺るが故に。大智の光明を以て。無量の法性を照し。煩惱業苦皆悉く清淨に除滅す。障は五陰に除滅す。障は業障、生障、法障、所知障。

は能犯の體、火地は所犯の門なり、水空識の種子を下して子宮の中に住して悉く五藏となる、是の五藏藏軌には陰に作るの中の識陰の心發するが故に地と名く、是れ色法なり、今肝は魂を主る、魂神の氣を東方と方の下軌に及の字あり木精と爲す、青色なり、空は青なり、其の青色は木より生ず、木は水より生ず、肝は青氣及び腎より生ず、其の形蓮華葉の如し、其の中間に團珠を著く、團肉は胸の左に在り、肝出で、眼となる、筋を主る、筋窮て爪となるなり、覺禪師の覺禪師智覺の宗鏡錄二十八に出す云く、肝華は八葉青色にして五色を具すと、オ字は蓮華部阿彌陀佛、肺の藏鼻識を主る、いはゆる、オ字は是れ第十一の轉聲なり、ウ字は是れ第三の轉なり、即ち大日如來の智水、彌陀の大悲、水輪の種子なり、神通自在の法なれば法身と名く、相應相對なれば亦報身と名く、蓮華部の曼荼羅なり、肺の藏は魄を主る、魄神の形體は其れ鼻體の如し、如鼻體、軌には西方金行なり、秋を主る、其の色白色なり、肺鼻の中に自然に風息あり、即是れ風大なり、五陰の中の想陰の心風を持す、想陰の心は識より生ず、識心は過去の二因より生ずる現在の五果なり、謂く無明行より識名色等を生じて妄想展轉して輪轉無際なり、即ち是れ十二因縁なり、肺の藏意識を主る、意識妄想を生ず、妄想の因縁を以て輪轉す、白氣及び肺、

辛き味ひ多く肺に入れば肺を増し肝を損す、若し肺の中に魄神無れば、恐怖癩病し、心肺を害して病を成す、火の金を尅するが如く、心強く肺弱ければ當に肺を心に止むべし、白氣を以て赤氣を攝取すれば肺病則ち差ゆ、白氣とは肺の名字なり、肺華は三葉白色にして半月の形なり、第三の推の左右、一寸五分、是れ所在なり、オ字は寶部寶生尊、心の藏口内を主る、いはゆるオ字は是れ大日如來の智火、寶生の大悲、福德身の曼荼羅、火大の種子なり、一切衆生の無始の間隔無明妄執の塵垢を焚燒して、菩提心の芽種子出生す、即ち是れ如來福德の身、實智の火を以て貪窮の業因を燒いて、福德自在ならしむ、心火は夏を主る、其の色赤し、赤色より火を生ず、火は木より生ず、五陰の中の受陰の心、火を持す、受心は想心より生ず、又心は赤氣及び肝より生ず、心出で、舌となる、血を主る、血窮て乳を爲る、又耳識を主る、鼻喉鼻梁額頤等を轉して、苦き味ひ多く心に入れば心を増し肺を損す、若し心の中に神無れば、多く前後を忘失す、腎心を官して病を成す、水の火を尅するが如く、腎強く心弱ければ、當に心を腎に止むべし、赤氣を以て黒氣を攝取すれば心病則ち差ゆ赤氣とは心の名字なり、心華は赤氣にして氣、宗鏡錄には色に作る三角の形あり、第五の推の正しき、左右一寸五分所在なり、字は羯

磨部不空成就佛、腎胃を主る、いはゆる、腎は軌に依ら字は是れ^カ字の十一の轉聲なり、廣く釋すること餘の如し、三五の摩多に通ず、則ち大日如來常住の壽量釋迦の本地、大悲風大の種子、三解脱門三際不可得の義、羯磨身の事業曼荼羅なり風は則ち想陰の心、五藏六府の海水を持す、肺風鼓動して生死の海と爲る、五藏とは肝、肺、心、脾、腎なり胃とは六府の一名なり、胃は此れ肚、是れ脾の府なり、五藏六府の海水は、皆胃の府に入る、五藏六府流れて皆胃に稟けて、五味各々去流して、其の嘉嘉の下軌に味胃に入るが故に、腎は胃に稟るなり、第十二の推の下兩方各々一寸半に在り、腎は第十四の推の兩方各々一寸半に在り、又臍腰の下の左を腎と名け、右を命門と名く、腎は心腹に敷て、窮寢して水の精を寫すなり、志を主る、北方及び水と爲る、水は冬を主る、其の色黒し、五陰の中の行陰の心水を持す、行心は受心より生ず、受心は想より生ず、腎は黒及肺より生ず、耳を主る、腎出て、骨と爲る、髓を主る、髓窮て耳乳となり、骨窮て齒と爲る、鹹き味多く腎に入れば腎を増し心を損す、若し腎の中に志無れば多く悲哭す、脾腎を害して病を成す、土の水を尅するが如く、脾強く腎弱ければ、當に腎を脾に止むべし、黒氣を以て黃氣を攝取すれば、腎病則ち羞

(一) 又恐くは土の字か。

(二) 五藏のことなり即ち色、受、想、行、識。志、軌の一本に意に作る。

(三) 心、前々に準せは恐くは脾の字か。

(四) 地、水、火、風、空、眼、耳、鼻、舌、身。

(五) 珠、軌に珍に作る。

ゆ、黒氣とは水の名字なり、^カ字は虚空部上方毘盧遮那大日如來脾の藏舌識を主る、いはゆる、^カ字は則ち大日如來の無見頂相五佛頂輪王、大空智處寂滅真如、十方三世の諸佛所證の菩提、最上殊勝の曼荼羅なり、脾の藏は^ラ字真金色なり、黃色は地より木を生じ、木より火を生ず、^ミ五陰の中の識陰の心、地を持す、或は木藏と爲す、木は青し、是れ空なり、脾は黃氣及び心より生じて口を主る、^ミ志と爲す、甘き味ひ多く脾に入れば、脾を増し腎を損す、若し脾の中に意神無ければ多く廻惑して肝脾を害して病を成す、木の土を尅するが如く、肝強く脾弱ければ、當に^ミ心を肝に止むべし、黃氣を以て青氣を攝取すれば、脾病則ち羞ゆなり、黃氣とは脾の名字なり、脾華は一華黃色にして四隅あり、五藏は蓮華の下に向ふが如し、内の五藏外の五行に出で、形體を成す、此れ則ち名色なり、色は即是れ^ミ五大、^カ五根、名は即ち想等の四陰の心なり、色心は即ち是れ六大法身、五智の如來、五大菩薩、五大明王なり、凡そ日・月・五星・十二宮・二十八宿、人の形體を成す、山島大地は^カ字より出生し、河海萬流は^ミ字より出生し、金玉、^ミ珠・寶・日・月・星辰・火珠・光明は^カ字より出生し、五穀萬果、衆華の開敷は^カ字

(一) 我(わが)の心(こころ)の成(なり)の
 五(ご)字(じ)なり。
 (二) 五(ご)結(むす)印(いん)なり。
 (三) 自(みづか)性(じやう)身(み)受(う)用(よう)。
 (四) 身(み)の變(か)化(か)身(み)等(と)流(りゅう)身(み)。
 (五) 身(み)の口(くち)の意(い)の三(さん)業(ごう)。
 (六) 四(よ)聖(せい)は聲(こゑ)聞(き)・緣(縁)覺(かく)・菩(ぼ)薩(ざく)・佛(ぶつ)の聖(せい)者(しや)を言(い)ふ。
 (七) 六(む)凡(ぼん)は地(ぢ)獄(ごく)・餓(が)鬼(き)・畜(ちく)生(じやう)・修(しゆ)羅(ら)・人(にん)間(かん)・天(てん)上(じやう)の六(む)道(だう)の凡(ぼん)夫(ふ)なり。
 (八) 五(ご)趣(すゑ)は地(ぢ)獄(ごく)・餓(が)鬼(き)・畜(ちく)生(じやう)・人(にん)・天(てん)生(じやう)は胎(た)・卵(らん)・濕(しつ)化(か)。
 (九) 種(しゆ)種(しゆ)覺(かく)・死(し)覺(かく)・陰(いん)覺(かく)・天(てん)覺(かく)・極(ごく)・軌(き)に珍(めづ)しに作(つく)る。

に因て結成し、秀香、美人、人畜の長養、顔色滋味端正の相貌、福德富貴は歳字より莊嚴す、我字の意甚深空寂の體にして、之れを取るに取るべからず、之を捨つるに捨つべからず、萬法能生の理母、灌頂本源の智體なり、我字を論するが如く、餘字も亦復是くの如し、凡そ毘盧遮那經、及び金剛頂經に簡要を採集するに深妙最上殊勝の福田、甚深難解功德の本體なり、應化所說の大乗小乘、一切の經典は唯五字に在り、若し一遍を誦すれば獲る所の功德比量すべからず、不可思議なり、乃至息災、増益、調伏、敬愛、鈎召の衆德、みな悉く成就す、(一)五字の眞言は諸佛の通呪、(二)五印は菩薩の總印なり、之れを修する行者、是くの如く當に知るべし、永く災難を止て諸病生せず、五佛の髻珠、五智の深底、十方如來の利生の理母、三世賢聖の能護の智父なり、加之、六四大曼の總體、(三)四身、(四)三密の別相、(五)四聖六凡の所歸、(六)五趣四生の實相にして、(七)四魔を降伏し、(八)六趣を解脱す、我字は金剛の地、金剛の座處を觀じ、我字は金剛の水、心蓮華臺を觀じ、我字は金剛の火大、日輪觀を成じ、我字は金剛の慧風、月輪觀を作し、我字は金剛の定空、大空觀を造し、大空位に遊歩して身秘密を成す、是れ則ち無生甘露の極漿、醍醐佛性の妙藥なり、一字五藏の中に入れば萬病萬惱即ち不生を得、故に、(一)大師の釋の中に、一字入藏萬病不生と云へり、若し日月輪を觀すれば、凡夫即ち成佛す、復次に凡人の汗栗駄心は形、猶し合蓮華の如し、節脈あり、八に分る、是れ八葉の心蓮華、八分の肉團是れなり、此の心蓮華に於て觀して開敷八葉の白蓮華と作る、臺上に我字を觀して金剛の色に作せ、是れ則ち、方便其足究竟心王大日如來、法界體性智、常寂滅相本地法身、華臺の總體にして、邊業を超へて方に心言の境に非ず、唯し佛と佛とのみ乃し能く之れを知り玉へり、此の方便を以て大空に同して衆像を現す、中臺の心は空にして一切の色を具し、無相法身にして色相を現す、即ち是れ加持十方世界の曼荼羅普門の海會なり、所として至らざるなく、遍く法界に應ず、皆是れ大日如來一體の色身なり、衆德を具足するが故に佛陀なり、佛陀はみな是れ大日薩埵なり、薩埵は悉くこれ毘盧なり、(二)天羅鬼神も是れ法身の相なり、故に知ぬ、五字は諸佛の總呪なり、若し衆生有て此の教法を傳へて、當に供養を至すべきこと猶し(三)制底の如くすれば、應供の德を備ふ、何に況んや、信修をや、是れ人中の芬荼利華、是れ法身の舍利なり、毘盧の四身を積集す、即ち是れ自性清淨諸佛の五智に等同なり、我性の九識は、依正不二にして相性同如なり、眞言の(四)大我は、

(一) 弘法大師の、
 となり。

(二) 諸佛顯現の道
 場。

(三) 阿修羅。

(四) 塔のことなり
 (五) 蓮華のことなり
 (六) 佛骨のこと
 (七) 大日如來のことなり

生を得、故に、(一)大師の釋の中に、一字入藏萬病不生と云へり、若し日月輪を觀すれば、凡夫即ち成佛す、復次に凡人の汗栗駄心は形、猶し合蓮華の如し、節脈あり、八に分る、是れ八葉の心蓮華、八分の肉團是れなり、此の心蓮華に於て觀して開敷八葉の白蓮華と作る、臺上に我字を觀して金剛の色に作せ、是れ則ち、方便其足究竟心王大日如來、法界體性智、常寂滅相本地法身、華臺の總體にして、邊業を超へて方に心言の境に非ず、唯し佛と佛とのみ乃し能く之れを知り玉へり、此の方便を以て大空に同して衆像を現す、中臺の心は空にして一切の色を具し、無相法身にして色相を現す、即ち是れ加持十方世界の曼荼羅普門の海會なり、所として至らざるなく、遍く法界に應ず、皆是れ大日如來一體の色身なり、衆德を具足するが故に佛陀なり、佛陀はみな是れ大日薩埵なり、薩埵は悉くこれ毘盧なり、(二)天羅鬼神も是れ法身の相なり、故に知ぬ、五字は諸佛の總呪なり、若し衆生有て此の教法を傳へて、當に供養を至すべきこと猶し(三)制底の如くすれば、應供の德を備ふ、何に況んや、信修をや、是れ人中の芬荼利華、是れ法身の舍利なり、毘盧の四身を積集す、即ち是れ自性清淨諸佛の五智に等同なり、我性の九識は、依正不二にして相性同如なり、眞言の(四)大我は、

(一) 自心即ち金胎
 (二) 兩部の曼荼羅なり
 (三) 金剛界の五部
 即ち佛部、金剛部、寶部、羯磨部、蓮華部
 (四) 胎藏界の三部即ち佛部、金剛部、蓮華部
 (五) 曼荼羅を分ちて金剛界は五部とし胎藏界は三部とす

(一) 自身法界滿徳
 圓滿の毘盧遮那佛
 身と成ること
 (二) 邪淫・偷盜・殺生・妄語の四重罪
 (三) 四重の外に、摩訶・八事成重・覆藏他罪・隨順被擧比丘の四重罪を加ふ
 (四) 父を殺し、母を殺し、佛より血を出し、和合僧を破る等の罪
 (五) 地獄

三密平等にして大虚空の如し、法界を宮と爲れば處る所の道場密嚴に非ること無し、六大本尊なれば、衆生即是れ本尊に非ること無し、本尊行者本來平等なれば我れ本初を覺す、我は是れ古佛なり、智界理界は(一)我が心の曼荼、(二)五部三部は即ち是れ我が身なり、能く五大に迷へば三界の城を作して、五藏五行生死に流轉す、我字を迷本として苦を受ること無窮なり、能く五大を悟れば四曼の相を造して、五佛五智涅槃を證得す、即ち是れ本初なり、萬法總歸して一の我字に入りぬれば、地獄、天堂、佛性、剛提・煩惱・菩提・生死・涅槃・邊邪・中正・空・有・偏・圓・二乘・一乘・苦樂の相・皆是れ六大業影果報なり、既に是れ六大の所作を因と爲す、還て六大の所受を以て果と爲す、實智に由るが故に能く六大を悟る、五智、四身、四曼、三密善心を薰修して能く顯はし、能く證して、(一)無盡莊嚴大曼荼羅を成す、妄執に由るが故に能く五趣に迷ふ、生死・煩惱・(二)四重・(三)八重・(四)五逆・謗罪・惡心を薰習して、能く受け、能く悲んで、大苦果大(五)那洛迦を感ず、迷悟己れにあり執無くして到る、餘字も亦然なり、いはゆる(六)我字我是は金剛界に約して、又五藏を明す、即ち肝・心・脾・肺・腎・なり。肝の藏は色青し木を主る、我字を以て本覺となす、我字を以て能破となす、何となれば我字は是れ木

(一) 煩惱障・業障
 生障・法障所知障
 の五障にして行者
 佛道修證の障礙た
 るなり
 (二) 根本煩惱細分
 して百六十心とな
 る

行、即ち肝の藏の種子なり、我字は是れ金行、肺の藏の種子なり、金は能く木を尅するが故に、肺も亦肝を尅す、故に知ぬ、我字を以て能破と爲す、我字を以て所破となすなり、行者當に我字の字義を觀すべし、白色の觀を作して、即ち本不生の理を思惟すれば、金變して智劍と爲て我字の字相の無明妄想所生の(一)五障(二)百六十心等の三重の青色妄執の本性を截破し、都て盡して更に我字の字義の本不生の五智、金剛の大菩提心の木沙羅樹王に生長す。其の色漸々に増長して、大圓鏡智阿閼如來と爲て、即ち金剛菩提心の三摩地門を見現せしむ、心の藏は色赤し、火を主る、我字を以て本覺と爲す、我字を以て能破となす、何となれば、水性は火を尅すれば、賢も亦心を尅す、然れば即ち、我字の字義を以て我字の字相を破す、是の故に本不生の五智黑色の水を以て、無明妄想所起の五障百六十心等の三重の赤色妄執の火を沃滅して、更に我字の本不生の五智福德聚の金剛赤色の火を出生して、漸々に増長し、智火熾燃にして、平等性智寶生如來と爲て、即ち福德金剛三摩地門を見現せしむ、肺の藏は色白し、金を主る、即ち我字を以て其の本覺となす、我字を以て能破となす、何となれば火性は金を尅すれば心も亦肺を尅す、我字の字義を以て我字の字相を破す、是の故に本不生の

(二) 清淨水なり八種の功德あり。

五智金剛の赤色の火を以て、無明妄想所起の五障百六十心等の三重の白色妄想の荒金を焼鍊して、變じて本不生の五智、金剛の慧眞實の白色の金と爲て、漸々に増長し、成就して妙觀察智無量壽如來智慧金剛三摩地門と爲る、腎の藏は色黒し、水を主る、癸字を以て本覺と爲す、癸字を以て能破と爲す、何となれば土性は水を尅すれば、脾も亦腎を尅す、癸字の字義を以て、癸字の字相を破す、是の故に、本不生の五智金剛不壞黄色の地を以て、無明妄想所起の五障百六十心等の三重の黒色の水を埋む、更に本不生の五智金剛の黒色の(一)八功德水を涌流して、漸々に溢盈して、成所作智不空成就如來の羯磨金剛三摩地門を出生す、脾の藏は色黄なり、土を主る、癸字を以て本覺と爲す、癸字を以て能破と爲す、何となれば木性は土を尅すれば、肝は脾を尅す、癸字の字義を以て、癸字の字相を破す、是の故に本不生の五智金剛の木を以て無明妄想所起の五障百六十心等の三重の黄色妄想の土を破壊して、更に癸字本不生の五智金剛不壞那羅延黄色の本覺の土を出生して、漸漸に増長して、法界體性智毘盧遮那如來を成す、此れ即ち法界六大金剛三摩地門なり、若し念誦する時は、若し金剛界ならば身金剛波羅蜜定に入て、彼の尊と爲る、此れ即ち化身の體なり、若し胎藏ならば身文殊

定に入れ、謂く本尊を化身となすなり、自他冥會す、是れ不壞の法身なり、膺は果位には名て降三世と爲す、大腸は果位には名て軍荼利と爲す、膀胱は果位には名て烟鬘徳迦と爲す、小腸は果位には名て金剛夜叉と爲す、胃は果位には名て不動と爲す、三臑は果位には名けて普賢と爲す、嵯峨天王の仰に云く、眞言宗の即身成佛其の證何くんか、謹惶して弟子五藏の三摩地觀に入る、忽然として出家の頭上に於て五佛の寶冠を現じ、肉身の五體に於て五色の光明を放つ、その時に當て、一人席を起ち、萬民禮を作す、諸宗旗を靡かし、皇后衣を送る故に、五藏の三摩地は秘が中の秘、不起于座三摩地現前之説、唯彌仰信すべきのみ。

五藏神形。

一字入藏萬病不生、即身成佛の頌に曰く。
若凡若聖、得灌頂者、手結塔印、口誦大明、觀我大日、無疑惑者、現在生中、頓斷無明、及五逆罪、四小八重、七逆越誓、謗方等經、一闍提等、無量軍罪、皆悉斷滅、無有少罪、即身成佛、永離生死、常利衆生、無有間斷、十方如來、同人三昧、三世諸佛、自受法樂、自在神力、見聞秘密、舉手動足、皆是密印、開口發聲、悉是

一説には脾は口、心は舌なり。此の圖は天台の止觀に依る。



(二) 鑊 鑊は鑊鑊上人即ち興教大師なり。(三) 阿闍梨職位を受くる儀式。

(三) 法報應の三身

(四) 六神通力の隨

已上の頌は(二)鑊が(三)灌頂の時傳ふる所なり、此の頌他人の傳ふる所と頗る文義相違す、仍て之れを寫さず、此の頌は肺の一藏の處なり、餘も亦再なり。已上五輪具足即身門畢る。

次に九字九品往生門、此の門の中に二あり、一には句義門、二には字義門なり、初に句義門とは、いはゆる(一)三身の義、二には歸命頂禮の義、三には廣大供養の義なり、廣字に三義あり、一には(二)三身の義、二には歸命頂禮の義、三には廣大供養の義なり、廣は守護經の如し、次の三字は甘露の義、十甘露の釋の如し、次の二字は六義あり、一には大威徳の義六臂の威徳を具するが故に、二には大威光の義、遍照光明を具するが故に、三には大威神の義、神境通を具するが故に、四には大威力の義、六大の威力を具するが故に、五には大威猛の義、速滅怨家の徳を具するが故に、六には大威怒の義、

願なり。彌陀の四十八

怒入地の菩薩の徳を具するが故に、次の二字は又六義あり、一には作佛の義、是の心作佛して久來始覺の如くなることを得るが故に、二には作業の義、來迎引接間斷なきが故に、三には作用の義、神力自在あるが故に、四には作念の義、十念の衆生を迎ふるが故に、五には作定の義、妙觀察智の三摩地定に入るが故に、六には作願の義、六八の大願を發するが故に、最後の一字は四字合義す、アカウツなり、摧破の義、佛法の怨家を破するが故に、能生の義、能く無量の眞如を生ずるが故に、恐怖の義、天魔外道を恐れしむるが故に、ツヤ字義の釋具なり、之れを用ゆべし、ツヤ字は前の如し、又一百の義は經の如し、且く三諦の義に就て、略して十種あり中に於て有諦に一重の諦を出さば、頌に曰く。

緣起の三諦即空諦	緣起の三諦即假諦
緣起の三諦即中諦	無量の一心即空諦
無量の一心即有諦	無量の一心即中諦
法界の三密不生諦	法界の三密本有諦
法界の三密即中諦	法界の三密曼荼諦

(一)眼・耳・鼻・舌・身・意。
(二)六識に第七末那識第八阿賴耶識の二識を加ふ。
(三)八識に第九庵摩羅識を加ふ。
(四)九識に一一識心を加ふ。
(五)法恐らくは性の字ならむ。

是くの如きは顯教の中には、猶未だ其の一義をも知らず、何に況んや、具足して十諦の深義を知らんや、前の三諦は顯教所立の三諦の上に於て、不思議の三諦の妙觀を作す、即ち是れ遮情の三諦なり、次の三諦は密教の淺略門の中に於て、且く一心に約して、不思議の三諦無量の名言を成立す、前の諸教は若は三乗若は一乗、皆悉く未だ一心の位に無量の數量あることを知らず、或は(一)六識を知り、或は(二)八識を知り、或は(三)九識を知る、或は(四)十識を知る、第二の三諦の中に無量の三諦を置くのみ、第三の三諦は直に事々理々に約して廣く三諦の理を談ず、第三の三諦の中に事理法界を攝して説く、猶是れ諸法を攝すべし、未だ事々秘密自(五)法不動の諸法ならざるが故に、(六)今は直に本來平等にして能所あることなき自性不生の離一離多の法佛の三密に約して三諦の名義を建立す、第四の一諦は本有法界體性智自性法身に約す、不二大乘の曼荼羅、深密の體相用の上の妙諦の義なり、次に三字は一切諸法損減不可得なるが故に、六義を以ての故に、諸法損減と名く、いはゆる、苦空無常無我の故に、四相遷變の故に、不得自在の故に、不住自性の故に、因緣所生の故に、相觀待の故に、今此の三字の實義是くの如く、是くの如し、當に知るべし、一切諸法本來常樂我淨なれ

(一) 異生 祇平心
最重持齋心 嬰童
無長心 唯種無我
心 拔業因種心 他
緣大乘心 覺心不
生心 一道無為心
(二) 一本には外道
に作る。

ば、一如不動にして罣礙あることなく、自性に安住して無來無去なり、因縁を遠離して本來不生なり、性虚空に同なるが故に同一性なり、故に經に云く、**三**字は報身の義なり、復次に九種の損滅あり、いはゆる前の(一)九種の住心は、未だ無邊の三密無盡の數量を知らず、故に後の**四**字は一切諸法吾我不可得の義なり、謂く我とは自在の義、二種の主宰の義なり、自我は已れなり、吾我は一切の凡夫なり、此の(三)外二乗、三乗、同教一乘、別教一乘等、皆此の吾我の執有て、みな自乗を計して究竟自在の果佛の如くすれども、眞言門に於ては初心と爲るが故に、復次に、一切諸法本來平等不二智の境界は能生に非ず、所生に非ず、能遍にして所破に非ず、唯是れ三密の一心なるが故に、既に二相無し、何ぞ吾我有らむ、我とは他に對するが故に、他相を離るゝが故に我も亦不可得なり、又**五**字は化身の義なり、第三の**五**字門は此の字二合なり、謂く**四**字に**一**字を加ふ、染不可得の義なり、或は神通不可得の字之れを書き、**五**字は化身の義なり、神通變化の義、化身の義に近きが故に、此の義を以て勝と爲す、又**一**字は是れ一切諸法本性清淨にして染淨を遠離する義なり、又三昧の義なり、妙觀察智蓮華三昧なり、第四の**イ**字門は一切諸法如不可得の故に、中論に云く、涅槃の實際と、世

間の際と、是くの如くの二際は毫釐の差別なし、差別なきを以ての故に、一切諸法怨對なし、怨對なきが故に、執持なし、執持なきが故に、亦如如解脱無し、第五の**ア**字門は加ふる所の**ア**字は、是れ則ち求不可得の字なり、彼の頌に曰ふが如し、同一を如と名く、多の故に如如なり、理々無數、智々無邊なり、恒沙も喩に非ず、刹塵も猶少し、雨足多しと雖並に是れ一水なり、燈光一に非れども冥然として同體なり、色心無量にして實相無邊なり、心王心數主伴無盡なり、相互に涉入して帝珠錠光の如し、重々難思にして各々五智を具す多にして不異、不異にして多なり、故に一如と名く、一は一に非らずして一なり、無數を一となす、如は如に非ずして常なり、同同相似せり、此の理を説かざるは即ち是れ隨轉なり、無盡の寶藏之れに因て耗竭し、無量の寶車此に於て消盡す、之れを損滅と謂ふ、地墨の四身、山毫の三密、本より自ら圓滿して、凝然として不變なり、求不可得の義とは頌に曰く。

(一) 六道 四生前
に出す。

(一) 六道四生の諸の衆生は 本來無盡の徳を具足せり。
行住坐臥皆な密印 麤細の言語悉く眞言なり
若は悟若は迷是れ般若 或は沈或は動即ち三昧なり

萬徳己に我に具して遠からず 何を以てか更に他處に求めん

第六の^カ字門は^カに亦^カ點の畫を加ふるなり、^カ字とは一切諸法諦不可得の故に、^カとは梵に薩^サ踰^ユ也と云ふ、此に翻して諦となす、諦は謂く諸法の真相の如く、知て不倒不謬なり、日は冷かならしむべく月は熱からしむべくも佛の説き玉ふ若諦は異ならしむべからず、集は眞に是れ因なり、更に異の因なし、因滅すれば則果滅す、滅苦の道は即ち是れ眞の道なり、更に餘の道無しと説くが如し、復次に涅槃に云く、苦を苦なしと解す、是の故に苦無くして眞諦あり、餘の三も亦爾なり、乃至四諦を分別するに、無量の相及び一實諦あり、聖行品の中に之れを説くが如し、是れを字門の相と爲す、然も一切の法は本不生なり、乃至畢竟無相なるが故に、語言斷道の故に、本性寂靜の故に、自性鈍の故に、當に知るべし、見も無く、斷も無く、證も無く、修も無し、是くの如くの見斷證修は、悉く是れ不思議法界なり、亦空、亦假、亦中なり、實にあらず、妄にあらず、定相として示すべきなし。故に諦不可得とは云ふなり、點畫は上の如し。第七の^カ字門は一切諸法因不可得の故に、梵に係^{けい}縛^{ばく}と云ふ、即ち是れ因の義なり、若し^カ字門を見れば即ち一切の諸法は因縁より生ぜざることなし、是を字相

(二) 因縁の二字第七の疏に依に作る

(三) 本(カ)、(カ)是の如き所は本不生際なり。

(三) 眼・耳・鼻・舌・身・意の六識。(四) 色・聲・香・味・觸・法の六境。

と爲す、諸法は展轉して因を待て成するを以て故に、當に知るべし、最後は(二)因縁無きが故に、無住を説いて諸法の本と爲す、然る所以は、中論に説くが如し、種々の門を以て諸法の因縁を觀するに悉く不生なるが故に、當に知るべし萬法は唯心なり、唯心の實相は即是れ一切種智なり、即ち是れ諸佛の法界なり、法界は即ち是れ諸法の體なり、因と爲ることを得べからず、以て之れを知るに、因も是れ法界、縁も是れ法界因縁所生の法も亦是れ法界なり、前に説く^カ字門は、(三)本より末に歸して、畢竟して是くの如くの處に到る、今亦^カ字門は亦末より本に歸して、畢竟して是くの如くの處に到る、一本^カ字^カの如く、從末歸本、歸本從末云ふ、此の本は^カ字義に同じ。^カ字は本より不生なれども一切の法を生ず、今も亦^カ字無因を以て諸法の因となす、始終同歸す、則ち中間の旨趣皆悉く知ぬべし、第八の^カ字門は一切の諸法は一切の塵染を離るゝが故に、梵に羅^ら逝^しと云ふ、是れ塵染の義なり、塵は是れ妄情所行の處なり、故に眼等の(三)六情、色等の(四)六塵を行すと説く、若し^カ字門を見れば即ち一切の見聞觸知すべき法は皆是れ塵相なりと知る、猶し淨衣の塵垢の爲に染せらるるが如く、亦遊塵紛動して太虚を昏濁し日月を明かならざらしむるが如し、是を字相となす、中論に見法を諦求するに見者あることなし、若し見者

無くんば誰か能く見法を用て外色を分別せん、見と、可見と、(二) 不可見見法と、無なるが故に、識觸受愛の四法も皆無なり、愛無きを以ての故に、十二因縁の分も亦無なり、是の故に眼に色を見る時、即ち是れ涅槃の相なり、餘も例するに亦爾なり、復次に一切の諸法は悉く是れ毘盧遮那の淨法界なり、豈如來の六根を染汚せんや、蒼掘摩羅經に云く、佛は常眼具足して滅無きを以て明かに常色を見たまふ、乃至意法も亦是くの如し等、是れ^フ字門の眞實の義なり、第九の^フ字門は三身の義を具す、極略して之れを説かば^カは是れ字體報身なり、中に^カの聲あり、是れ法身、^フは是れ應身、^カは是れ化身なり、法身に之れを攝するに略して四種あり、一には自性身、二には受用身、三には變化身、四には等流身あり、是の四種身共に法身と名くることは何の由ぞ、頌に曰はく。

六大は普ねく諸の凡聖に逼して 平等に成立して増減なし

一心は法身自性の佛 一體は報身受用身

一相は變化化身の佛 一用は平等等流身なり

能化の義に約すれば四種身 所化の邊に就かば六凡夫なり

能化の三密は所化に具し 所化の四曼は能化に涉る

一一互融して輪圓足せり 三三平等にして即ち成佛す

三密の金剛法界に逼して 佛界非佛界を簡ばず

五秘の瑜伽心宮に住して 密嚴非密嚴を別つことなし

復次に法身に五種あり、前の四身に法界身を并するが故に、曼荼羅に五種あり、前の四曼に法界曼荼羅を加ふるが故に、聖位經の偈に曰く、自性及び受用變化並に等流佛德三十六、皆同じく自性身なり、法界身を并するが故に、三十七と成るなり、又禮懺經に自性身の外に法界身を立つ、此等の證文に依るに四身の外に法界身あり、法界身とは六大法身なり、復次に、九字の眞言は^ミイ^クヤ^ウミ^クヤ^ウなり、常に觀じて心を(二) 誠にせよ。

心中に^ア字有り、七寶の(三) 樓觀と成る。

先づ^ウ水の觀を凝し、次に^カ地の觀を作せ、

瓔珞幡蓋を垂れ、摩尼闍伽を飛す。

天は妙衣服を雨らし、人は瞻蔔香を燒く、

(一) 中臺八葉 九品の彌陀を表す
 上品・上上品
 中上品・中上品
 下上品・下中品・下品

(二) 慈氏尊 彌勒菩薩なり

(三) 十二供養 四攝の菩薩なり即ち
 樂・歌・舞・香・華・燈・塗・鉢(以上八供養) 鈎・索・鐃・鈴(以上四攝)

華は四珍の色を染め、鳥は六種の韻を發す、雲路と樹下とに樂あり、内殿と外庭とに舞ふ。說法句句妙へにして、曼荼曼殊を散し、入定窟窟靜かにして、二六の定水を湛ふ、玉流八德澄めり、幢樂六律に會ひ、池水六度を説く、寶瓶五莖を開き、燈明五智を燃す、(一) 中臺八葉を開き、上に九の衆字を觀す、臺上に觀自在をまし、葉上に八佛定にしてゐます、次の八葉の上に、
 アミリア アイダ イカワ カラウシ
 列聖イカワ、有るは次の如し。

八尊の種子身なり、觀音と(二) 慈氏尊と
 虚空と普賢尊と、金剛手と文殊と
 除蓋障と地藏となり、(三) 十二の大供養次第に敷列せり、衆生本有の蓮

覺悟極樂の體なり、清淨の大海衆
 二十五の菩薩 華聚山海會(會恐くは懸の字)



日夜に常に守護す、^{ボクケン} 念の眞言の力

國譯五輪九字明秘密釋一卷

(一) 字印形云云
種字と印契と形像
さなり。

(二) 一念云云
字本不生の理に體
達すれば即心に萬
徳を成ずることな
得て即身成佛す。

(三) 四種の覺
煩惱・天覺・降覺・
死覺
(四) 六境
色・聲・
香・味・觸・法

し、唯だ結し、唯だ纒に(一)字印形の三種の祕密身の相貌を観するの時、亦往昔の無量の重障、現在の無邊の重罪、及び過現所起の無數恆沙の無明妄想等ありと雖、自ら此の密誦の明力、觀念力の故に、還て清淨と成る、纒に此の門に入れば、則ち三大僧祇を(二)一念の咒字に越え、無量の福智を三密の金剛に具し、八萬の塵勞變じて醍醐と爲り、五蘊の旃陀忽に佛慧となる、開口發聲の眞言、罪を滅し、舉手動足の印契、福を増す、心の所起の妙觀自ら生じ、意の所趣の等持即ち成す、貧女の穢庭に忽に如意の幢を建て、無明の暗室に乍ちに日月の燈を懸く、(三)四種の魔軍旗を靡して面縛し、(四)六境の猥賊黨を率して入附す、心王の國土無爲の樂み、踵を旋すに期しつべし、四種法身恆沙の徳、即身に自ら得、又瑜伽經の持誦眞言の功能に云く、一切の佛心の如く、一切佛の化身の如く、百千俱胝不可説不可説の佛説利擢の如く、佛の眞身の如く、佛の擧念の如し、所作の事業みな一切の佛に同じ、所出の言語便ち眞言と成り、支節を擧動すれば、便ち大印契と成て、目に視る所の處は便ち大金剛界と成り、身の觸るゝ所の處便ち大印と成る、是くの如くの證文其の數非一なり、一を以て萬を知れ、願くは有智の人疑惑を生ずること勿れ。

(一) 胎藏三部
佛部・蓮華部・金剛部
金剛界五部・佛部・
蓮華部・金剛部・寶
部・羯磨部

第五に、纒修一行成多門とは、彌陀の一法を修して現當の悉地を期す。問ふ、眞言教の中所有の行業其の數無量なり、金剛胎藏各、無量の門法あり、唯一部一界に入て修行する尙以て無量なり、何に況んや、(一)三部、五部、二十五部等の若干の行業、何ぞ能く修行すべけん、然れば則ち唯一行一法を修して成佛し、又淨土に往生せんと欲すれば教の意趣に違背すと爲さんや。答ふ、全く以て此の教の意趣に違背すべからず、金剛頂、大日經等に、皆此の理趣を説く、衆生の根機種種不同なり、或は一門一尊の三昧に入て、一印一明一觀にして悉地を成ずるあり、正像末の異を論すること無く、之れを修する時、是れ即ち正法なり、悉地時を簡ばず、信修是の時なり。

第六に、上品上生現證門とは、高く大日の悲願を仰ぎ、深く彌陀の本願を信せば、更に以て往生の異路無し、^{オウインワッカイ}韋提月蓋は現身に往生を遂げ、龍樹護法は順次の往生を期す。問ふ、但念密行の行人何等の心願を以てか往生の大願を遂ぐるや。答ふ、四種の廻向是れ則ち往生の親因なり、一には四無量の眞言を誦して、此の功徳を以て一切衆生と共に四大菩薩と等ならしめんと欲して、至心發願深信廻向す、二には佛法の滅相を見て、大師の興隆佛法の大願に等同ならしめんと欲して、至心發願深信廻向す、三に

(一) 斷末摩 末期
(二) 金剛合掌 佛の
右の五指は生界の左の
五指は表す。二手の
五指を交ふるは佛の
不二の義を表す。佛
生佛不二の衆生が
佛界に往生し得る
指交ふるは左右の五
衆生界を攝取するが
義なり。
(三) 金剛縛 五利
使五縛の十支の
煩悩を縛するなり。
此の十支の惑は往
生を障礙するもの
なり。
(四) 開心 既に淨
土の門を開くは淨
土の品の結縛を断す
て性徳の心蓮即ち
九品の蓮の淨土の
門を開くは善提心
論に入智俱提心
剛縛に入智俱提心
如來

は法界の一切衆生をして即ち無上大菩提の果を證せしめんが爲に、至心發願深信廻向す、四には自他所有の善根をして臨終正念にして極樂に往生せしめんが爲に、至心發願深信廻向す、五輪九字を念誦し、兼て臨終の四印明を結誦して、志を極樂に懸け相續の心を止めて、當に(一)斷末摩水の時を待つべし、往生此の時なり、臨終の四印明とは、(二)金剛合掌(三)金剛縛、(四)開心、(五)入智、各々眞言往生の秘事なり。問ふ、眞言行者の往生極樂とは九品の中には何れの品ぞや。答ふ、多くは是れ上品上生なり、經に現世證得歡喜地と云ふ、龍猛菩薩既に初歡喜地を證す。問ふ、極樂に往生するに幾の業あるや。答ふ、三歸五戒、是れ往生の業なり六行四禪十善無我の觀等往生の業なり、四諦十二因縁の觀往生の業なり、他縁の行者は護法戒賢往生の人なり、覺心不生の行者は、樹那提婆往生の人なり、一道無爲の行者は、刈刈イの三字の觀に於て空假中之れを觀ず、南岳天台往生の人なり、極無自性法界の行者は、香象清涼往生の人なり、秘密莊嚴は內證三密の行者往生の人なり、謂く實慧眞然は先に極樂に生じ、後に都率に往く、雜學心を感して一生をして空しく過さしむること勿れ、唯し雜學の善根を以て、極樂に廻向すれば定で懈慢の淨土に生じて、娑婆に還らずして、進んで極樂に生せん、

寂靜の智を召入
す。ある印なり、
開心の位に於て淨
土の煩悩を摧破し
了て其の門を開く
故に次に智臺を淨
土の蓮台に召入
すと金剛薩埵は淨
一切衆生は本有の
金剛薩埵なるが故
に一切衆生を淨土
に引入する義なり
(二) 八不中道 不
生・不滅・不斷・不
常・不一・不異・不
去・不來。

自の善根に於て疑惑の心を生じて、極樂に廻向すれば又た邊地の淨土に生じて、進んで極樂に生せん。問ふ、大日經所説の住心品(住心品の三字)十住心は、諸經論の淺深の義を以て擬屬せんが爲の故か、復た眞言次第の行者の漸次轉證の所經の位の爲なりや。答ふ、正しくは眞言漸次行者の所經の位の爲め、兼ては能く經論の淺深の義を攝せんが爲なり、覺心不生心の行者(一)八不の猶暗きを捨て、一道の轉た明なるを求め、無爲の寂光を見て本地常心を證す、靈山常住にして劫火にも焼かれず、曼荼曼殊晝夜に雨る、淨行菩薩の地より涌出するを見ると云云轉證次第所經顯然せり、求覺の薩埵永く疑慮すること勿れ、天台の別教の有教無人の如くには非ず、若し經ずんば是の處有ることなきのみ、次第の行者必ず住心を経ること初地に住して二地の位に轉するが如し。
第七に、覺知魔事對治門とは、魔事に四種あり、一には魔衆、二には外道、三には惡鬼、四には惡神なり、魔とは魔羅、具なる語なり、是れ障難を作すものなり、譯して殺善と云ふ、善行を障礙するを名けて魔羅と爲す、惡行を作さしむるを外道と名く、身を障へて佛道を退轉せしむるを鬼と名く、善心(善、一本)を障礙して深を棄てしむるを神と名くるなり、乃至或は佛菩薩二乘天人等を現じ、或は顯教一乘等の相似の佛法